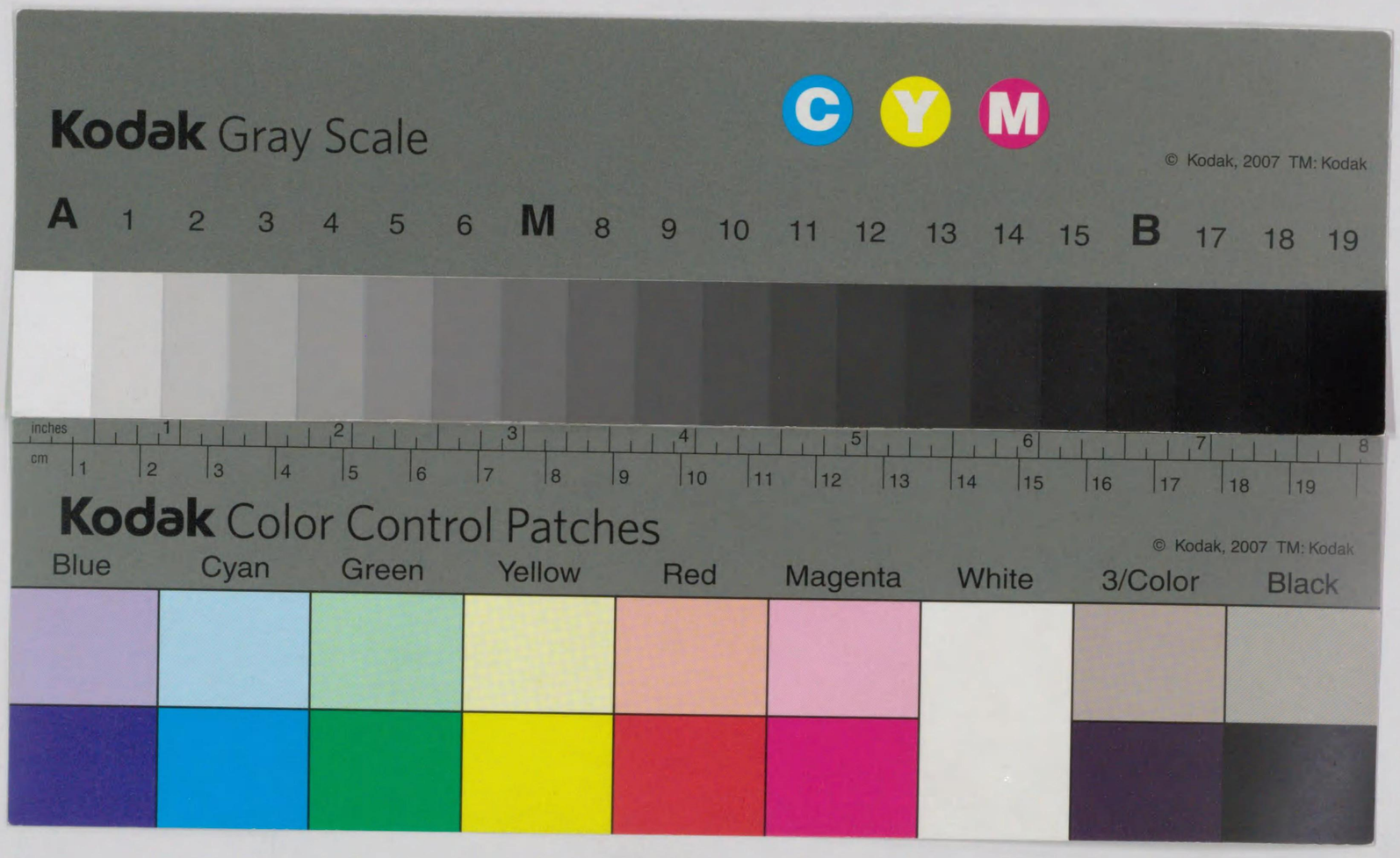


593
19
593-19
12005015267 92

武相叢書第四編

小田原及箱根史料

武相考古會

石野瑛編

S-93-19

例言

一　本書は武相叢書刊行の趣旨に基き、其の第四編として上梓刊行したものである。

一　本書に採收するは小田原及び箱根に現存せる史料である。即ち小田原及び附近にありては西光院、蓮上院、傳肇寺、玉傳寺、本誓寺、報德二宮神社、片岡家、劔持家、青木家、杉田家、高橋家、内田家、箱根及び仙石原にありては石内家、福住家、仙石原村役場、長安寺、勝俣家所藏の文書、記錄、地圖等である。

一　古文書、古記錄の文字は片假名、平假名の混用はもとより、なるべく原本のまゝとした。しかし變体假名は活字の都合にて現行の文字を用ひ、誤字は正しき文字に改めた。

一　本編に收錄する所の「驛鈴餘音」は片岡永左衛門翁の著である。翁は萬延元年正月、小田原本陣四家の一なる片岡家に生れ、六歳にして家を襲いだ。幼時藩儒瞻從五位中垣秀實に就いて學び、十七歳より家業に從ひ、其の後長く町政にも與つた篤學力行の士である。夙に鄕土史料の湮滅を憂ひ、家藏の記錄、文書、地圖等の史料を經とし、見聞を緯として編述せるもの、即ち「足柄史料」及び「驛鈴餘音」である。本編に收載せしは「驛鈴餘音」の一部である。誤脫字、假名遣、句讀點等に就いて校訂し、文体は口語体、

文語体を混用せるも、原文の感じを失はざらんが爲めに、なるべく其のまゝにした。

一　本編の編纂に就いては、史料所藏家各位は快く其の愛藏のものを提示せられ、それ等史料の蒐集には片岡永左衛門氏、草山惇造氏、石内九吉郎氏及び仙石原村役場員各位等熱心に援助せられ、又印刷並に撮影に關しては福原清八氏、松平秀一氏の盡力を受けた。記して深く感謝の意を表する。

一　箱根、仙石原史料の蒐集に就いては、昭和四年八月、三旬の間仙石原に滯留して其の謄寫を行つたが、其の際父喜十郎は炎暑の候、老軀を以て熱心に援助されたことは、本編を刊行するに當つて感慨寔に深いものがある。

一　紙數の都合により本編に收錄することが出來なかつた小田原、箱根の文書等は自餘の足柄兩郡の史料及び「驛鈴餘音」の殘部等と共に續編を以て刊行したいと思ふ。

小田原及箱根史料

目　次

湖西足柄地方の偉人
土肥實平・遠平木像（湯河原町城願寺藏）
曾我十郎・五郎木像（箱根町箱根神社藏）
北條早雲・氏綱畫像（湯本町早雲寺藏）
大久保忠眞畫像（大久保子爵家藏）
二宮尊德畫像（小田原町報德二宮神社藏）
二宮尊德筆蹟（同　前）
二宮尊德筆蹟（小田原町內田家藏）
小田原及箱根史料に就いて
小田原・箱根古圖、文書
小田原、箱根古圖
一　北條期小田原城圖（小田原町片岡家藏）
二　享保十六年辛亥七月、箱根及仙石原圖（仙石原村役場藏）
三　大久保期小田原城門圖（其一）　江戸口、非細田
四　同　前（其二）　箱根口御門、箱根口木戸
五　同　前（其三）　濱手口、谷津門
六　同　前（其四）　大手御門

七　同　　前（其五）常盤木御門、銅御門
八　箱根關所圖
九　仙石原關所圖
一〇　根府川關所圖
一一　箱根關所繪圖（箱根町石内家藏）
西光院文書
一二　天文八年七月廿九日北條氏綱寄進狀（小田原町西光院藏一）
一三　天文十九年五月十八日松原大明神遷宮記寫（同　前二）
一四　元龜三年五月十六日北條氏朱印狀（同　前三）
一五　天正十二年五月十七日北條氏朱印狀（同　前四）
一六　天正十六年三月十九日北條氏寄進狀（同　前五）
一七　天正廿年十一月廿日小田原大明神社領目錄（同　前六）
一八　丑十一月二日北條氏朱印狀（同　前七）
一九　丑十二月廿六日北條氏朱印狀（同　前八）
二〇　辛巳十月廿一日北條氏朱印狀（同　前九）
二一　午九月十七日北條氏朱印狀（同　前一〇）
二二　亥十一月十一日北條氏朱印狀（同　前一一）
二三　八月廿八日北條氏朱印狀（同　前一二）
二四　元祿九年卯月十一日大久保忠增願文（同　前一三）
蓮上院文書
二五　正月八日北條氏朱印狀（小田原町蓮上院藏一）

二六　永祿六年正月十八日僧正融讓狀（同　前二）
二七　二月十七日（貞享三年）加藤孫太夫書狀（同　前三）
二八　寶永元年五月吉日大久保忠增願狀（同　四）
傳肇寺文書
二九　天正十五年丁亥卯月廿六日北條氏朱印狀（小田原町傳肇寺藏二）
三〇　天正十六年戊子六月廿一日北條氏朱印狀（同　前二）
三一　天正十六年戊子六月廿一日北條氏禁制（同　前三）
三二　庚寅二月晦日北條氏朱印狀（同　前四）
三三　三月三日北條氏朱印狀（同　前五）
三四　卯月廿六日北條氏禁制（同　前六）
玉傳寺文書
三五　天正十六年戊子十二月十九日北條氏禁制（小田原町玉傳寺藏一）
三六　卯月廿日北條氏禁制（同　前二）
本誓寺文書
三七　卯月十六日北條氏禁制（小田原町本誓寺藏）
片岡家文書
三八　寶永十六年九月八日德川家光內書（小田原町片岡家藏一）
三九　貞享二年箱根關所手形（大名ノ分）（同　前二）
四〇　弘化三年小田原宿飯盛下女許可狀（同　前三）
覩持家文書
四一　天文十九年庚戌四月朔日北條氏朱印狀（小田原町覩持家藏一）

四二　元和元年十二月朔日舟役並年貢申渡狀（同　前二）
四三　元和八年霜月朔日蜜柑樹許可狀（同　前三）
四四　寛永三年寅十月廿日網一色之村寅御成ヶ可納割付（同　前四）
四五　寛永四年卯十月八日蜜柑木並竹木其の他許可狀（同　前五）
四六　寛永四年卯十月八日舟役ニ付諸役免許狀（同　前六）
四七　寛永四年卯十月十日網一色村卯年御成ヶ可納割付（同　前七）
四八　巳三月十一日舟役ニ付諸役畝免狀（同　前八）
四九　五月十日舟役ニ付諸役免許狀（同　前九）

青木家文書

五〇　弘治三年巳十二月廿日北條氏朱印狀（小田原町青木家藏一）
五一　元龜三年九月十四日北條氏朱印狀（同　前二）
五二　天正三年三月七日北條氏朱印狀（同　前三）
五三　巳（慶長十年カ）二月十五日切石御用ニ付申渡書狀（同　前四）
五四　ミ（慶長十年カ）八月十日青山伯耆守石切人差越方申渡書狀（同　前五）
五五　申（慶長十三年カ）六月廿一日小田原石切人差越方申渡書狀（同　前六）
五六　申（慶長十三年カ）拾月二日從江戸小田原まで石切傳馬狀（同　前七）
五七　二月六日石切人關係書狀（同　前八）
五八　三月三日板倉伊賀守、石切人關係書狀（同　前九）
五九　五月九日增上寺作事ニ付小田原石切出關係書狀（同　前一〇）
六〇　八月十四日大久保甚左衛門、切石關係書狀（同　前一一）
六一　十月八日北之丸作事ニ付切石關係書狀（同　前一二）

六二　慶長十六年亥霜月廿五日傳馬狀（同　前一三）
六三　制禁（天正十八年禁制寫）（同　前一四）

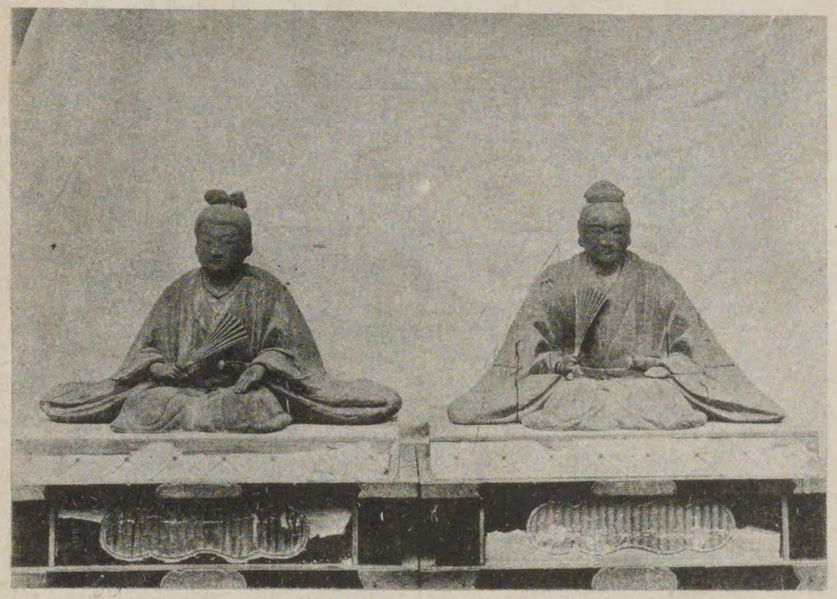
石内、福住、杉田、高橋諸家所藏史料

六四　正德元年五月箱根關所高札文（箱根町石内家藏一）
六五　箱根關所手形（武家、百姓ノ分）（同　前二）
六六　箱根關所見合合鑑（大名、武士ノ分）（同　前三）
六七　箱根（石内）本陣宿帳（同　前四）
六八　慶應四年八月御東幸の際の觸書（同　前五）
六九　丙寅六月十一日北條（氏康）朱印狀（湯本町福住家藏）
七〇　天正五年丁丑三月廿日北條氏朱印狀（足柄上郡杉田家藏）
七一　天正十八年四月豐臣秀吉禁制（足柄下郡高橋家藏）

仙石原村文書　記錄

一　寛文拾貳年子年相州西郡仙石原村諸事書付之覺（仙石原村勝俣家藏）
二　寶永貳年酉ノ十一月請取申御米之事—湯所ニ罷成候ニ付御褒美（同　前）
三　享保十六年辛亥十一月證文之事—關所要害ニ付（同　前）
四　元文元丙辰年十二月差上申證文之事—地獄山より村洗足湯引取のこと（同　前）
五　天明七年未ノ三月猪圍拜借割渡帳（同　前）
六　寛政七卯五月二十七日御鷹餌指之儀ニ付廻狀（同　前）
七　未八月箱根御關所覺（同　前）
八　元祿三庚午年九月長安寺由緒書之夛（仙石原村長安寺藏）
九　丑正月往來手形（同　前）

土肥實平（向つて左）・遠平（右）父子木像　　城願寺藏



曾我十郎（向つて左）・五郎（右）兄弟木像　　箱根神社藏

一〇　文政元寅年殿樣思召御趣意御箇條之寫（仙石原村役場藏）　一一
一一　文政六未年二月村送り一札（同　前）　一三
一二　文政十二己丑年二月村替一札之事（同　前）　一四
一三　天保十己亥年二月一札（同　前）　一五
一四　安政二乙卯年三月人別送之事（同　前）　一六
一五　安政三丙辰年三月一札（同　前）　一七
一六　安政六未年正月往來手形一札之事（同　前）　一八
一七　天保十一年庚子五月仙石原御關所山越一件（同　前）　一九
一八　明治二年勘書（箱根戰爭の節）塚本長馬時春手記（箱根町塚本家藏）　二〇

驛鈴餘音

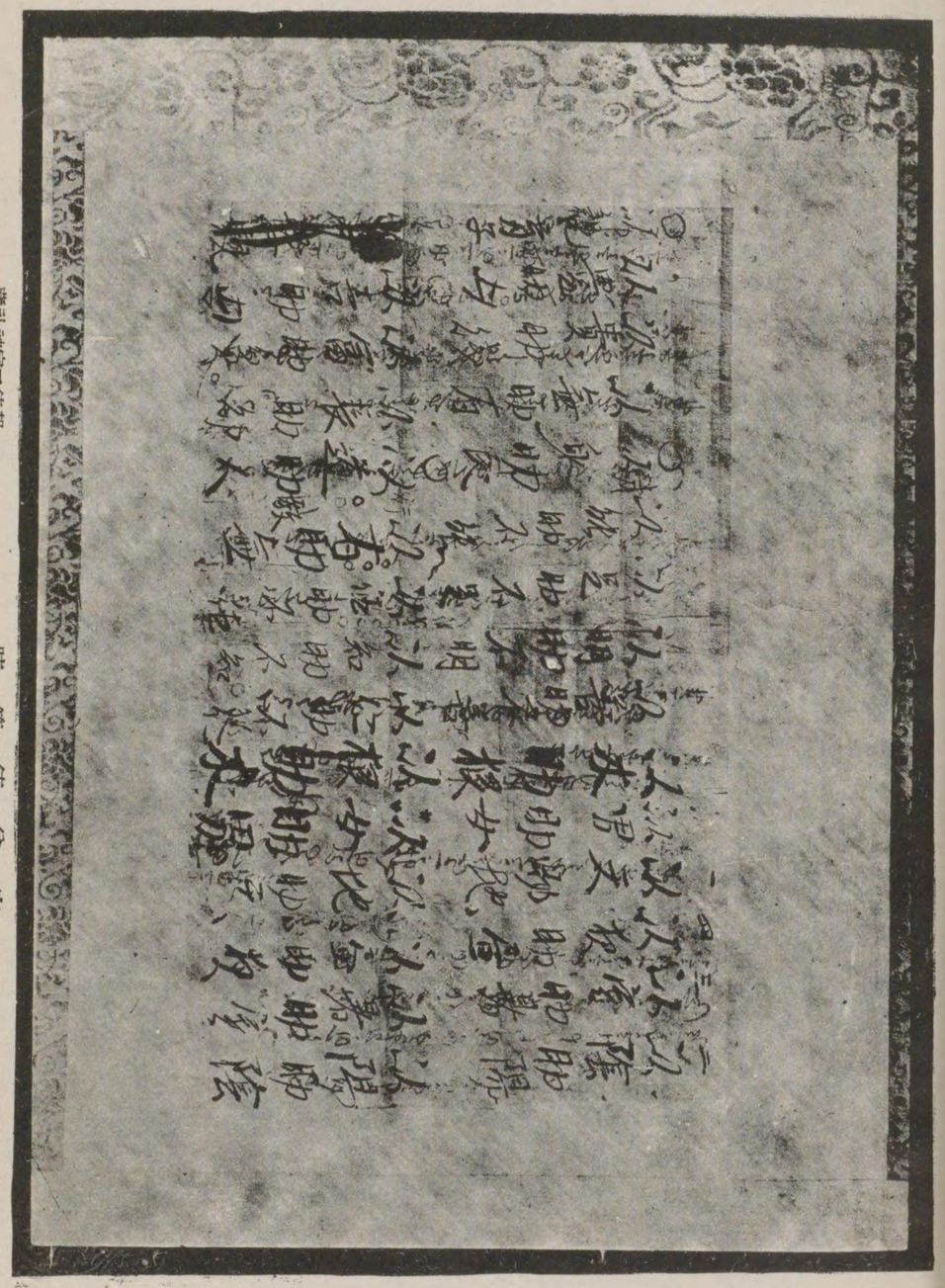
一　足柄郡の東海道　一一
二　箱根御關所日記抄　四一
三　北條時代の小田原城蓮池四門の位置に就いて　八七
四　小田原宿の江戸時代の公用信書と荷物の送達　八八
五　城下町としての小田原の保護　九一
六　小田原に於ける本陣の生活　九二
七　明治維新以前の小田原の年中行事　一一三
八　小田原の鎭守松原神社　一一四六
　　（終）　一四七
　　一七七　一七八
　　一九五　一九六
　　二一七

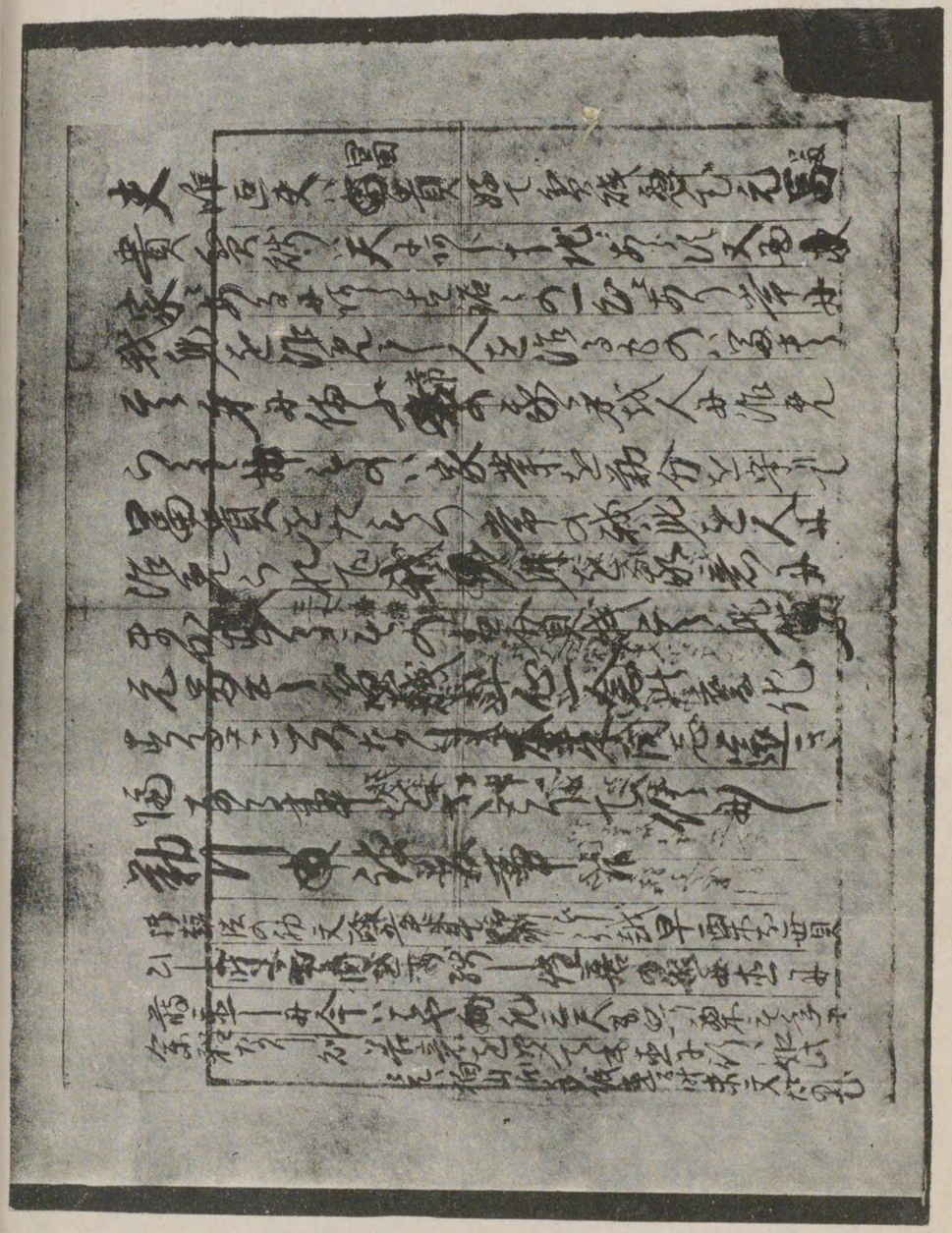
北條氏綱畫像　早雲寺藏

北條早雲畫像　早雲寺藏

二宮尊德畫像　報德二宮神社藏

大久保忠眞畫像　大久保子爵家藏





小田原及箱根史料に就て

石野瑛

相模の西部足柄上、下兩郡の地は、古く石器時代、金石器併用時代より開けて、域内餘綾地塊、丹澤山彙、箱根連山の山麓地帶には、諸所にそれ等の時代に屬する遺蹟、遺物が存在し、(拙著「考古雜稿」等に詳述) 成務天皇の朝 (三世紀) 國郡の制を定め給ふに及び、此の地域には師長國を置かれた。我が國東西兩地間の障壁をなす箱根連山の交通路は、古くは連山の鞍部なる足柄峠を越え、後の坂本驛の地に出で山際の道 (今の大体矢倉澤街道) を取つたが、次では足柄又は箱根を通つて、小總驛 (下中村小船) を經、國府 (初めの大住國府は今の比々多村、平安中期以後の餘綾國府は國府村) を過ぎ、箕輪驛 (比々多村笠窪) 濱田驛 (海老名村大谷) に至つたが、時代の移ると共に箱根を越えて海際の道 (大体今の東海道) が主用せられた。實に古往今來此の地方は交通上の要衝である。

隨つてそれ等古道に近く千代觀音 (もと今の上府中村千代にあつたが、後下府中村飯泉に移して勝福寺と號する) の如き古刹があり、式内社寒田神社 (松田町) 加茂神社 (下府中村鴨宮) の如き古社もある。また高田、垂氷兩郷名が食封のうちに見えて居るから墾田も古くから行はれたのであらう。平安時代末期から鎌倉時代にかけては相模平氏に屬する土肥氏、早川氏、中村氏及び波多野氏に屬する大友氏、松田氏、川村氏、それから下總平氏に屬する曾我氏の如き武士が占據した。而して源賴朝が伊豆の謫所に起り、石橋山に陣して一たびは敗れたが、域内西部の

杉の密林や荊蕀の叢生せる溪谷の地利と、地理を知悉せる土肥氏の助力はもとより、箱根權現別當行實、其の弟永實、小道地藏堂の僧純海等の厚志によつて、賴朝をして再擧の機を得しめ、遂に大志を成すに至らしめたので、此の地利とそれ等の人和なくんば、鎌倉時代以後の國史はまるで模樣變へされたに違ひない。

かくて賴朝の覇業が成るに及んで箱根權現は伊豆山の社と共に盛大となり、土豪も亦本領に安堵した。そして足柄兩郡地方の石橋山、眞鶴などの地名や土肥氏、曾我氏の如き人名が史上に顯はるゝに至つたのであるが、鎌倉初期に於いて其の最も人口に膾炙せられたものは、かの曾我兄弟の讐討であつた。其の後鎌倉末期、吉野時代には水飲峠、大崩の役、箱根、竹の下の戰などが演ぜられた。次いで應永の頃大森氏は駿東の地より小田原城に進出して城を築いた。大森氏は賴春、憲賴、氏賴、實賴、藤賴、定賴相繼いだが、明應四年に北條早雲は箱根山中の狩獵に名を藉りて、一擧小田原を奪取したのであつた。

北條氏は早雲より氏綱、氏康、氏政、氏直五代約百年。其の間上杉謙信、武田信玄の來侵があつたが、能く城を保ち、民政に意を注ぎ、諸般の制度を整へ、租稅は四公六民とし、また文教を奬むるなど概して善政を行つた。そして當時の小田原には鍛治、鑄物師、石切人、疊刺、塗師、染殿、紺掻の如き職人や多くの商人など、諸國より集り來つて中國の大內氏の山口と共に、群雄割據時代に於ける地方文化の一大中心地となつたが、天正十八年七月、遂に豊臣秀吉によつて攻略せられ、德川家康が關東を領し、後幕府を江戸に開くに及び、我が相模の鎌倉、小田原の文化は京阪のそれをも加へて江戸に於て集大成せらるゝことゝなつた。

而して小田原は天正十八年八月、大久保忠世の采地となり、二世忠隣が繼いだが、事を以て改易せられ、一時番城

となつた。次で稻葉正勝、正則、正往の采邑であつたが、貞享三年正月大久保忠朝（敎隆の次男敎博）再び祖先の舊地を得て、小田原城主となり、忠增襲ぎ其の後八代忠禮に至り、明治二年の藩籍奉還に及んだのであつた。又忠朝の次男敎寬は子孫相襲いで相模國荻野山中を治めて居た。其の間小田原の賢主忠眞の時、農聖二宮尊德が出現して能く鄕村を感化し、其の名は遠近に傳はつたのであつた。

江戸時代二百六十餘年、足柄兩郡の地には相模八關所のうち、箱根、根府川、矢倉澤、仙石原、川村、谷ヶ村の六所に關塞を居え、守衞の吏を置いて往還を監察せしめたが、就中箱根關は東海道の要衝に當り、箱根宿、小田原宿、酒匂川越川會所と共に、民政、交通、俚俗の上に一種特別なる雰圍氣を釀成した。そして西國大小名の參勤交代、琉球、朝鮮使節の來聘、其の他巨多の旅人は樣々の史實や挿話を遺した。明治戊辰に至つては小田原藩は一時佐幕黨に左袒して官軍に抗せんとせしが、中垣秀實が大義を論じて小田原を兵火の裡より救ひ、明治元年天皇の東幸を迎へたのであつた。かくて同二年六月版籍を奉還し、明治四年七月廢藩に際して一時小田原縣が置かれ、同年十一月足柄縣に屬し、同九年四月神奈川縣の所管に入つたのであつた。

如上の歷史を有する足柄兩郡地方は隨つて史蹟に乏しくないのであるが、現今此の地域に遺存する文書、記錄、古圖の如き史料は、大森期以前のものは殆んど見當らない。水戸市竹隈町大森忠彦氏、其の弟橫濱市中區住吉町大森尹義氏は大森氏の子孫であるといふ。同家に大森氏系譜を藏する。大森期及びそれ以前のことは稿を更めて記すことゝする。今之れが調査を進めて居る。而し北條期のものは割合に多く遺つて居る。これは一面に年代が比較的に近い爲めでもあるが、他面には北條氏の治世約百年に亘り、制度も可なり整つて居たことを語るもので、天文、

弘治、永祿、元龜、天正年間のものである。本編に收載するものは西光院文書、蓮上院文書、傳肇寺文書、本誓寺文書、劒持家文書、靑木家文書等で、天文八年北條氏綱寄進狀を始め、北條氏朱印狀十九通及び、天文十九年松原大明神遷宮記寫、劒持家文書の天文十九年一色百姓宛文書、靑木家文書の弘治、元龜、天正及び江戶時代の石切人に關する文書等である。其の他大井の三島神社や二三の寺及び眞鶴町等にも、北條氏朱印狀を藏して居るが、之れは續編に讓ることゝした。城內箱根神社は創建古くして、皇室の御崇敬も篤く、又鎌倉幕府創立以來武家の祈願所となり、源賴朝を初め歷代の將軍、執權は恒例として參拜し、其の後の武人も崇信したのであつた。今同社には足利時代から織田、豐臣時代の古文書が十七通、德川時代のものが十二通、古記錄には箱根山緣起並序を初め十種があるが、それ等は同社編纂の「箱根神社大系」に收錄してあるから、本編には揭載しないことゝした。

大久保期の文書、記錄は幕末のものを加へれば數も數も多いが、本編には劒持家の元和、寬永年間の文書、西光院文書の寬永元年の大久保忠增の願狀を初め、片岡家の小田原本陣、箱根關所に關するもの、弘治三年小田原飯盛下女許可狀等や、石內家の箱根關所に關するもの及び靑木家の石切（小田原石—根府川石）に關するもの等を收む。何れも民政史、交通史、風俗史等の研究に價値が多い。それ等の現存史料は北條期、大久保期を通じて社寺に宛てられたるもの最も多く、其の他百姓に宛てたるもの、鑄物師、石切人、疊師、染物師等の職人に關するものこれに次ぎ、一に又此の地方の沿革を知るべき貴重なるものである。現今傳はらないものゝうち、興味深き文書は引用せる諸種の書物から轉載して參考に備へることゝする。（續編に揭出）。而して舊小田原本陣片岡家は江戶時代に於ける多くの記錄、文書を藏して居るが、幸に同家の當主永左衛門翁が、歷史の研究に最も深き興味を有たれ、幼少の頃よりの見聞によつて、それ等の記錄、文書はもとより其の他の史料により透徹せる解釋、考覈をなし「驛鈴餘音」と名づけ、讀む者をして容易に往時の民政、交通、風俗等の實狀を察知するに便せられた。翁の好意により本編に收めて廣く其の益を頒つことゝした。尙同翁には別に「足柄史料」「增補湘中雜記」の著があるが、本編に於て割愛せる足柄上下兩郡に散在せる文書等と共に、本叢書の一編として刊行することを翁と約して居る。本域に於て大久保期に現はれた偉人二宮尊德先生並に報德教に關する史料は「二宮尊德全集」三十六卷があるから、本編には先生を景仰する爲め、其の肖像と筆蹟（報德二宮神社所藏及び內田家所藏）を揭げるに留めた。

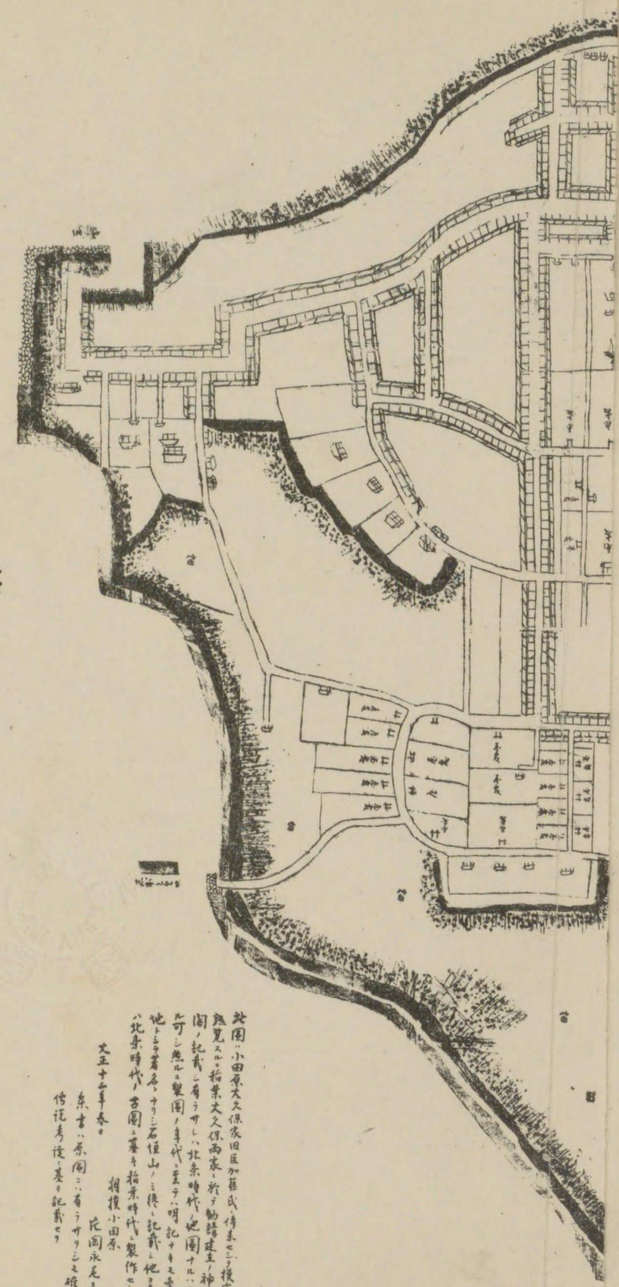
本域の古圖は、北條期の小田原を圖したものゝ寫は片岡氏が藏し、大久保期のものは大久保普請役所の圖を寫せる片岡家のものゝ他に、小田原、箱根、仙石原の諸所にそれ〴〵小田原城圖、箱根全圖、箱根、仙石原、根府川各關所圖等數圖がある。畫像、木像の類は足柄下郡湯ヶ原町城前寺の土肥實平、遠平父子木像、箱根神社の萬卷上人の木像、曾我十郎、五郎兄弟木像、湯本町早雲寺北條氏五代畫像、大久保子爵家に大久保忠世、同忠隣、忠眞畫像、足柄上郡櫻井村柏山なる二宮家、同郡岡本村劒持家、足柄下郡湯本町福住家、小田原町報德二宮神社に尊德先生畫像、同町男澤家には先生の木立像等がある。此の地方の聯額の如き木刻及び金石文は武相各地のものと共に別冊に收載することゝする。

大正二年十月、神奈川縣廳舍（大正震災前の廳舍）が落成した時、縣では其の記念の爲めに、民政資料展覽會が開催せられ「神奈川縣民政資料小鑑」といふ冊子を作られたが、幸に私も其の委員の一人に加へられたので、其の際に本域に關する多くの史料を覩る機會を得たのであつた。其の後十年、大震災の際に其のうちの貴重なる十數種

小田原・箱根古圖文書

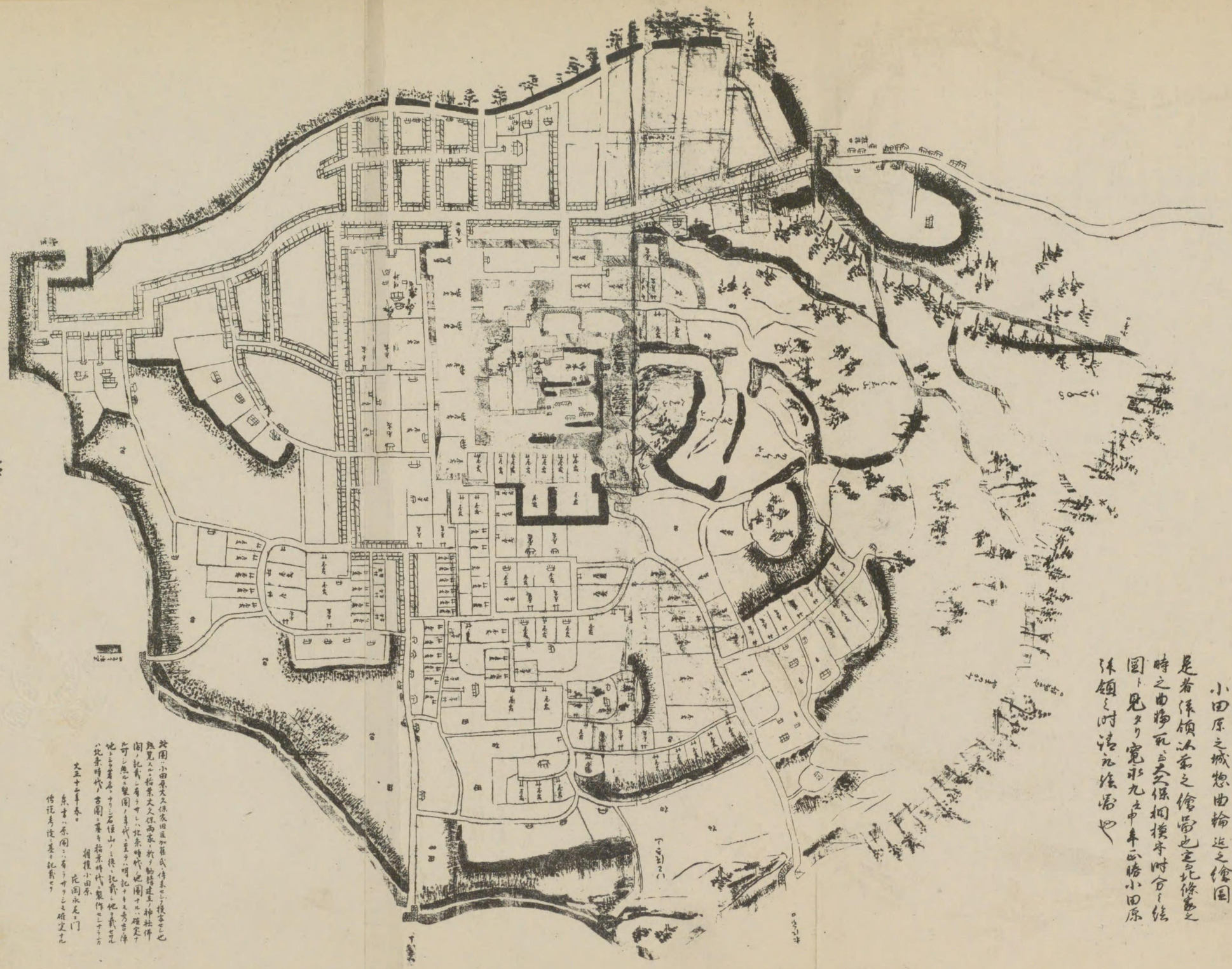
の史料が燒失散逸したのは遺憾のことである。私が主として本域の史料の調査蒐集を始めたのは、昭和三、四年からであつたが、史料所藏家各位は快く其の愛藏のものを提示せられ、またそれ等の蒐集には、片岡永左衞門氏、草山惇造氏、石内九吉郎氏は熱心なる援助をたまふたことは、深く感謝する所である。史料蒐集中昭和四年八月には仙石原に滯留して、硫黄の噴き出た様な黄い薇の生へた箱根、仙石原關係の記錄や文書の中で三旬を過ごした。仙石原の記錄、文書は殆んど凡て江戸時代のものである。之れが謄寫には父喜十郎は老齡を以て熱心に助力されたが、其の翌五年十二月忽焉として急逝した。今本編を上梓するに當つて當時を追懷すること切である。其の前後幾度か足柄兩郡の地を訪ひ、各地に散在せる史料や、考古學上の遺蹟、遺物を觀た。それ等の史料の全部は到底此の一編に收錄出來ないから後編に讓ることゝした。

以上小田原及び箱根地方の沿革を略叙し、此の地域に於ける現存せる史料に就いて大觀し、これが調査蒐集の經過を記したのである。



（縦五尺九寸七分・横八尺一寸四分）

片岡家藏



北條期小田原城古圖

片岡家藏

（縱五尺九寸七分・橫八尺一寸四分）

北條小田原城門圖（其一）

（縱五尺一寸五分・橫九尺一寸九分）

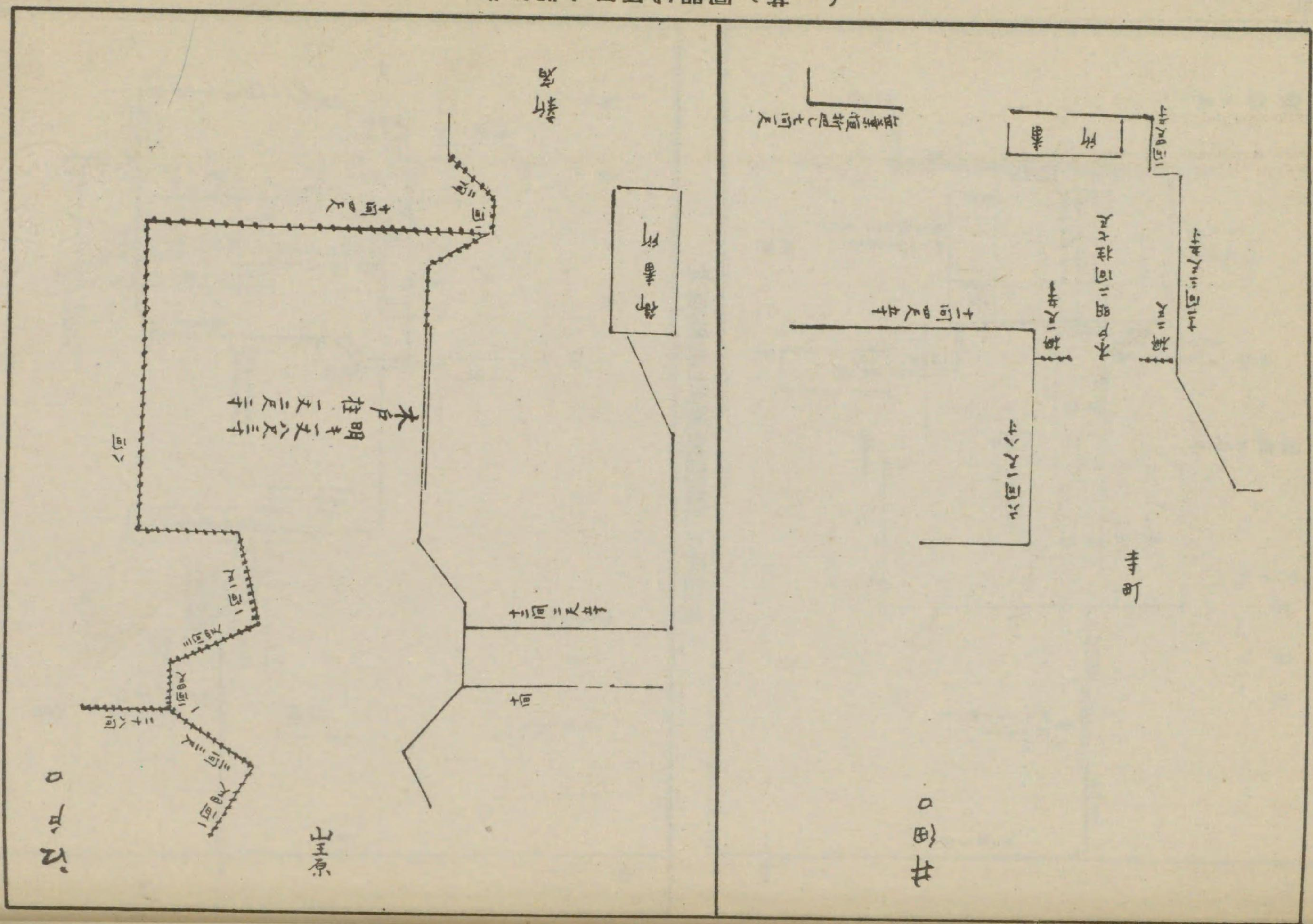
仙石原村役場藏

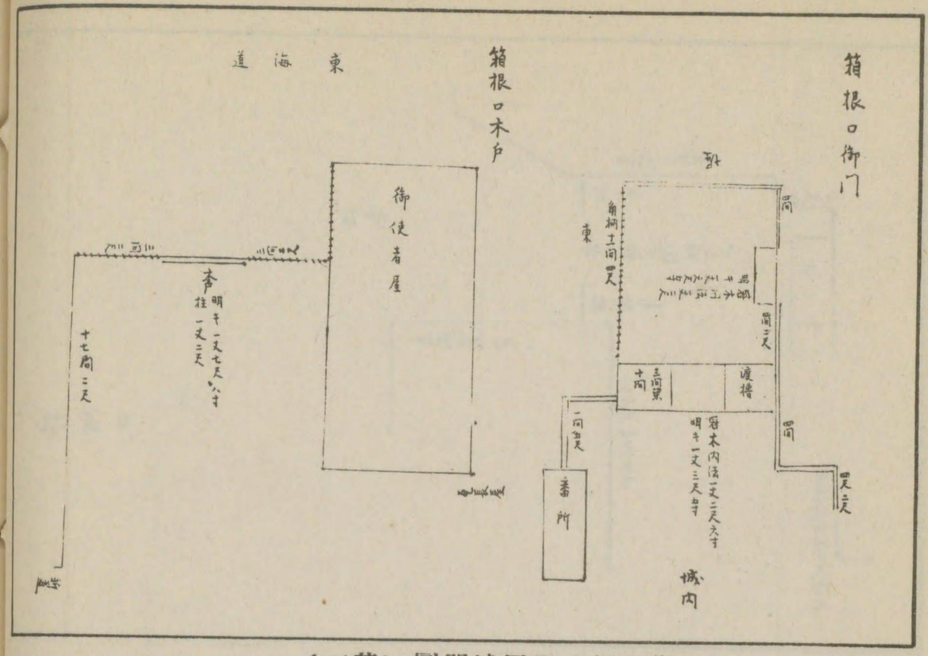
享保十六年箱根地圖

仙石原村役場藏

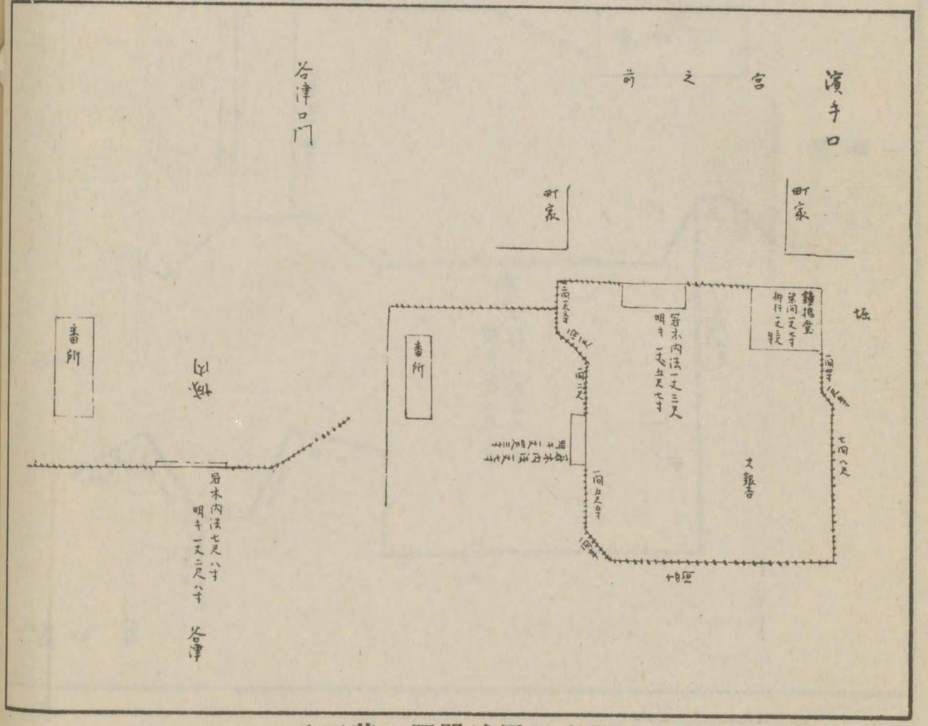
（縦五尺一寸五分・横九尺一寸九分）

北條期小田原城門圖（其一）

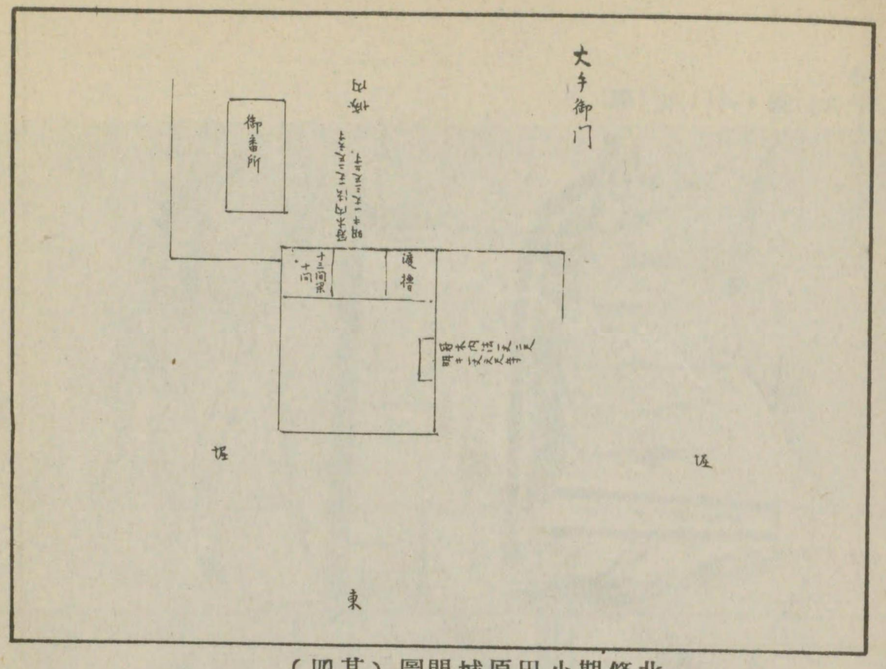




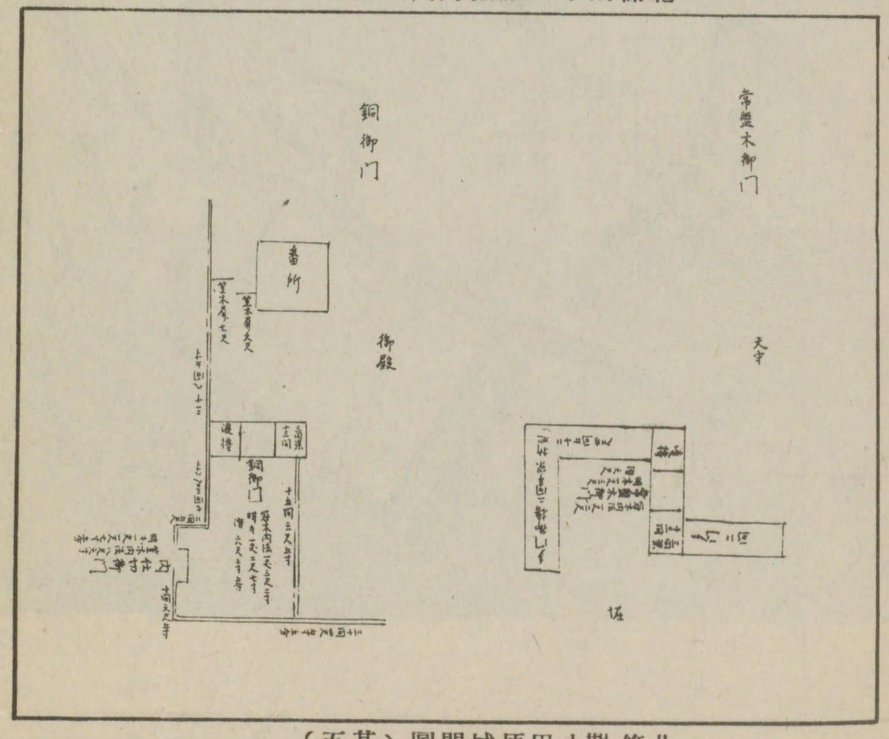
北條期小田原城門圖（其二）



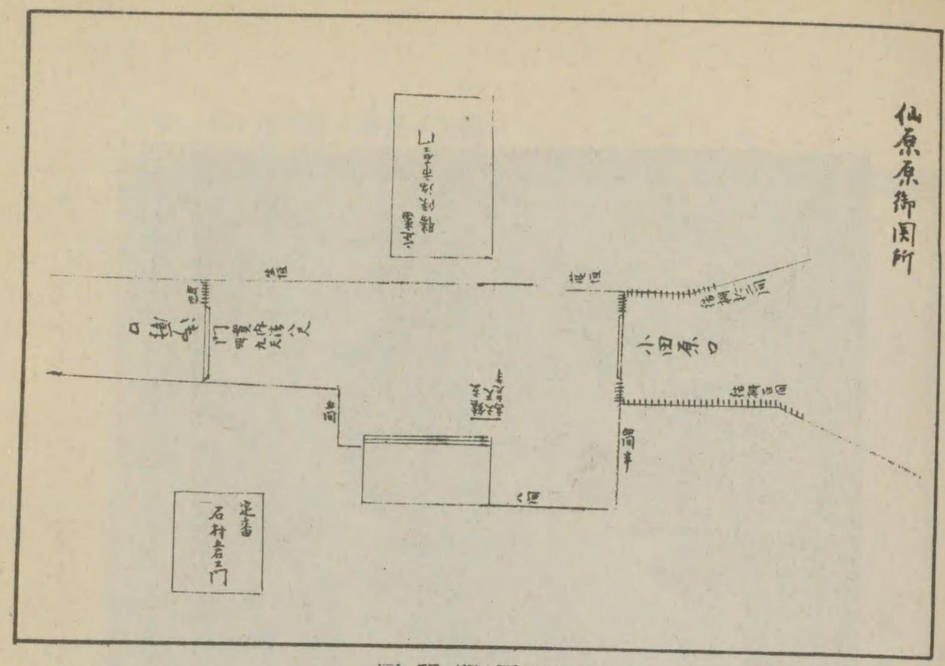
北條期小田原城門圖（其三）



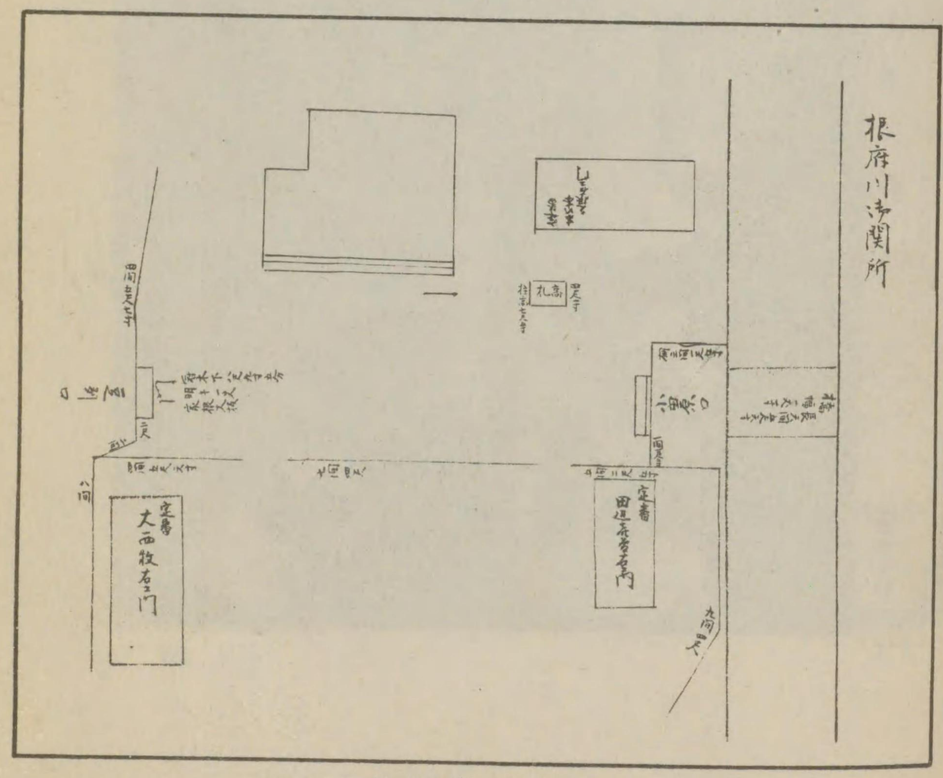
北條期小田原城門圖（其四）



北條期小田原城門圖（其五）

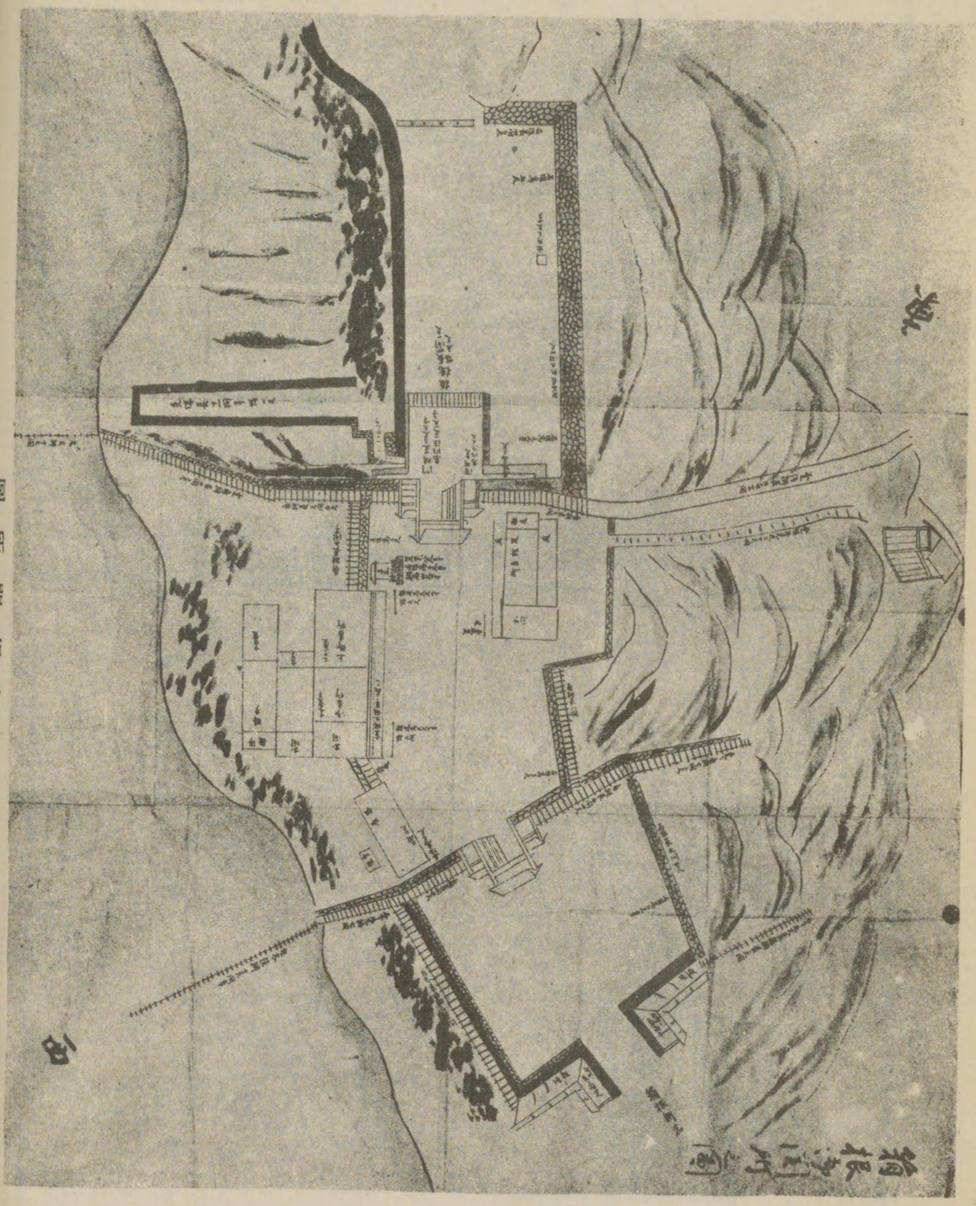


仙石原關所圖

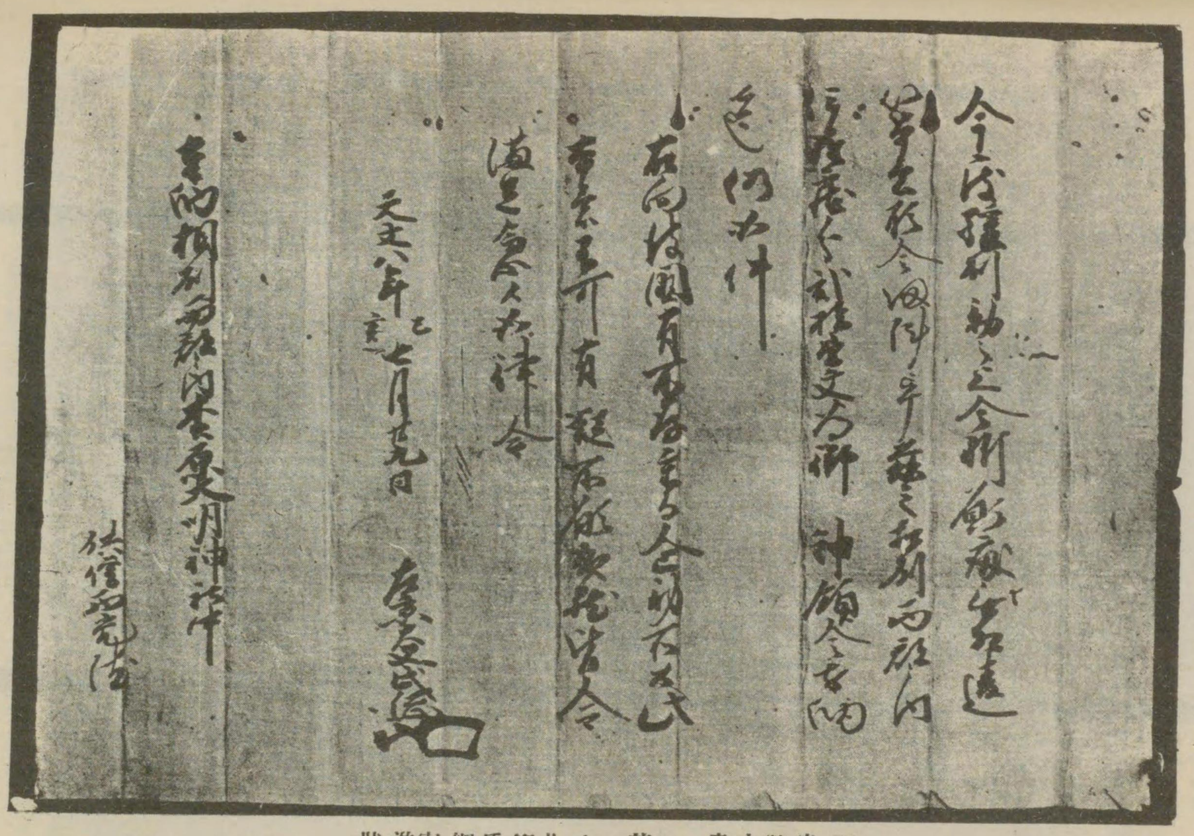


根府川關所圖

（縦一尺二寸・横一尺七寸）

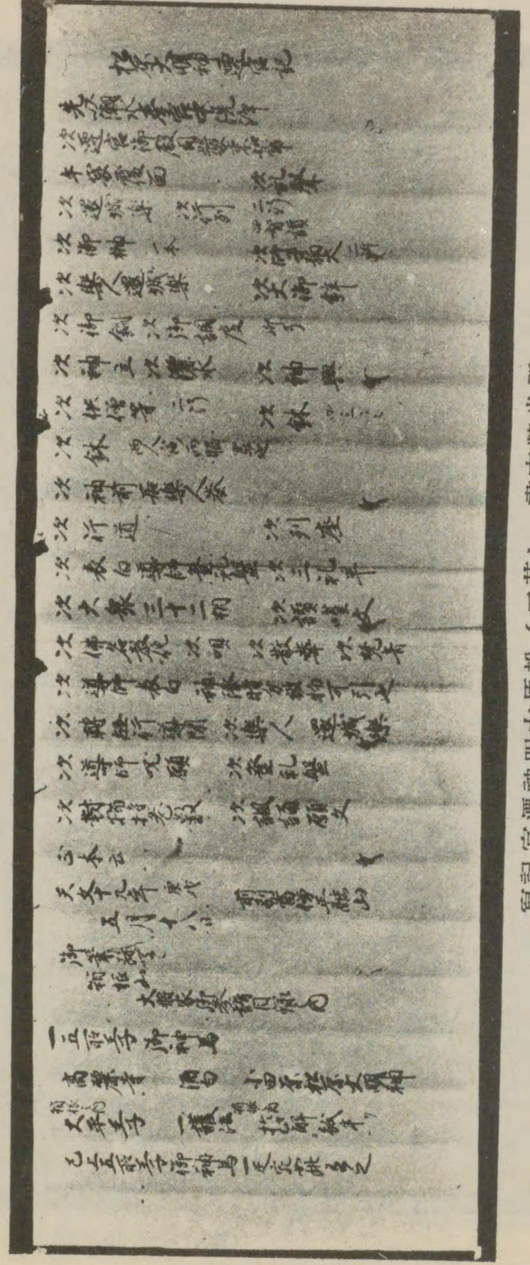


箱根關所繪圖　石內家藏



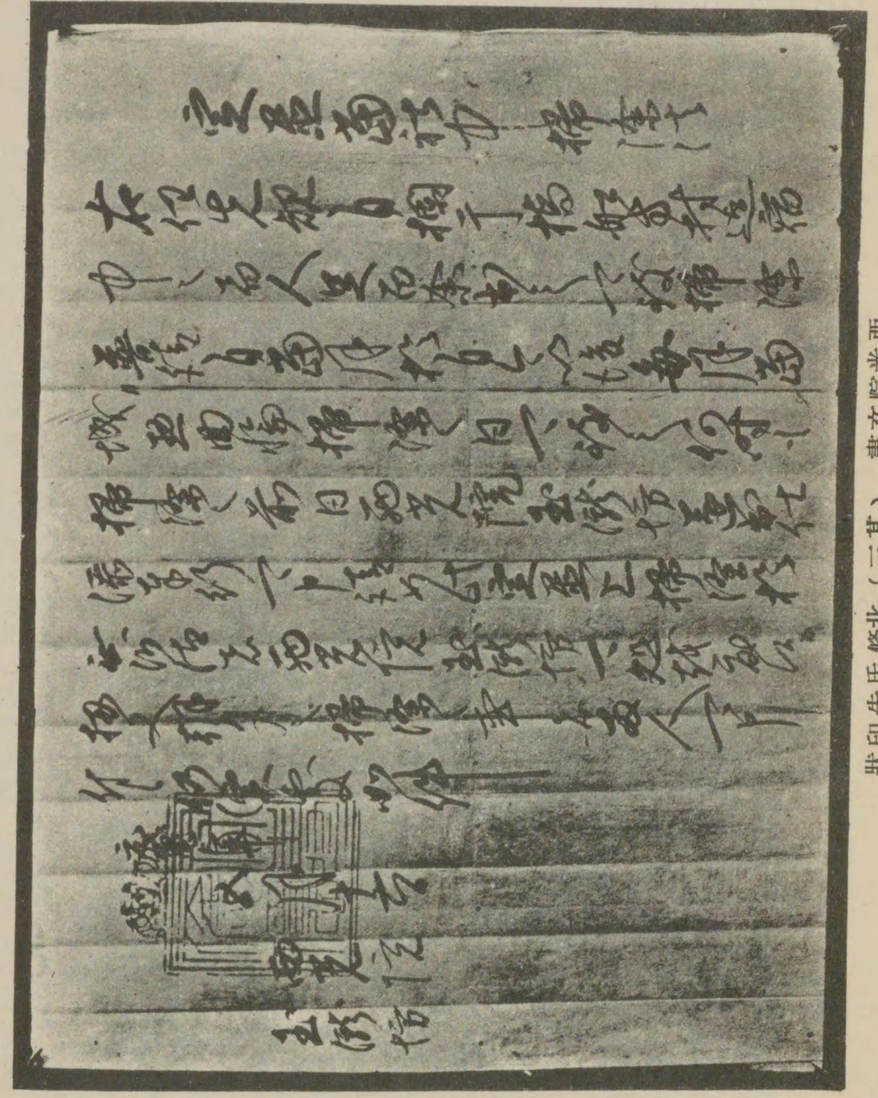
西光院文書　（其一）北條氏綱寄進狀

（縱九寸四分・横一尺三寸三分）



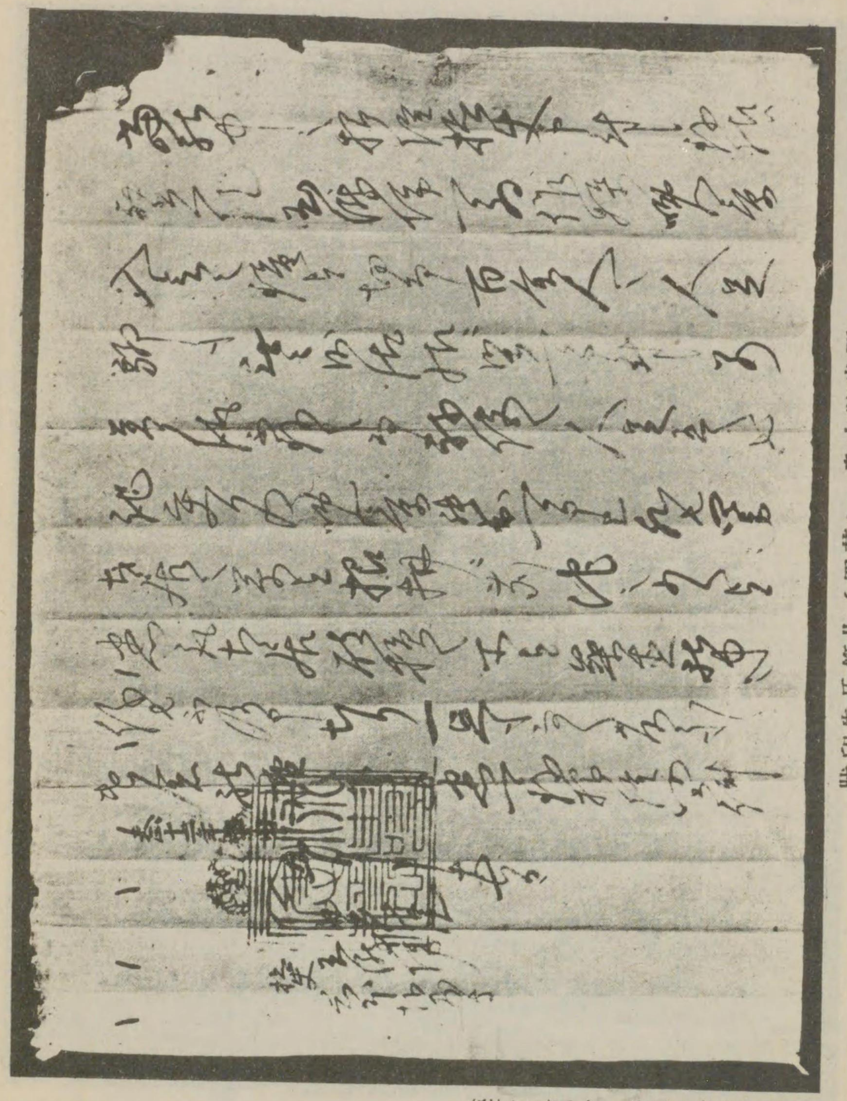
寫記宮遷神明大原松（二其）　書文院光西

（縦一尺四分・横二尺八寸九分）



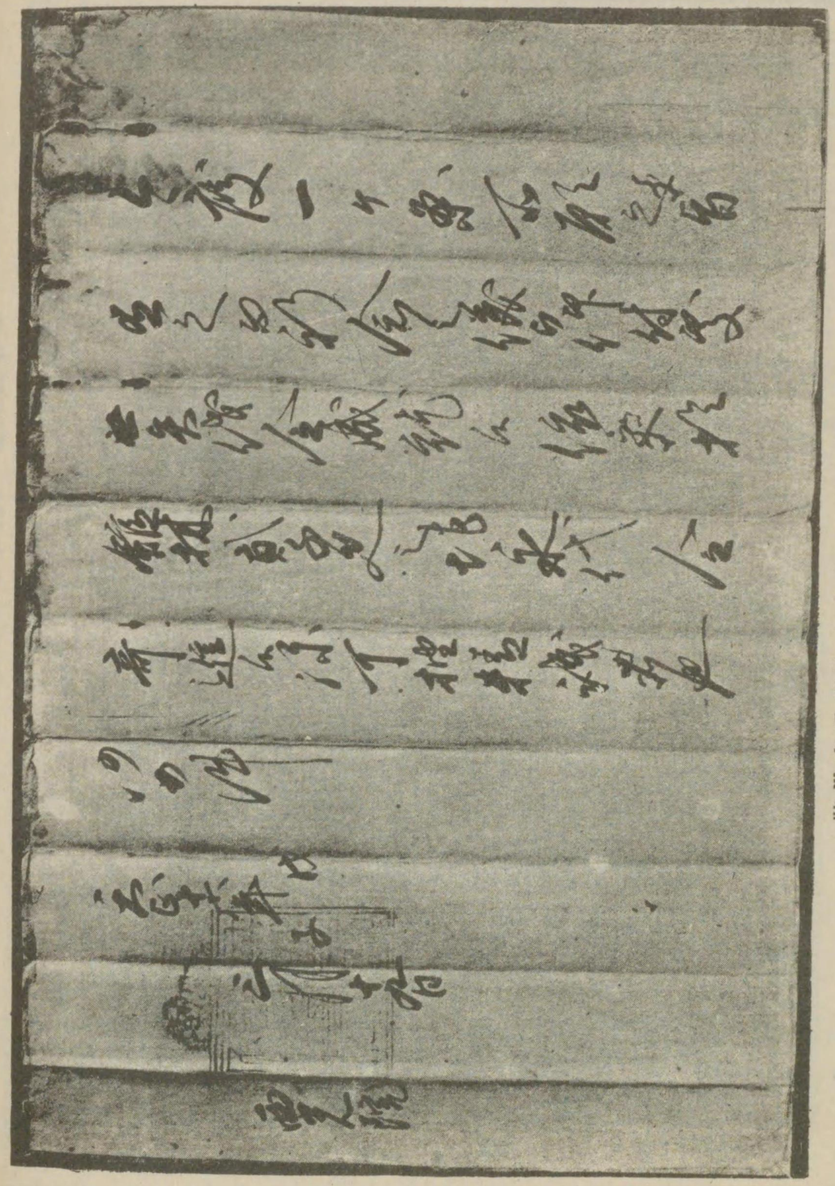
狀印朱氏條北（三其）　書文院光西

（縦一尺四分・横一尺三寸三分）



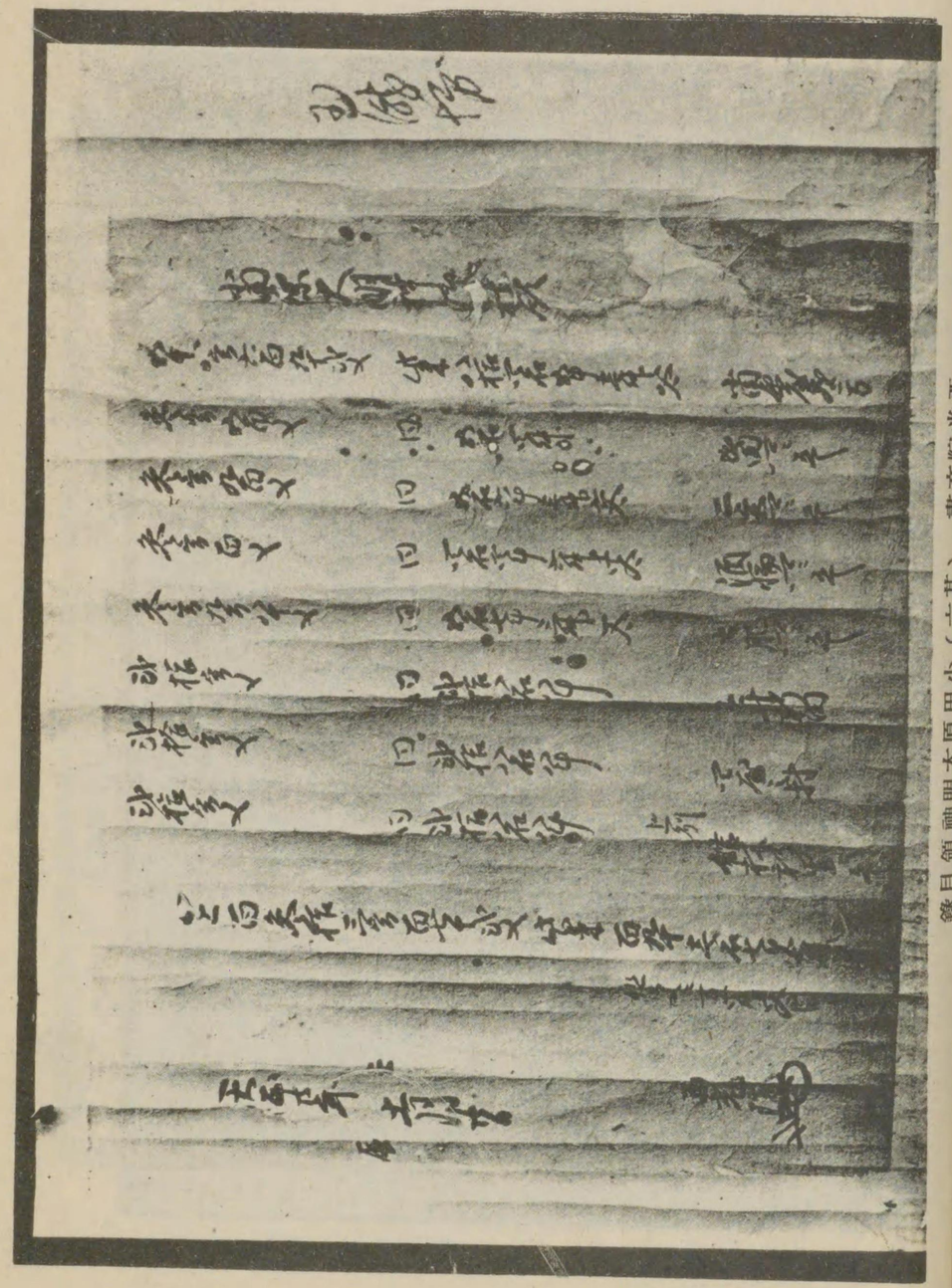
狀印朱氏條北（四其）　書文院光西

（縱一尺四分・横一尺三寸六分）



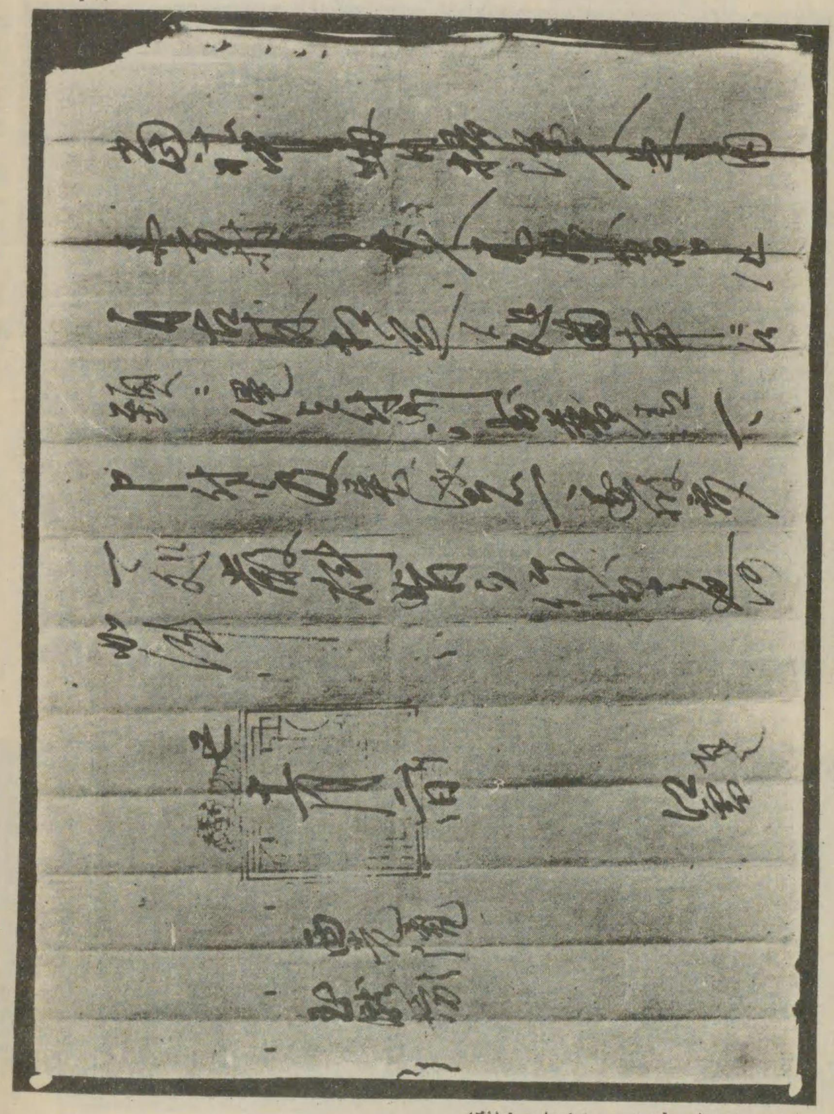
狀進帝氏條北（五其）　書文院光西

（縱一尺五分・横一尺五寸五分）



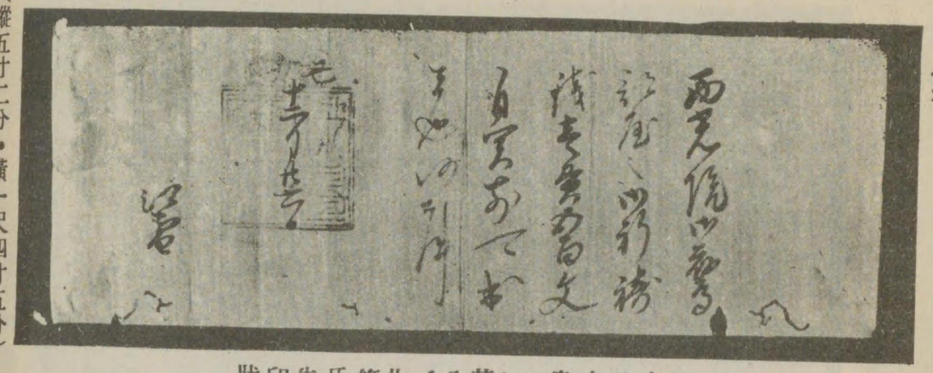
（縦九寸八分・横一尺七分）

錄目領神明大原田小（六其）　書文院光西



（縦一尺五分・横一尺四寸二分）

狀印朱氏條北（七其）　書文院光西



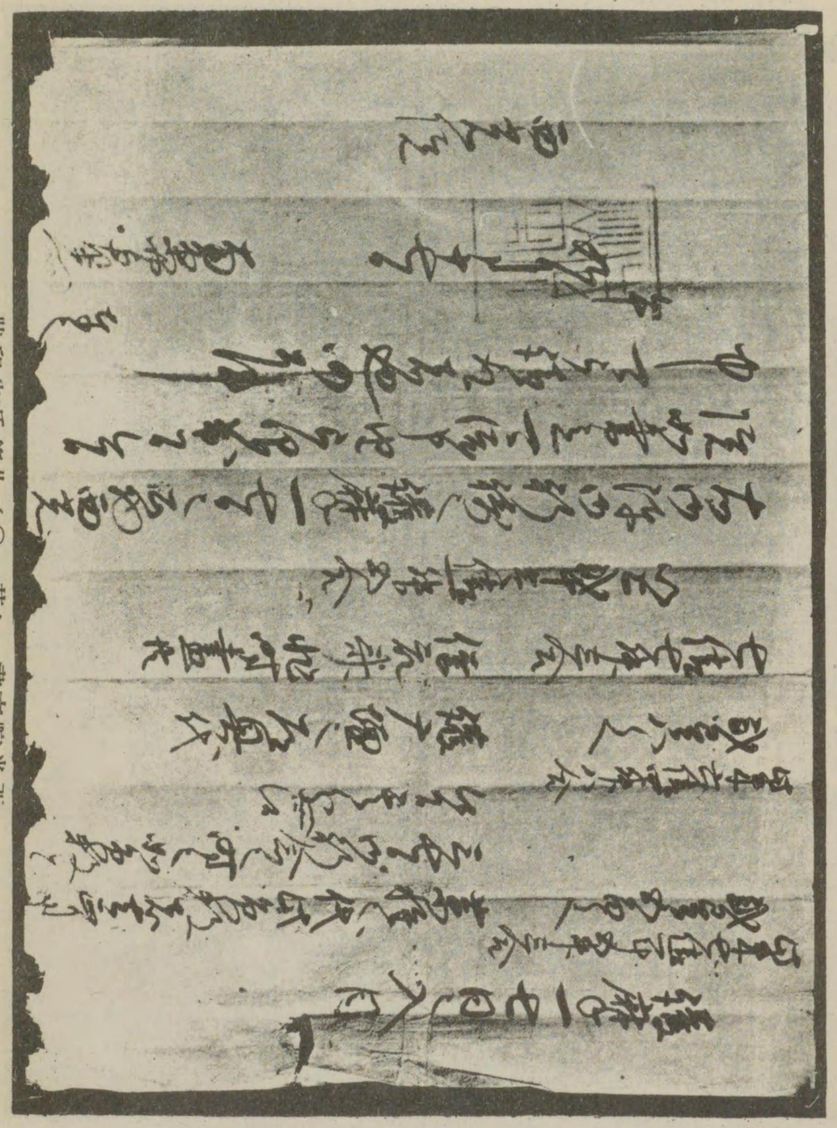
（縦五寸二分・横一尺四寸五分）

西光院文書　（其八）北條氏朱印状

（縦一尺五分・横一尺三寸九分）

西光院文書　（其九）北條氏朱印状

（縦一尺五分・横一尺三寸九分）



北條氏朱印状（〇一其）　書文院光西

（縦一尺六分・横一尺四寸二分）

狀印朱氏條北（一一其）　書文院光西

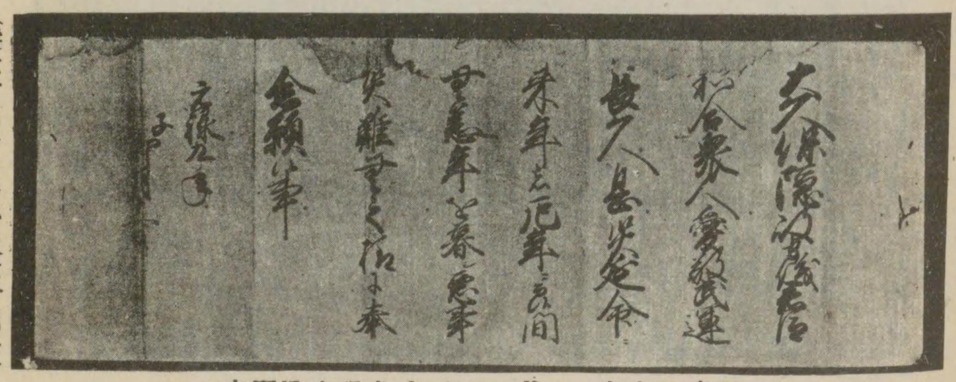
1111

（縦一尺五分・横一尺四寸五分）

西光院文書　（其一二）北條氏朱印狀

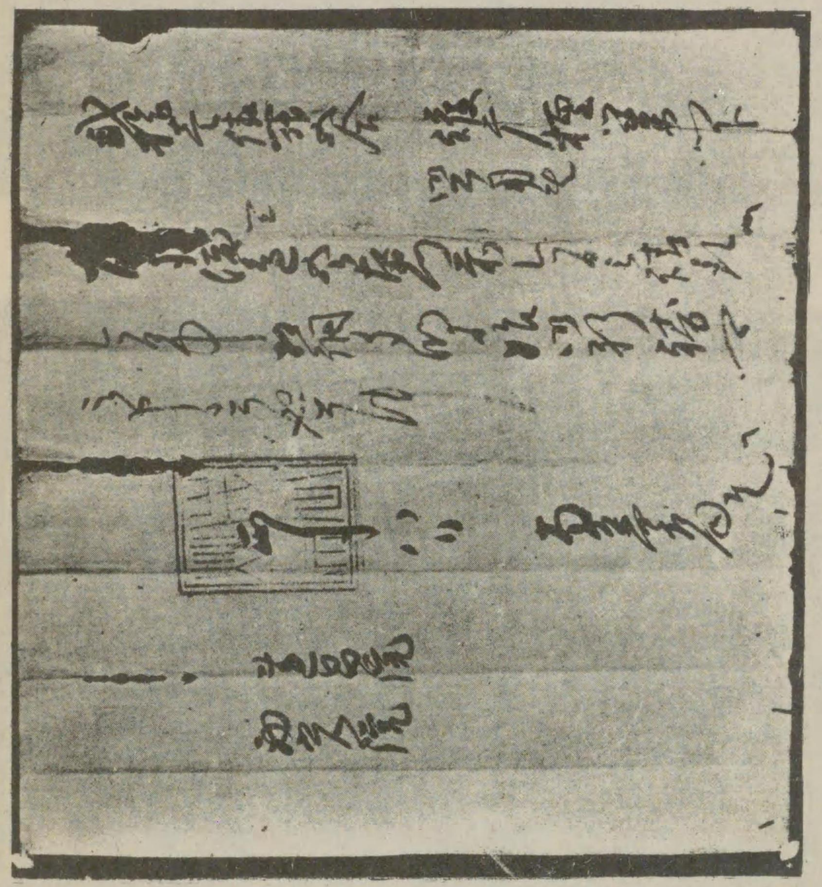
1112

（縦六寸四分・横一尺六寸四分）



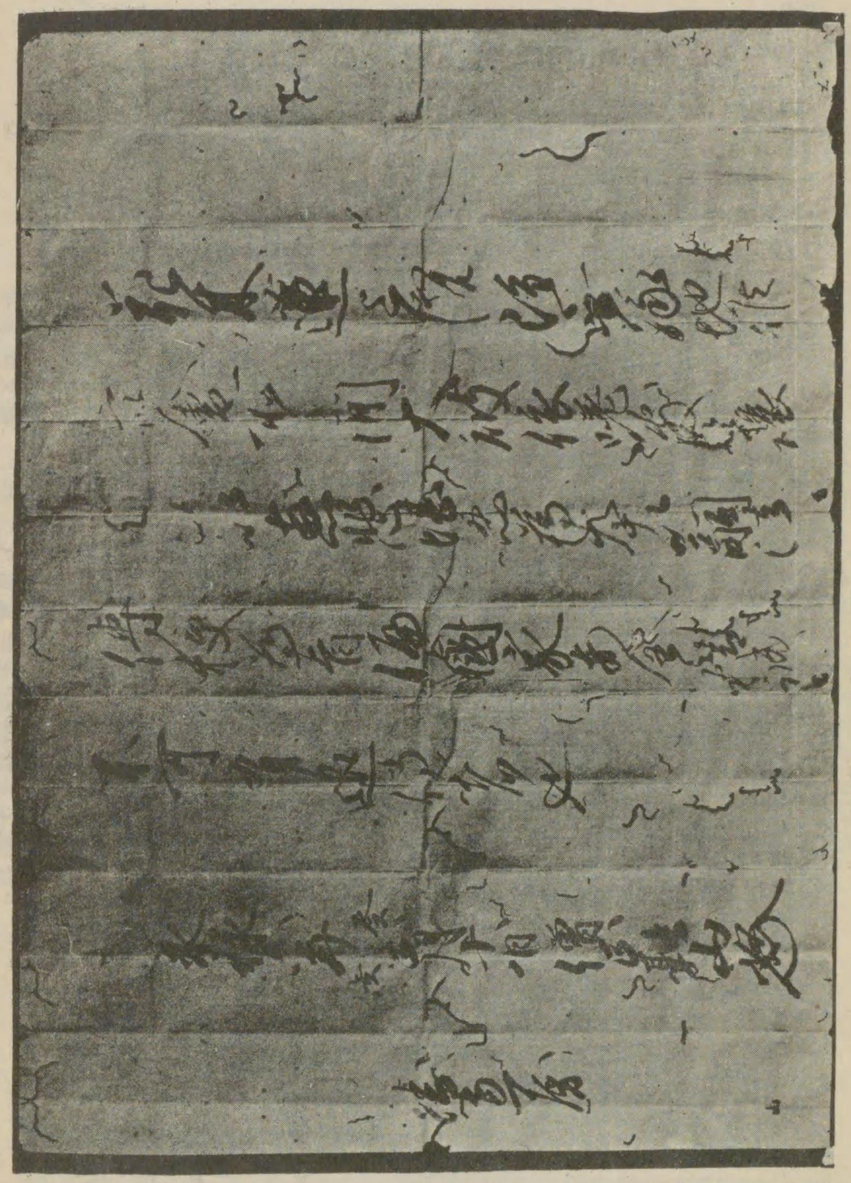
西光院文書　（其一三）大久保忠增願文

1113



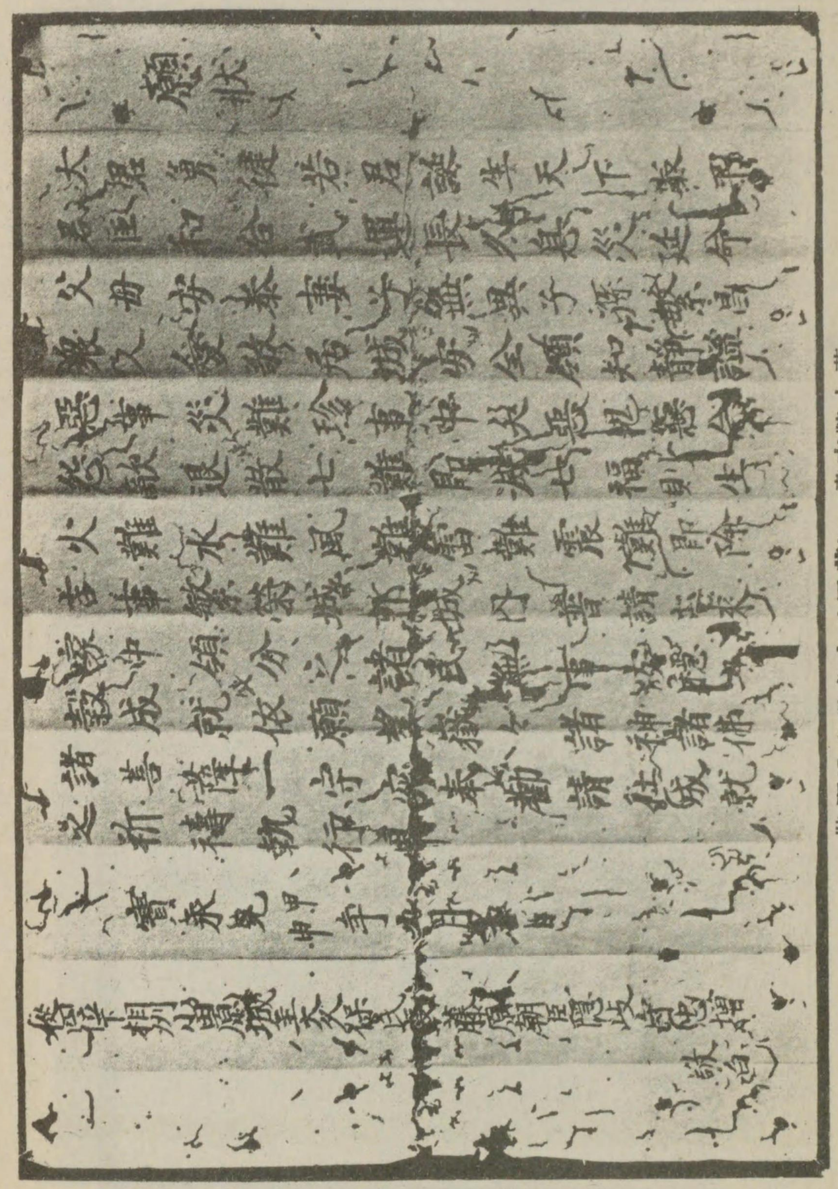
狀印朱氏條北（一其）　書文院上蓮

（縱一尺五分・橫一尺一寸）



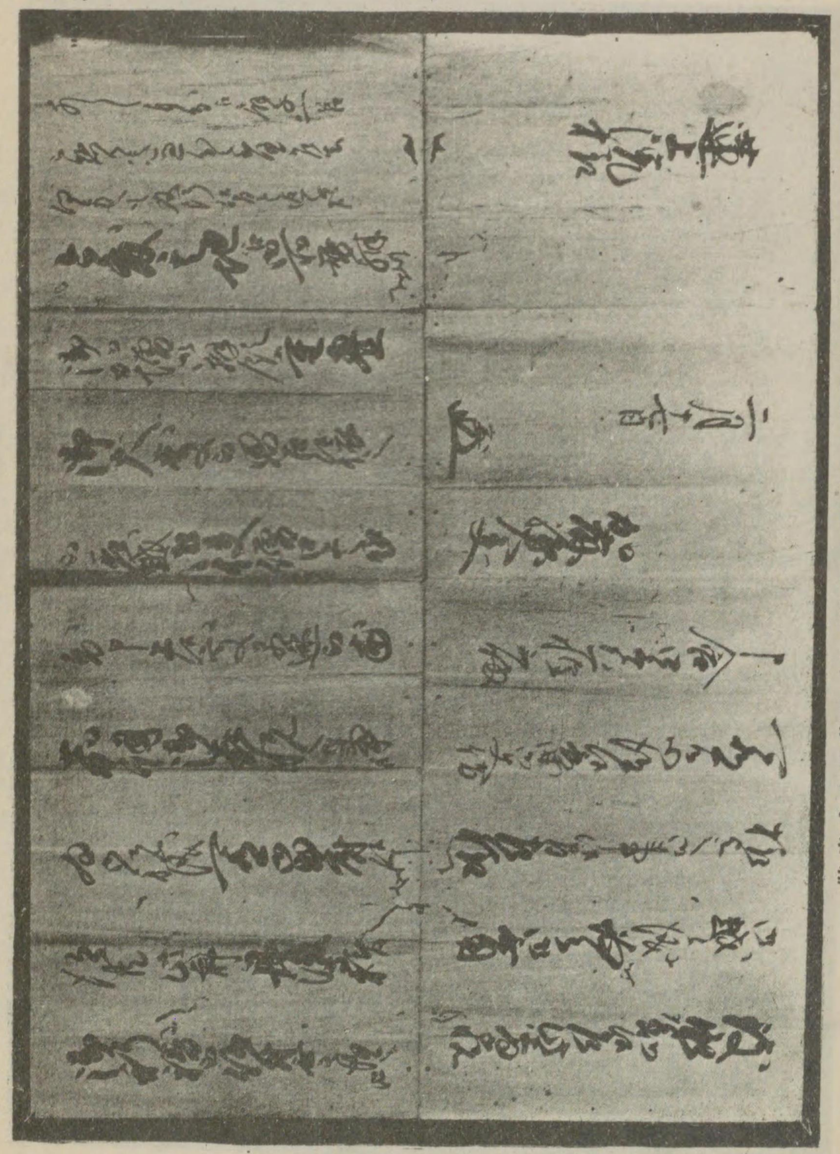
狀讓融正脩（二其）　書文院上蓮

（縱一尺二寸・橫一尺六寸五分）



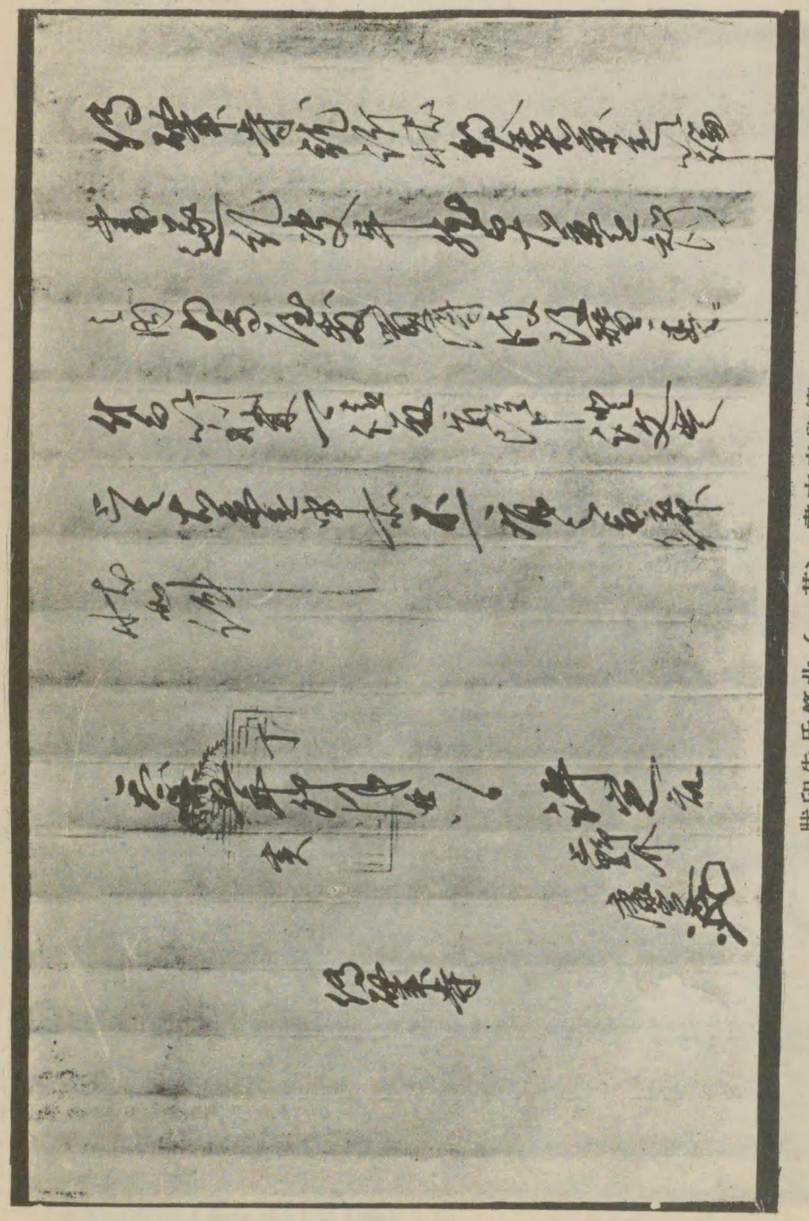
狀願增忠保久大（四其）　書文院上蓮

（縱一尺二分・橫一尺四寸五分）



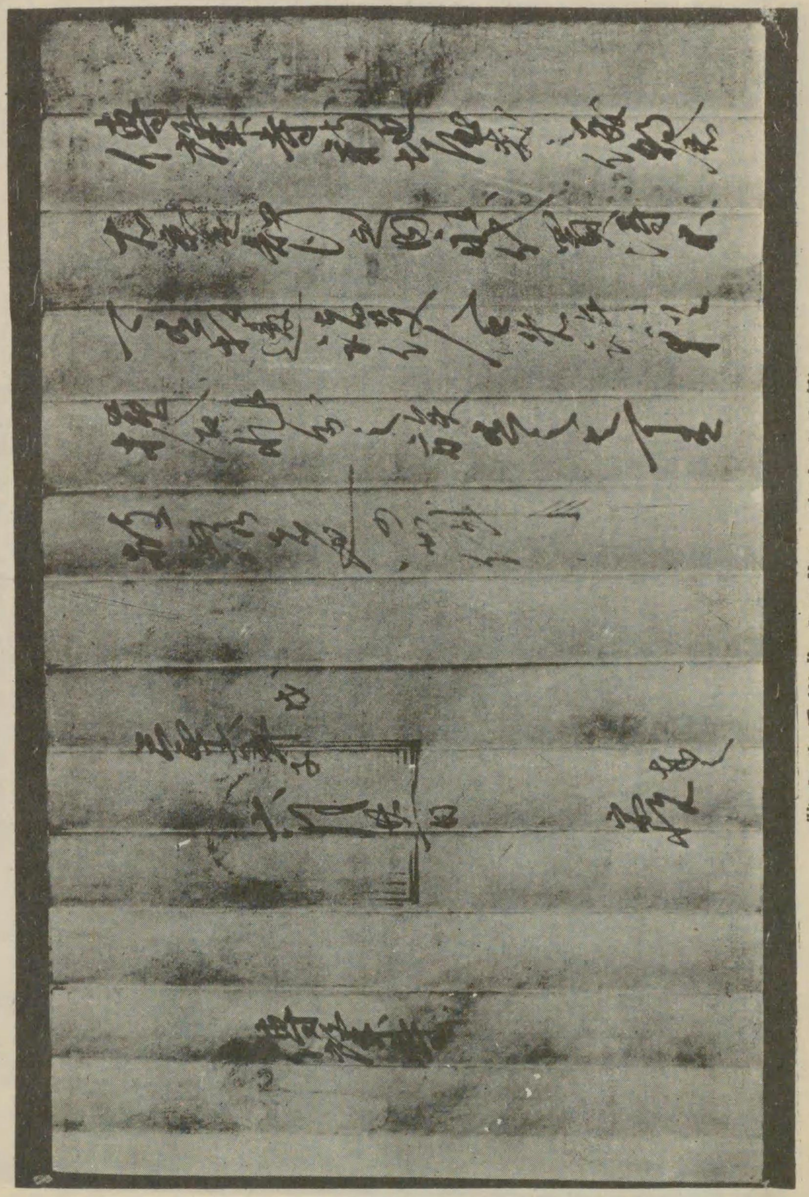
狀書夫太孫藤加年三享貞（三其）　書文院上蓮

（縱五寸八分・橫一尺六寸）



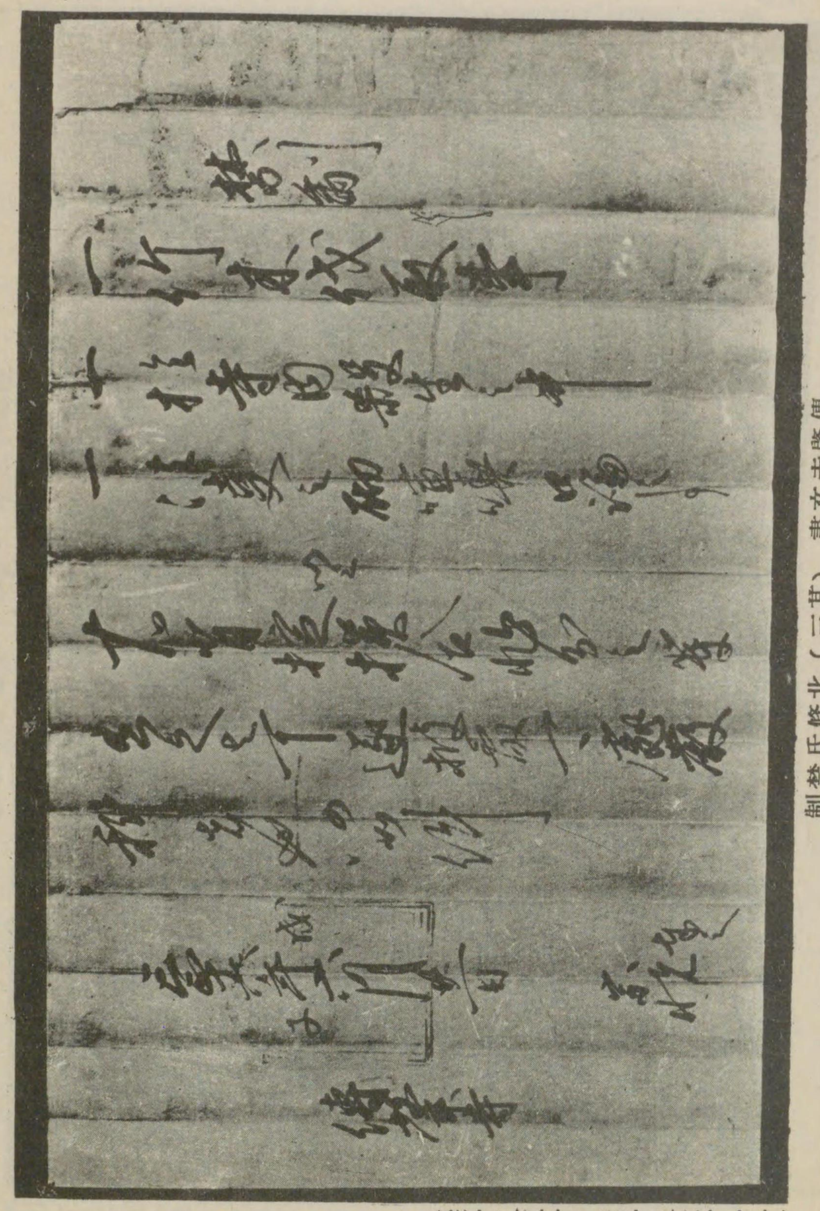
狀印朱氏條北（一其）　書文寺巖傳

（縱一尺四分・橫一尺六寸八分）



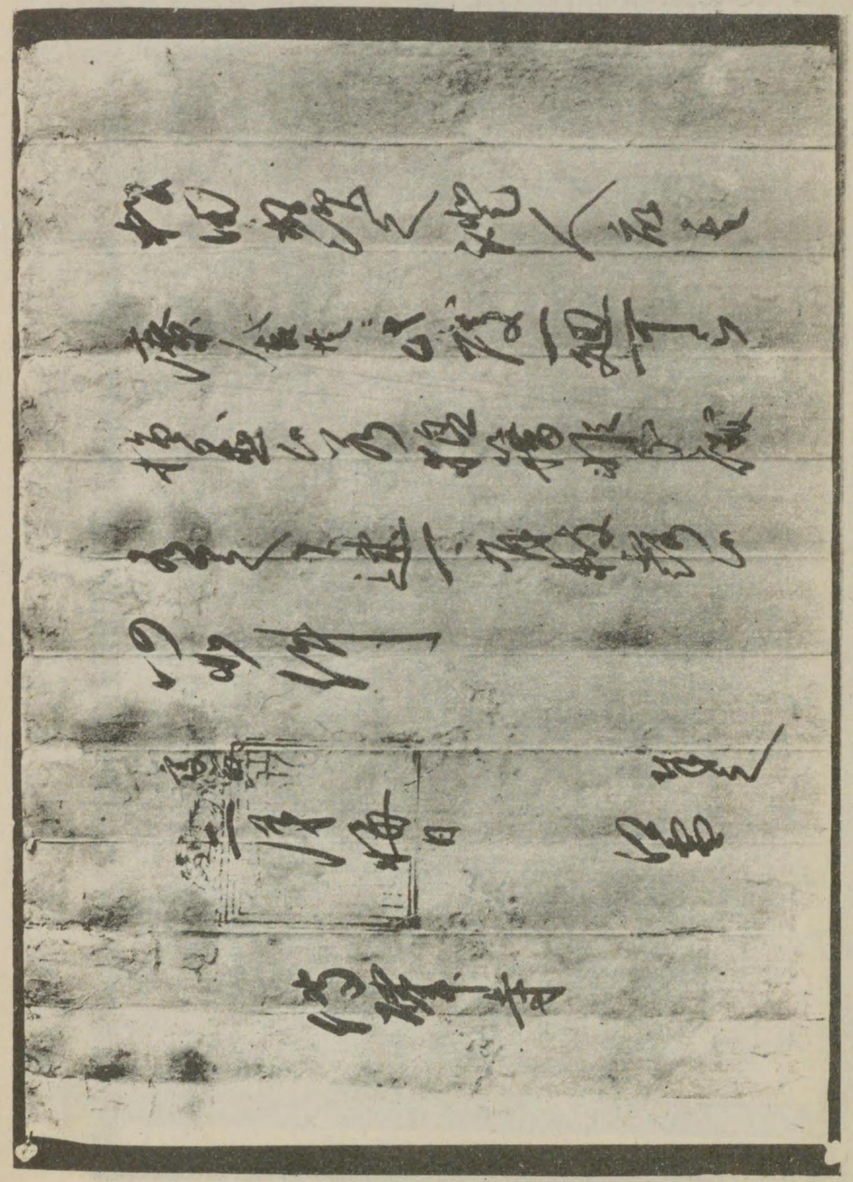
狀印朱氏條北（二其）　書文寺巖傳

（縱一尺四分・橫一尺七寸二分）



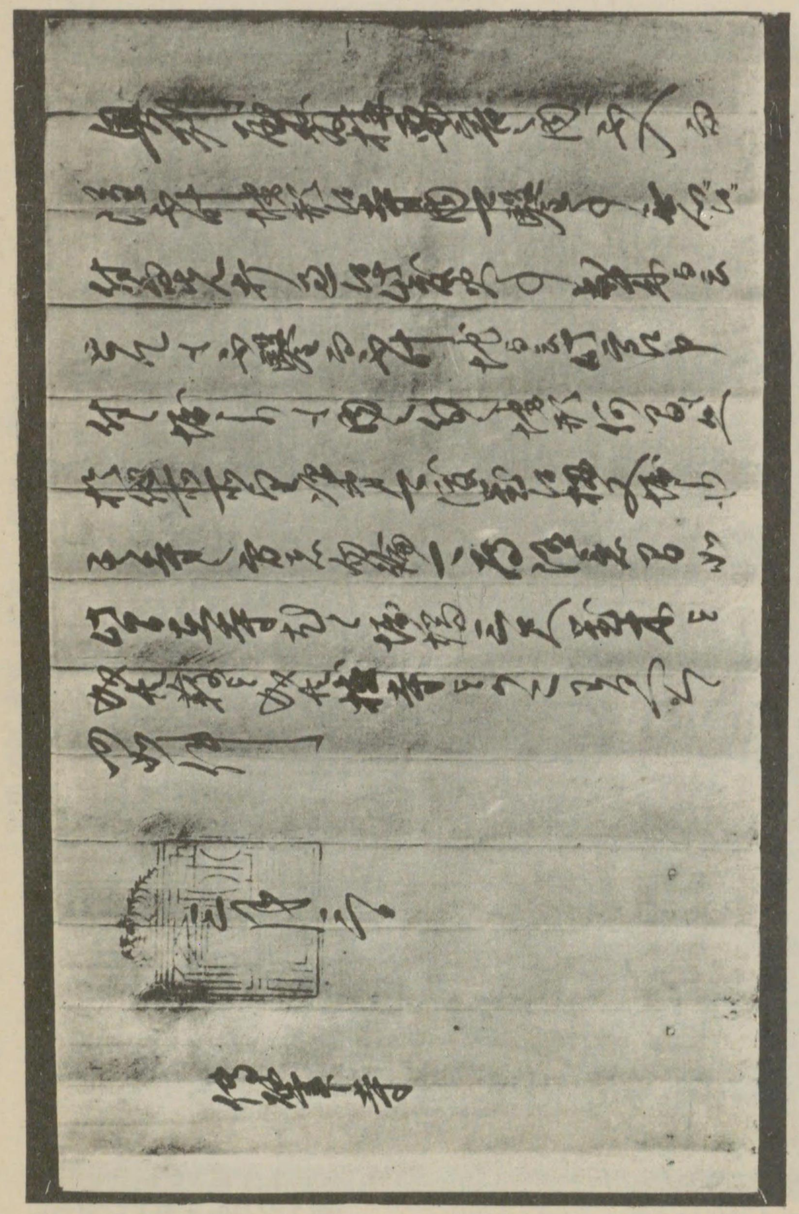
制禁氏條北（三其）　書文寺肇傳

（縱一尺五分・橫一尺七寸一分）



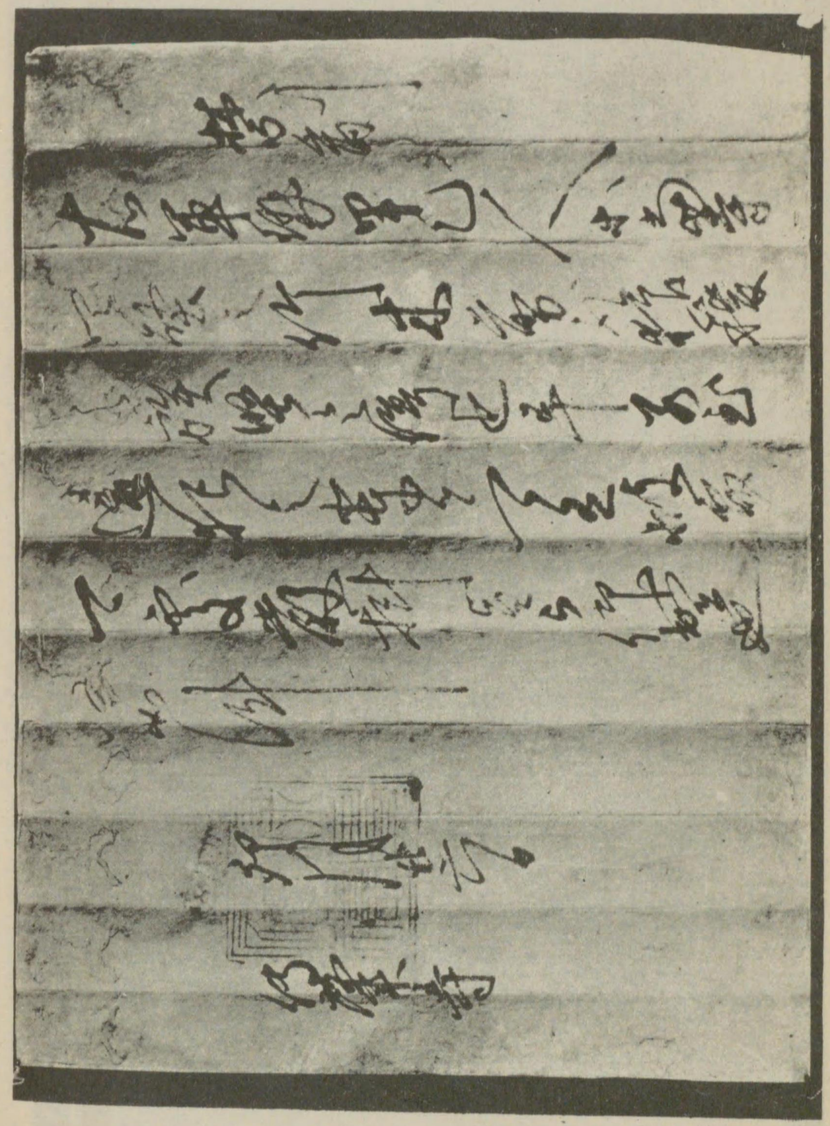
狀印朱氏條北（四其）　書文寺肇傳

（縱一尺七分・橫一尺四寸）



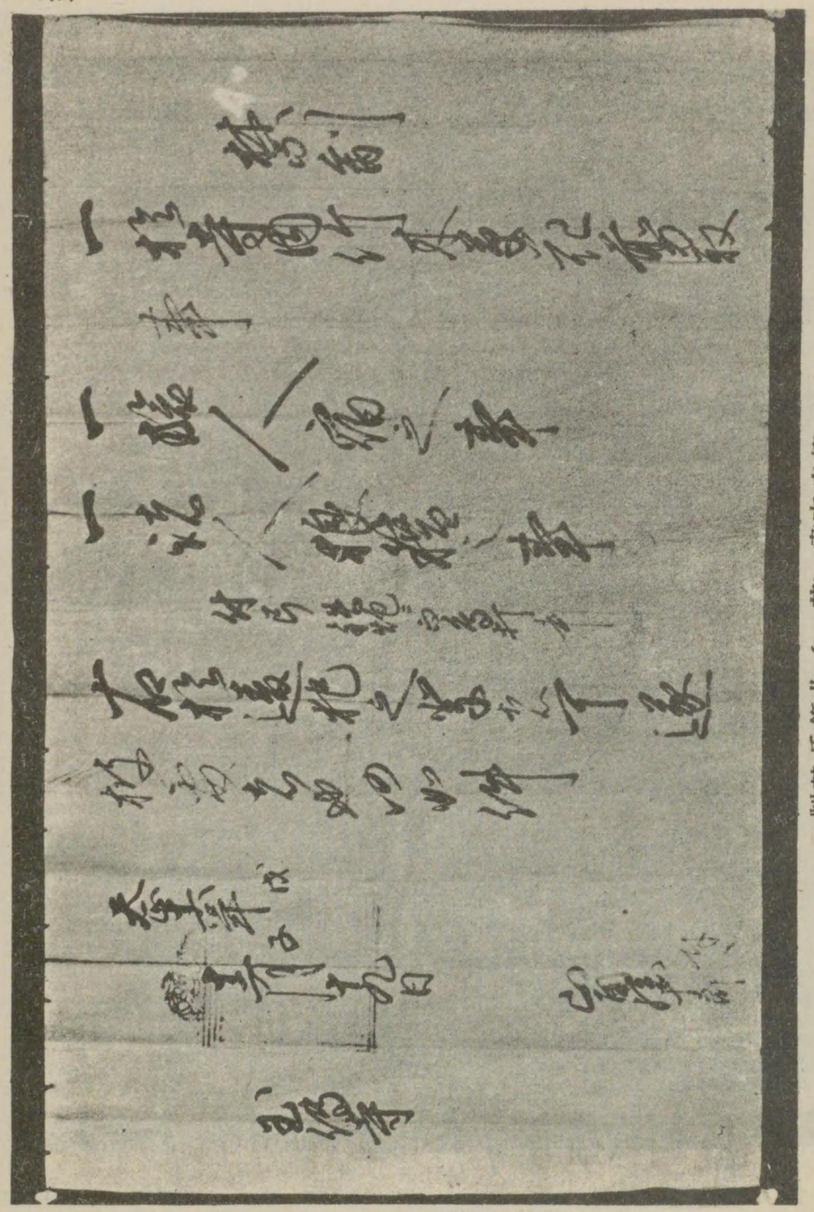
書文寺肇傳　狀印朱氏條北（五其）

（縱一尺五分・横一尺七寸三分）



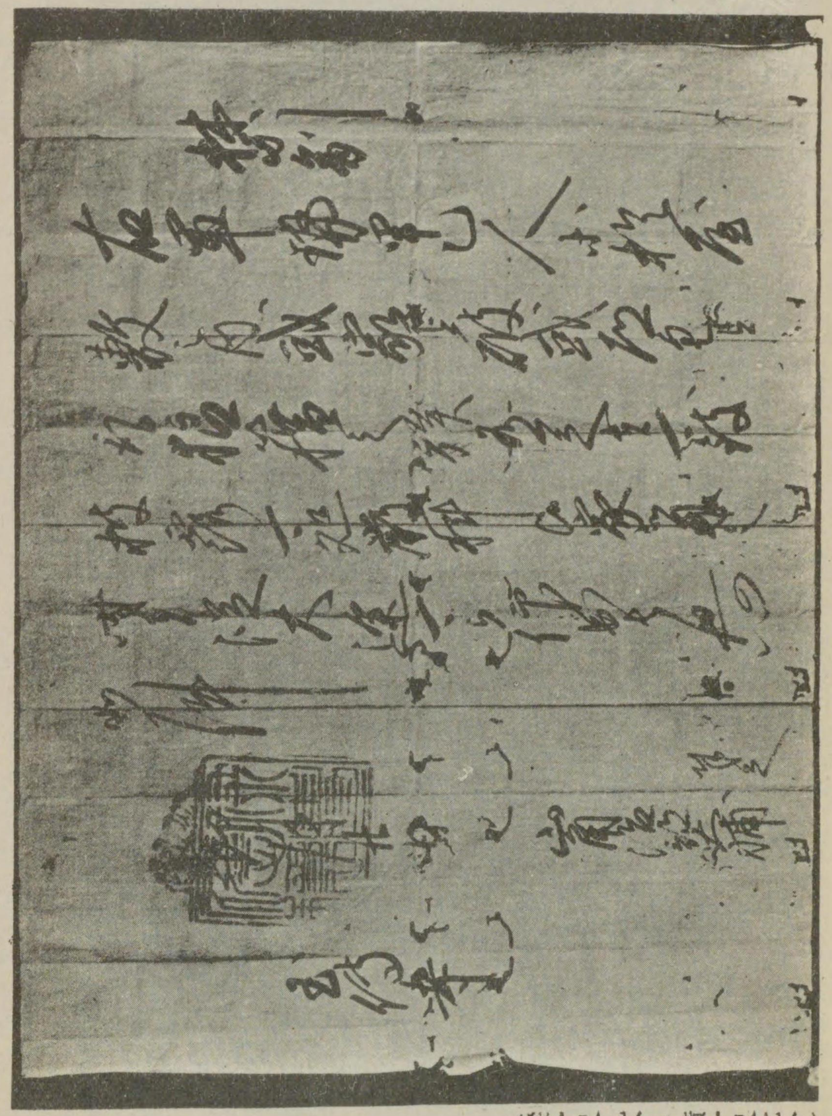
書文寺肇傳　制禁氏條北（六其）

（縱一尺四分・横一尺三寸六分）



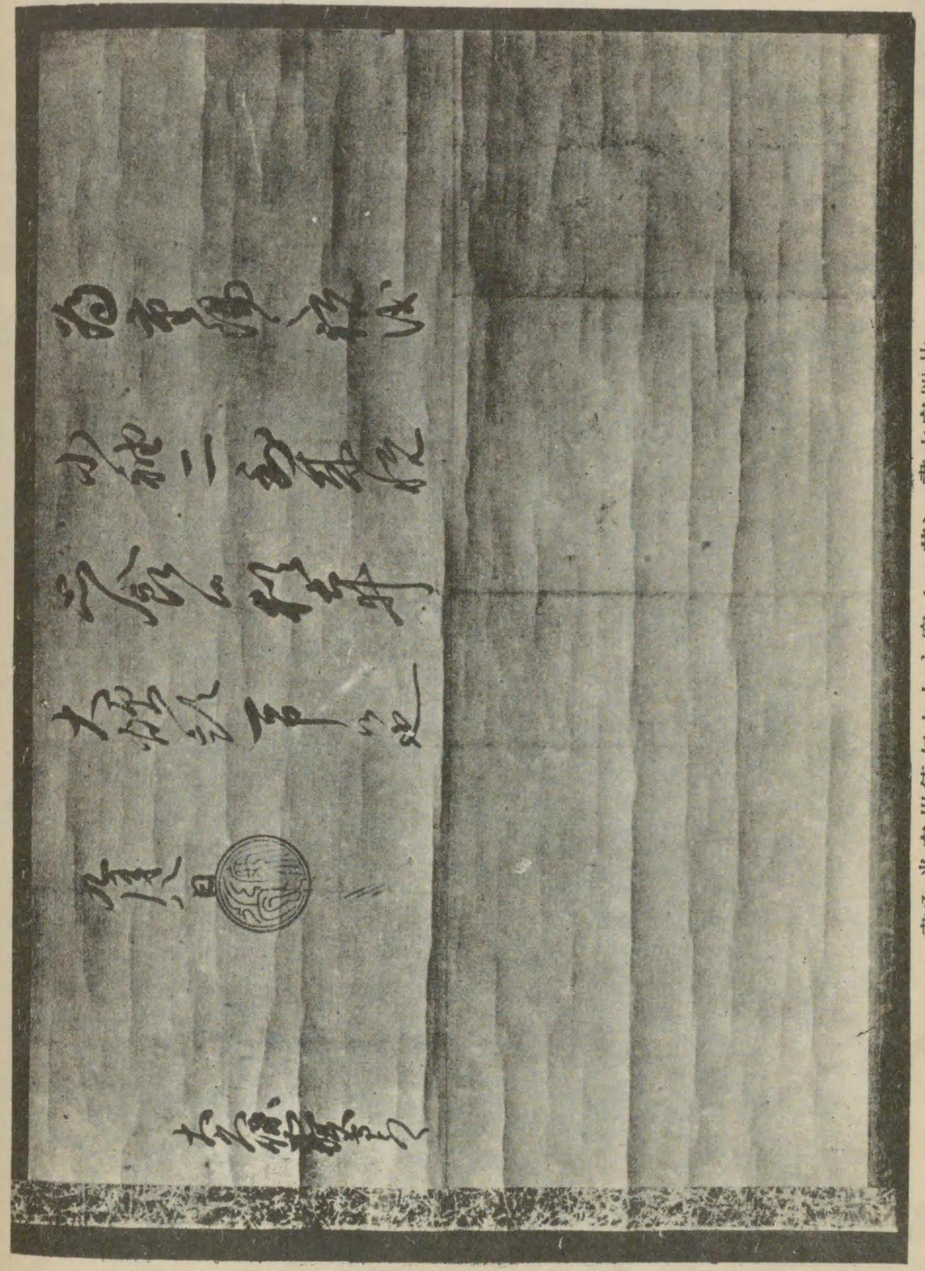
制禁氏條北（一其）　書文寺傳玉

（縦一尺四分・横一尺六寸九分）



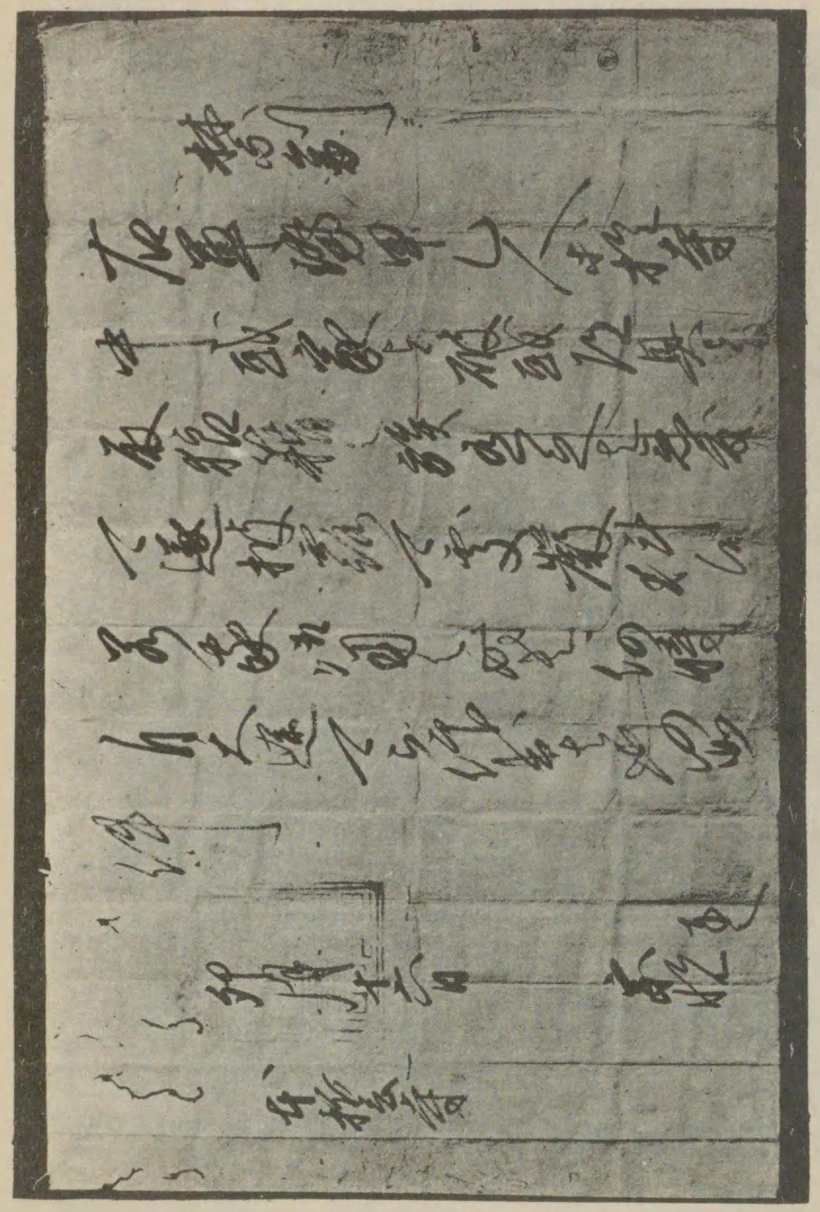
制禁氏條北（二其）　書文寺傳玉

（縦一尺九分・横一尺七分）



書内光家川德年六十永覺（一其）書文家岡片

（縱一尺八寸・横一尺）

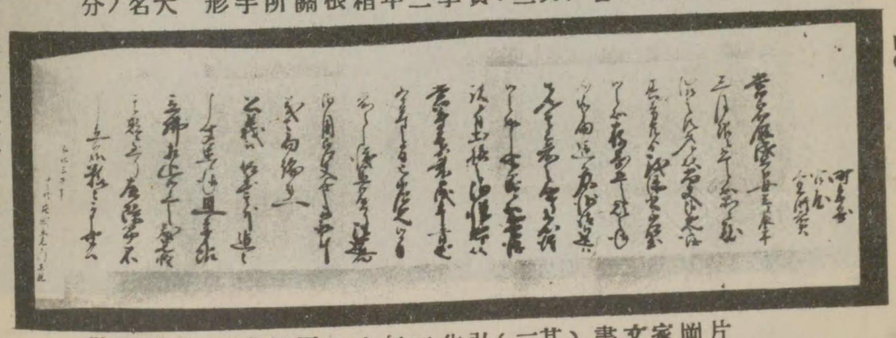


制禁氏條北・書文寺誓本

（縱一尺四分・横一尺六寸七分）

片岡家文書（其二）貞享二年箱根關所手形　大名ノ分

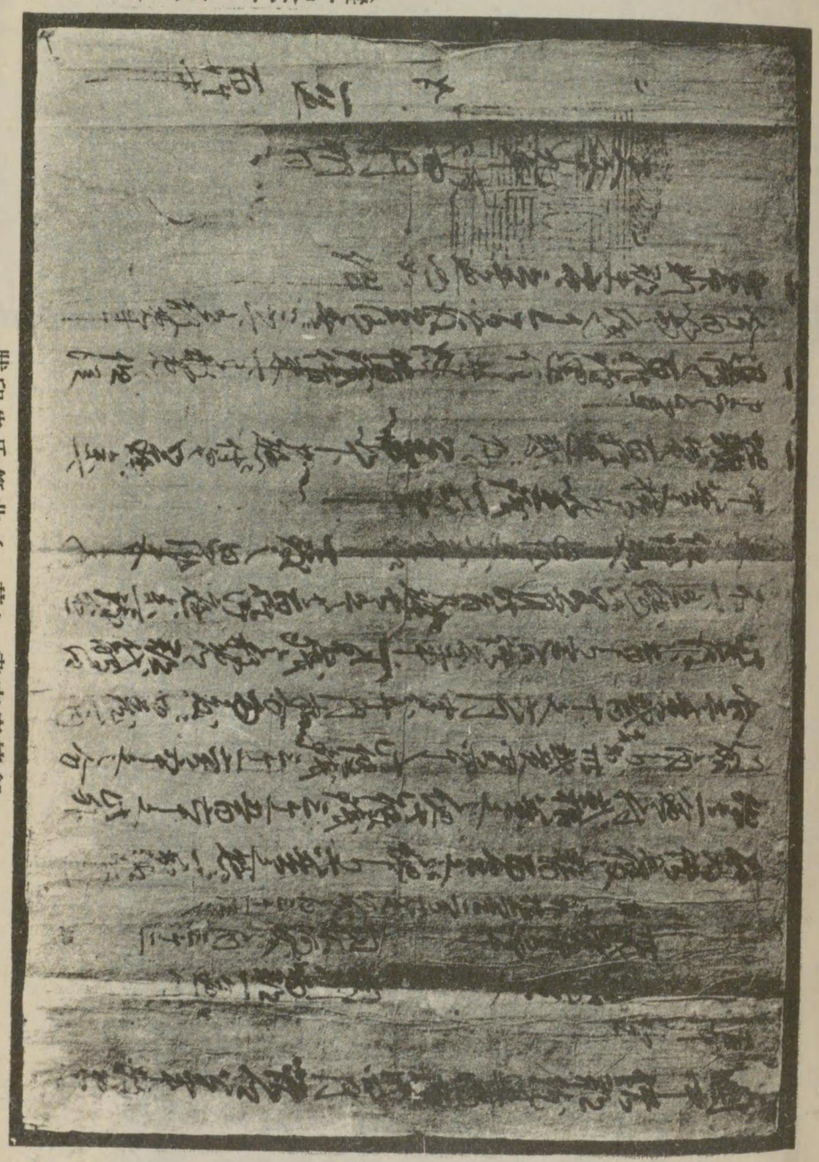
（縦一尺七分・横一尺）



片岡家文書（其三）弘化三年小田原飯盛下女許可状

（縦四寸七分・横一尺九寸五分）

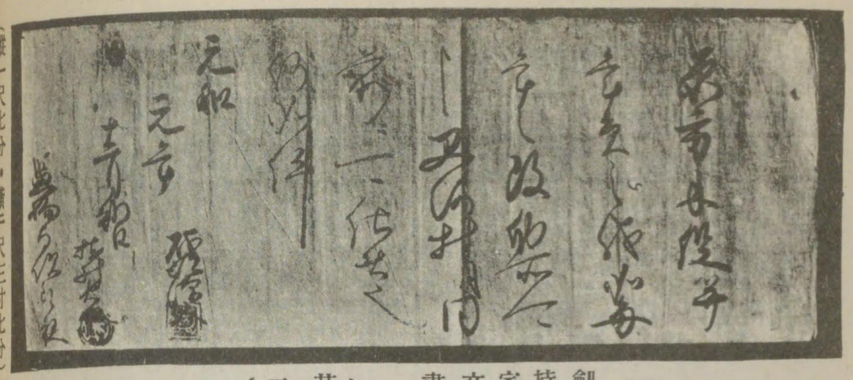
（縦一尺七分・横一尺五寸一分）



狀印朱氏條北（一其）書文家持舊

一図

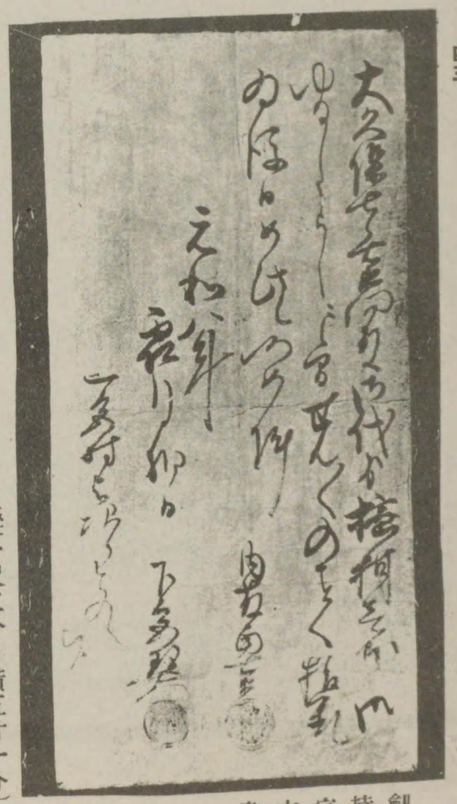
四二



（縦一尺七分・横二尺三寸七分）

劍持家文書　（其二）

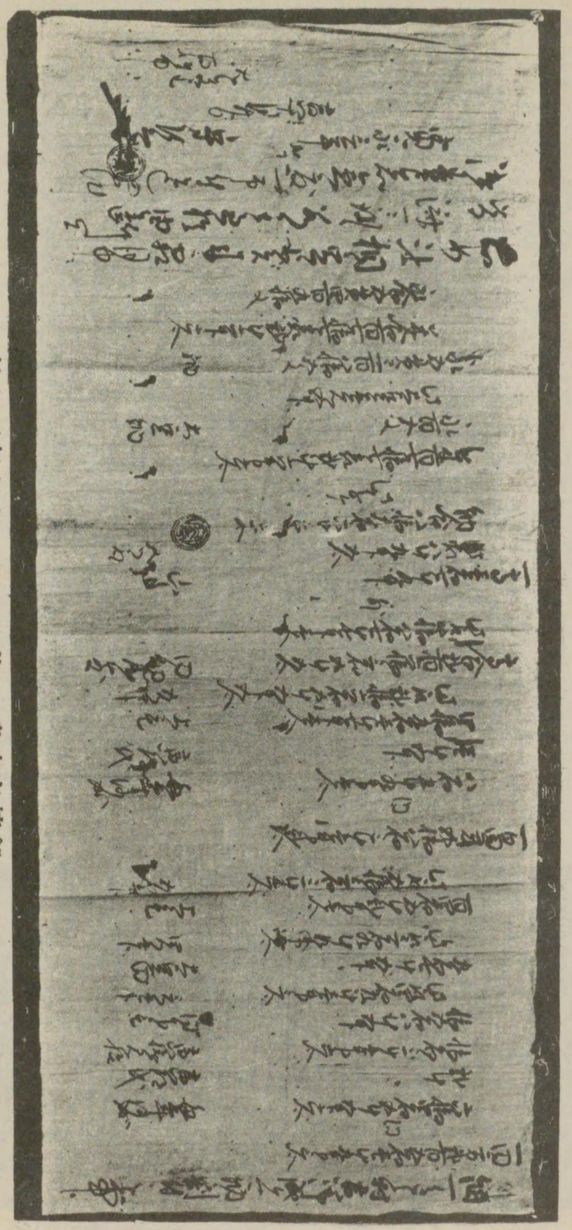
四三



（縦一尺二分・横五寸一分）

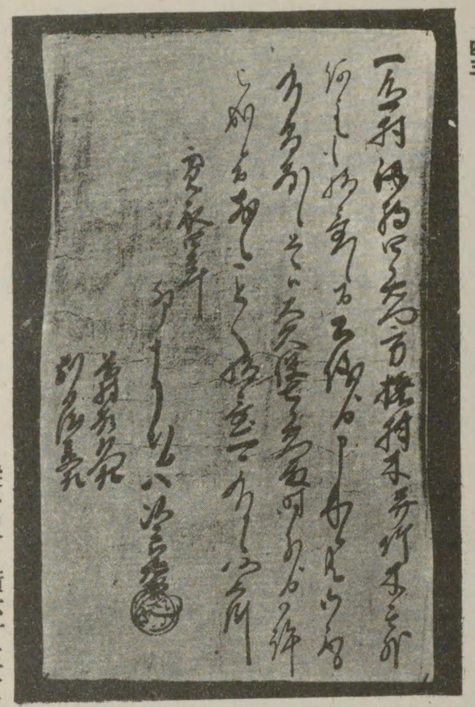
劍持家文書　（其三）

（縦一尺六分・横二尺五寸八分）



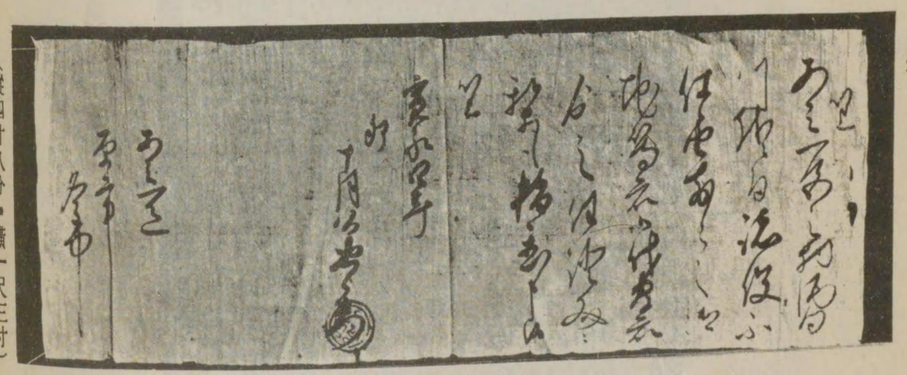
付割貢年村色一網（四其）　書文家持劍

四四



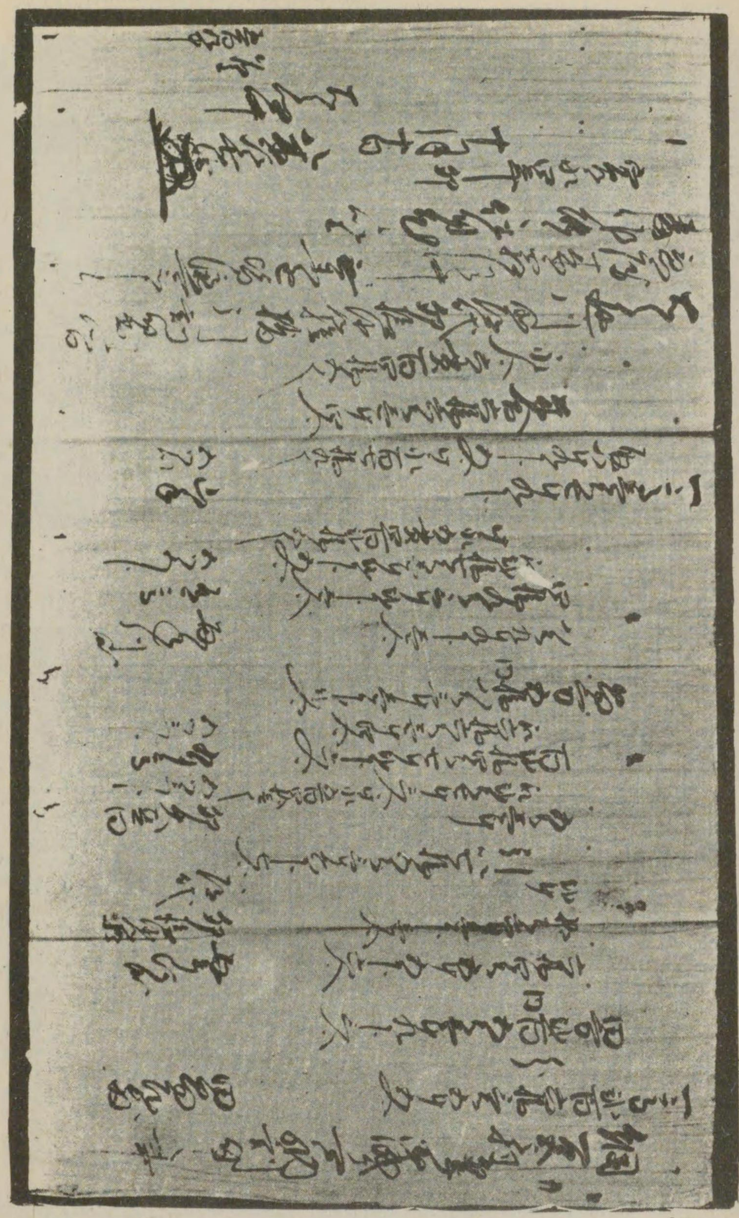
（縦一尺・横六寸三分）

劍持家文書　（其五）



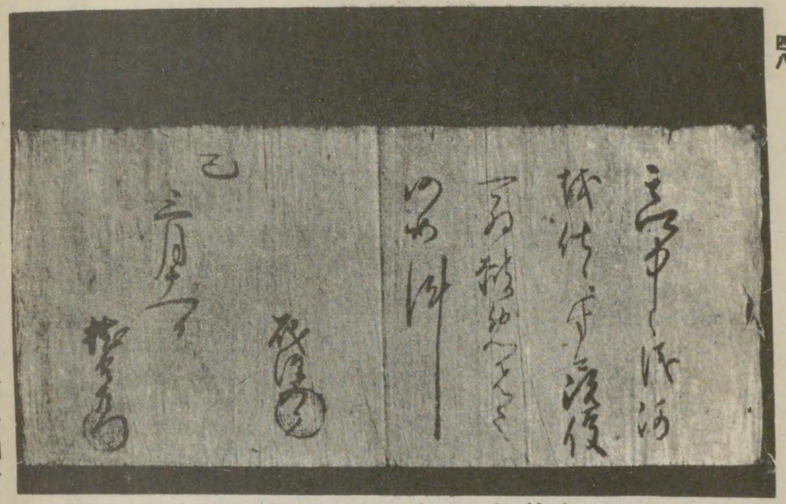
（縦四寸八分・横一尺三寸）

劍持家文書　（其六）



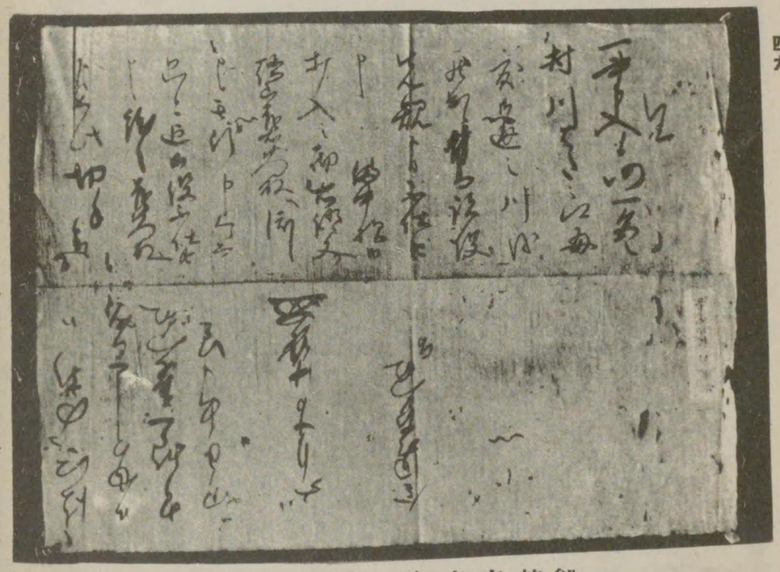
（縦一尺二分・横一尺七寸六分）

付割貢年村色一綱（七其）　書文家持劍



（縦一尺二分・横一尺一寸四分）

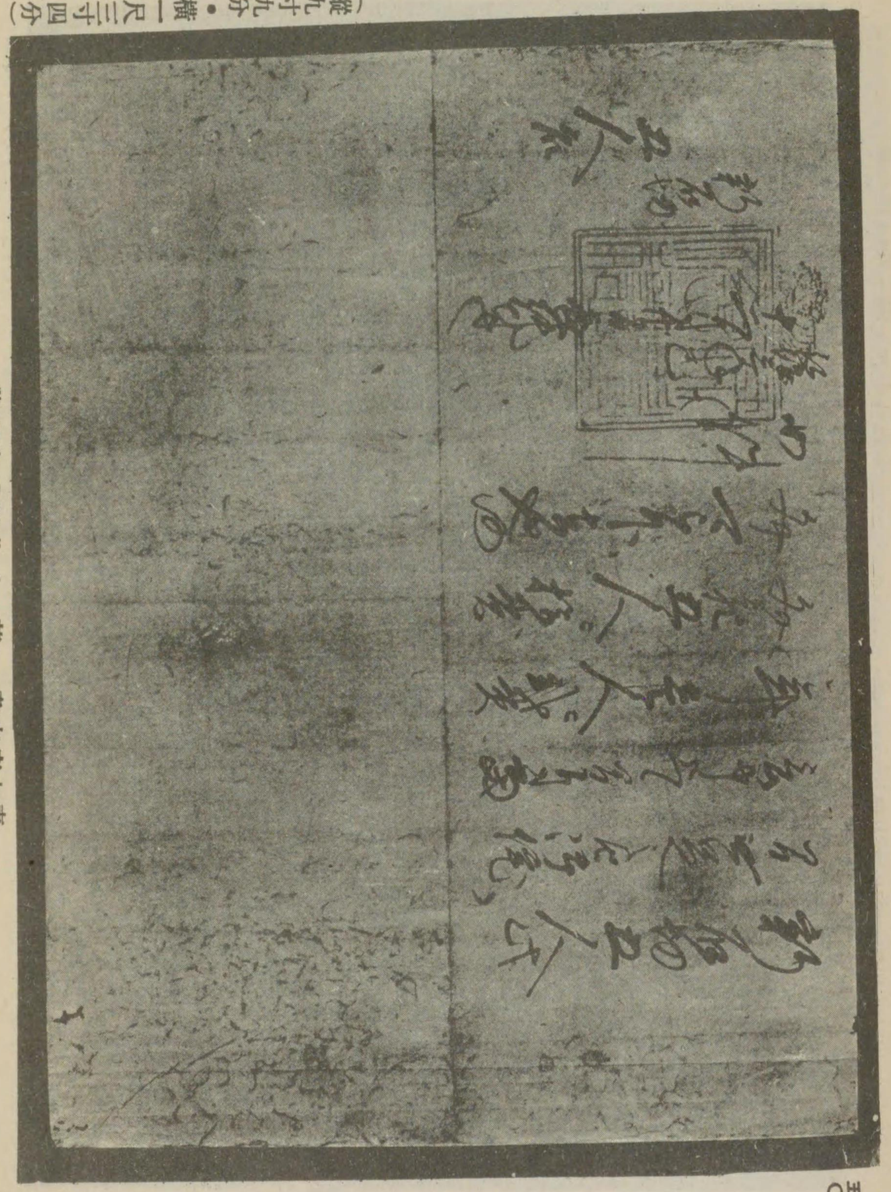
劍持家文書　（其八）



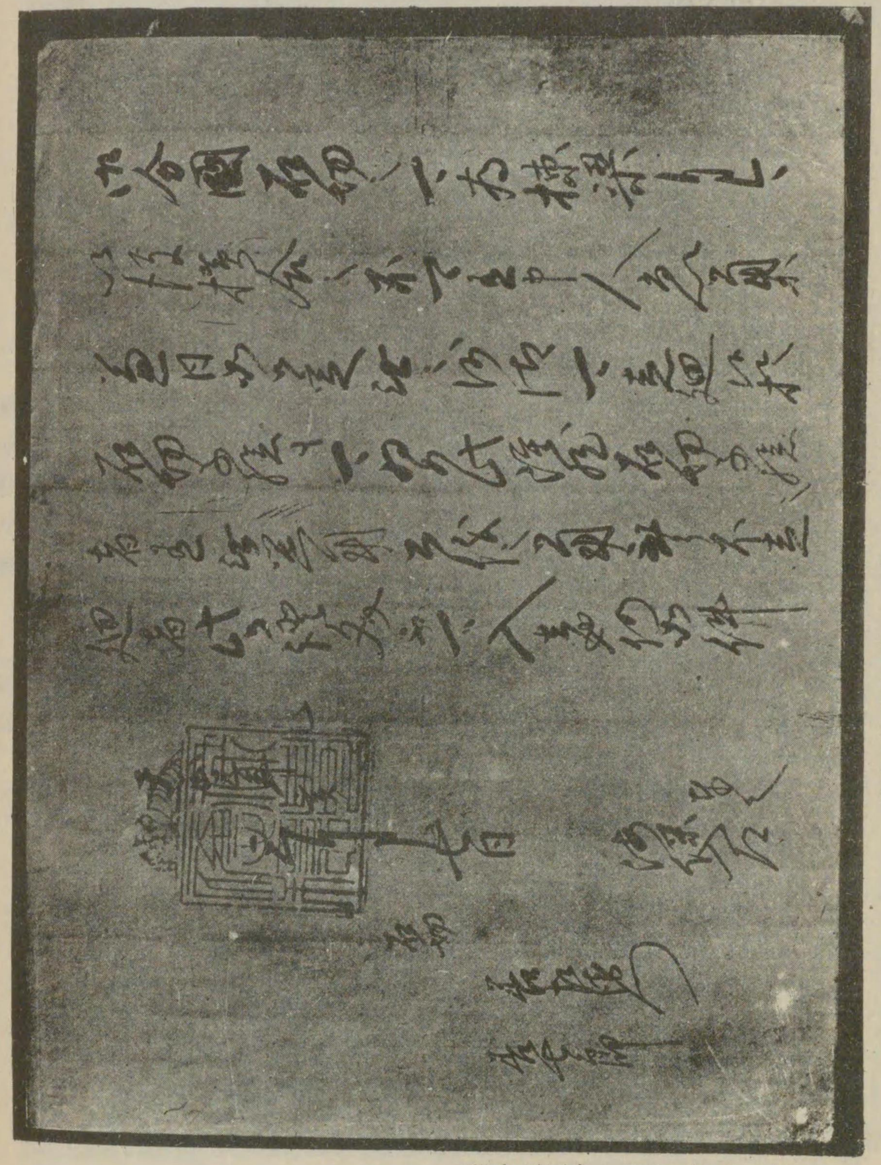
（縦一尺三分・横二尺四寸二分）

劍持家文書　（其九）

（縦九寸九分・横一尺三寸四分）

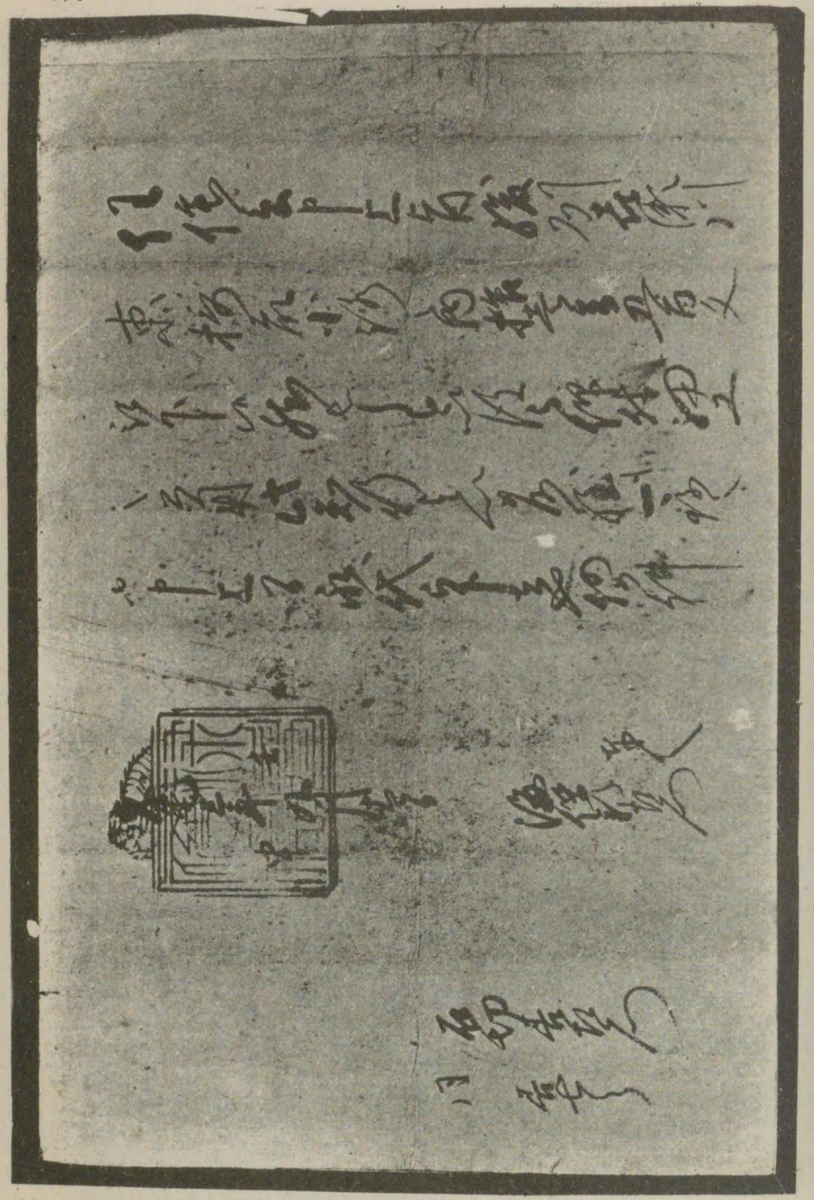


狀印朱氏條北（一其）　書文家木青



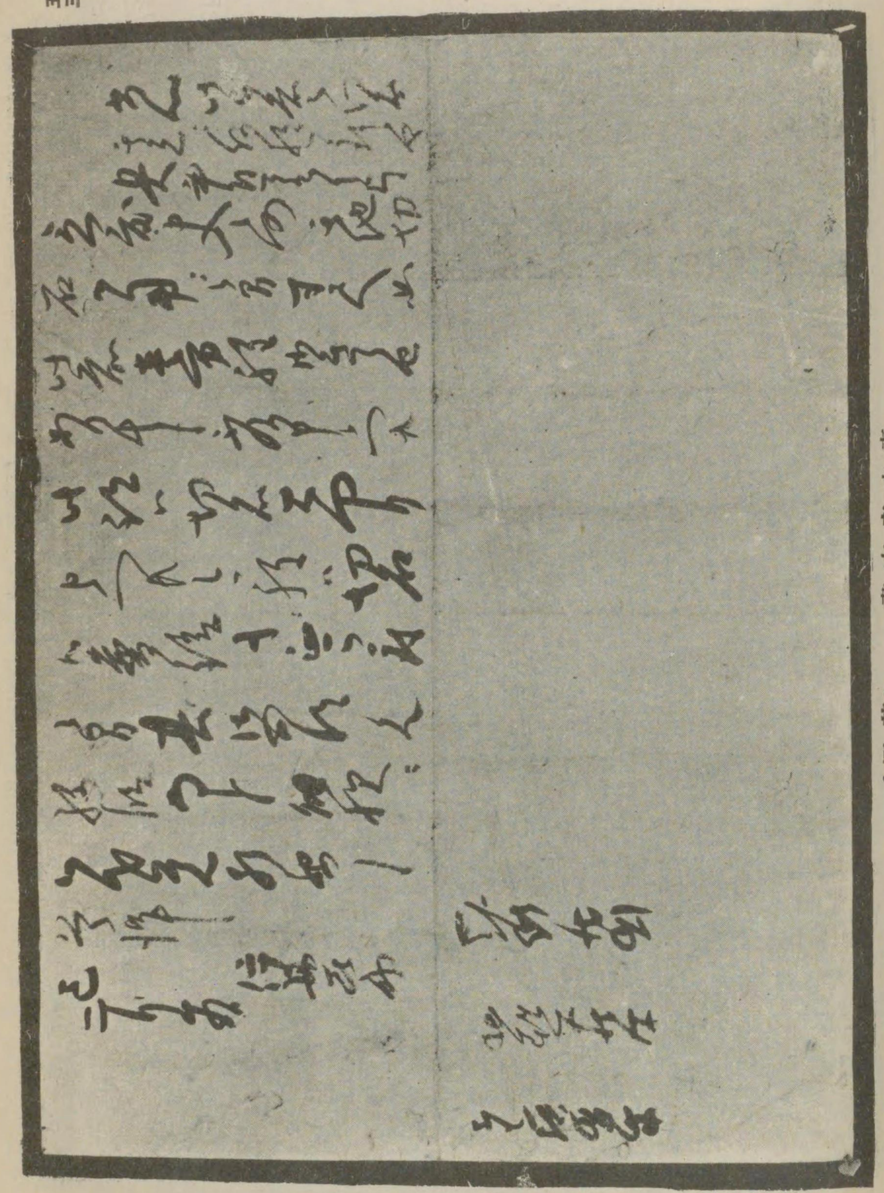
狀印朱氏條北（三其）　書文家木青

（縱一尺五分・橫一尺四寸二分五厘）



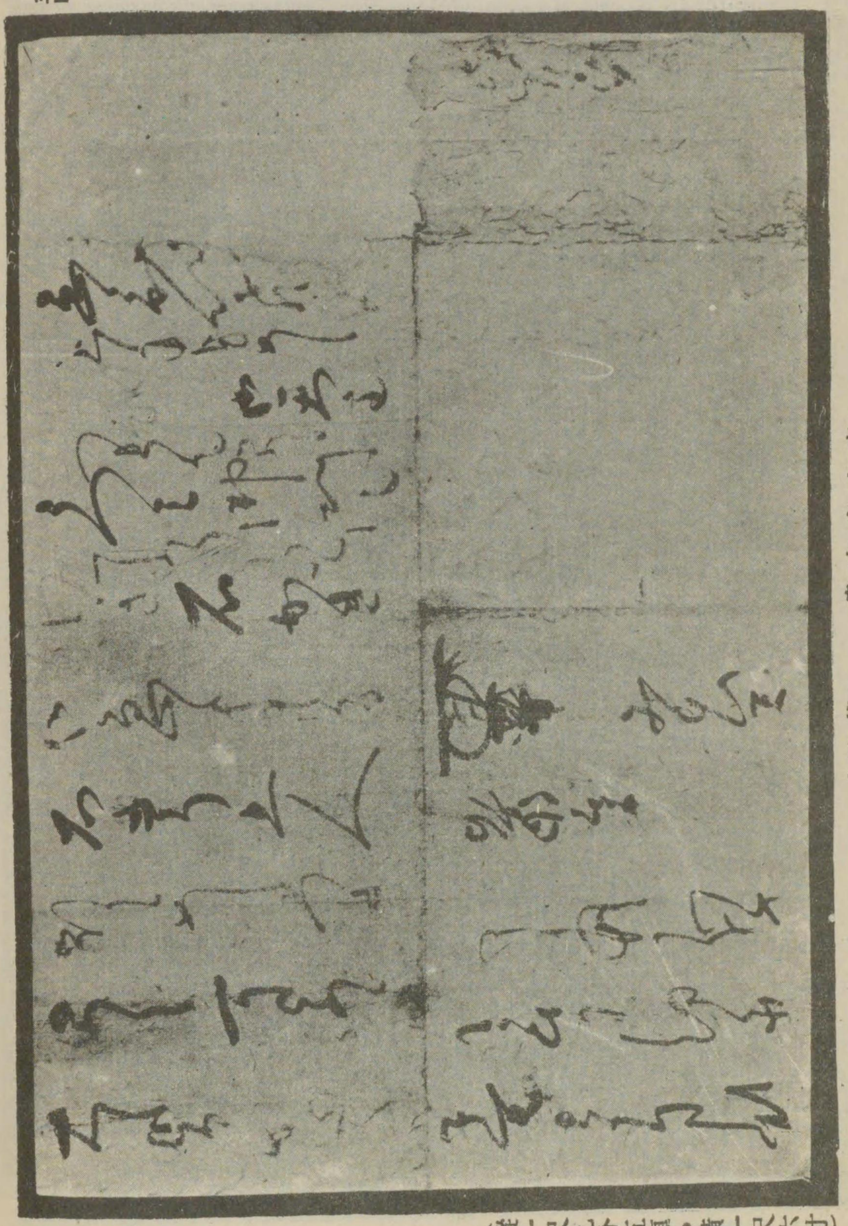
狀印朱氏條北（二其）　書文家木青

（縱九寸九分・橫一尺四寸五分）



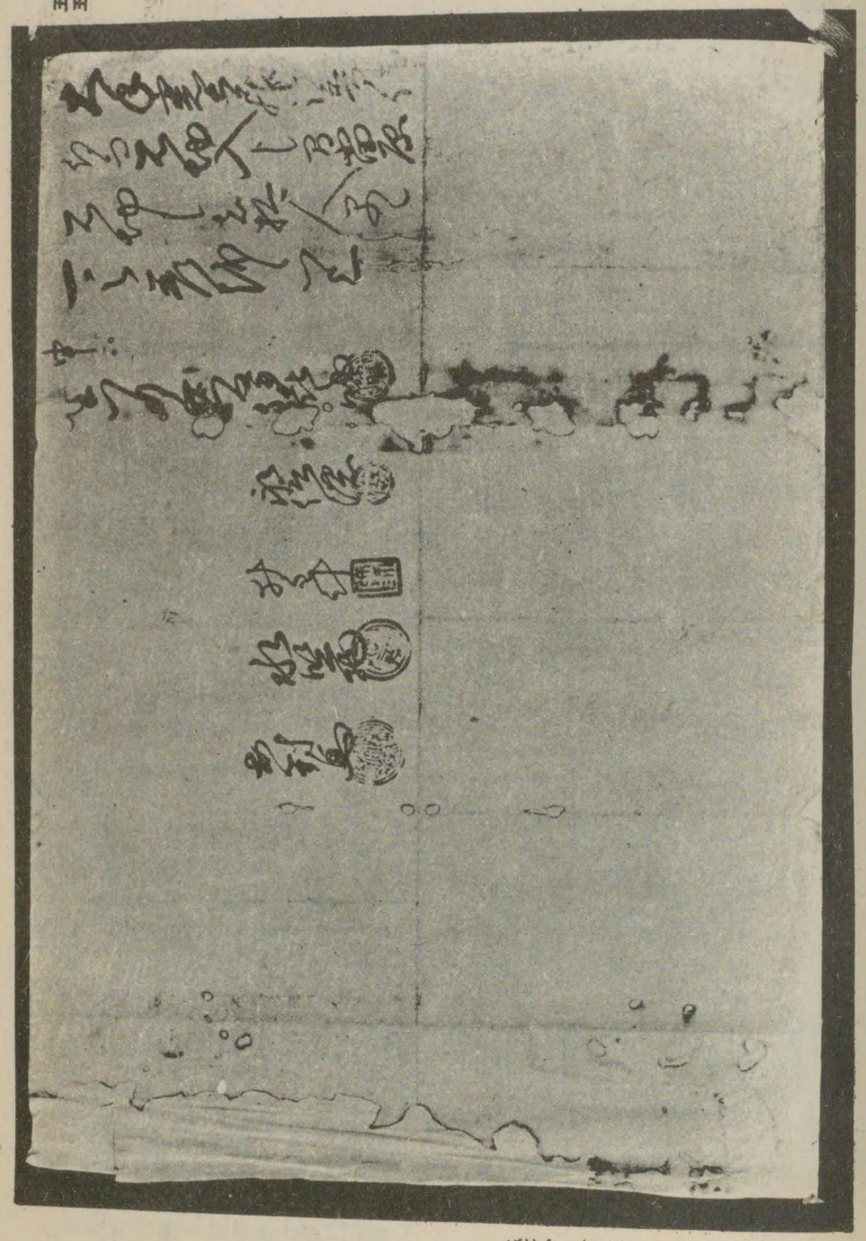
（四其）　書文家木青

（縦一尺九分・横一尺九寸七分五厘）



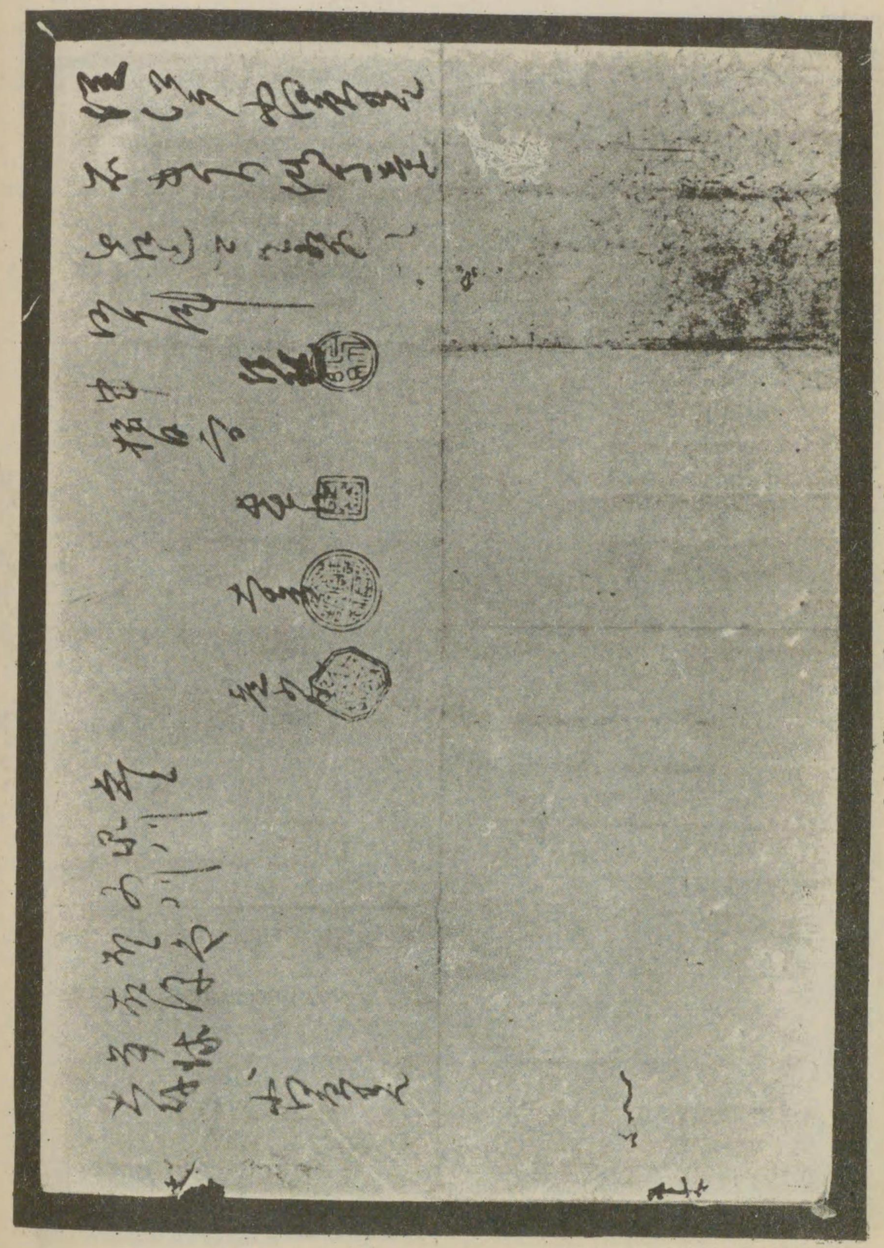
（五其）　書文家木青

（縦一尺九分五厘・横一尺六寸）



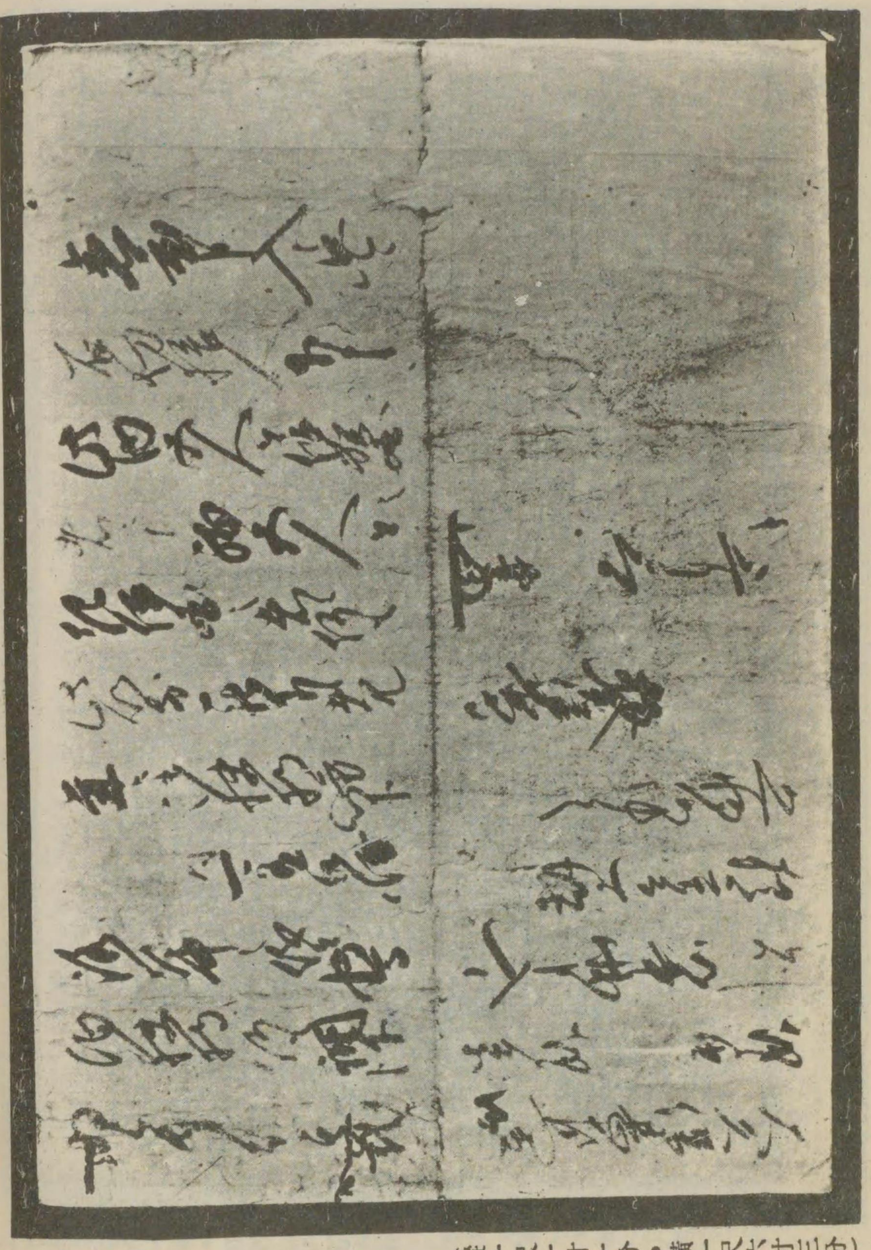
（六其）　書文家木青

（縦一尺二寸・横一尺三寸五分）



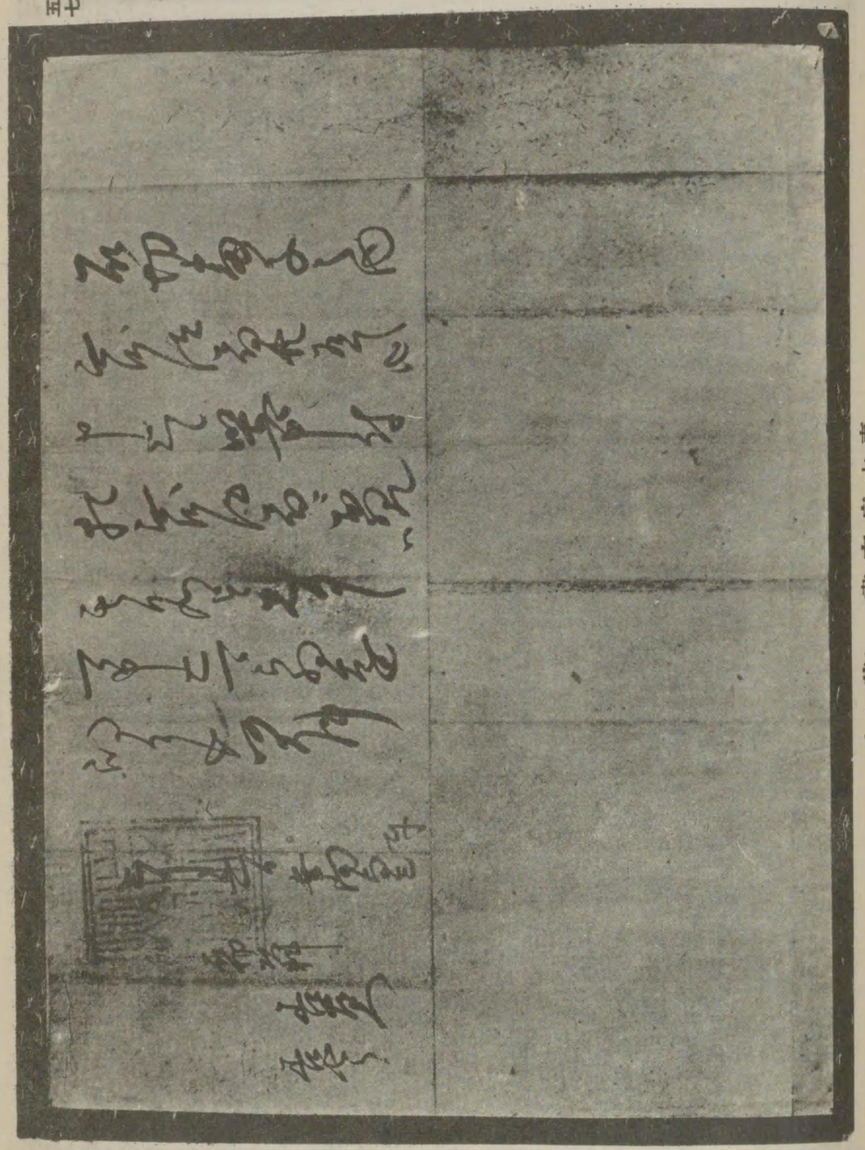
（七其）　書文家木青

（縦一尺四分・横一尺五寸）



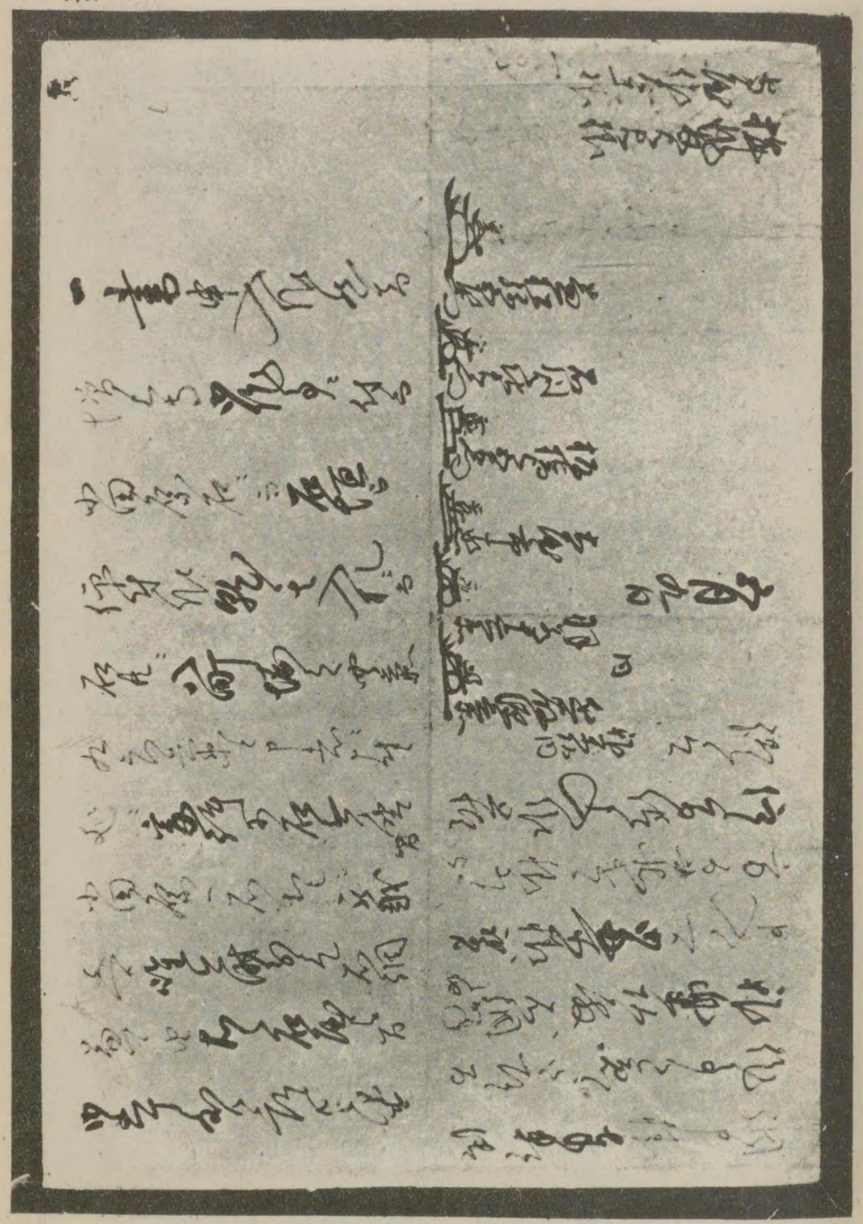
（縦一尺一寸一分・横一尺六寸三分）

（九其）書文家木青

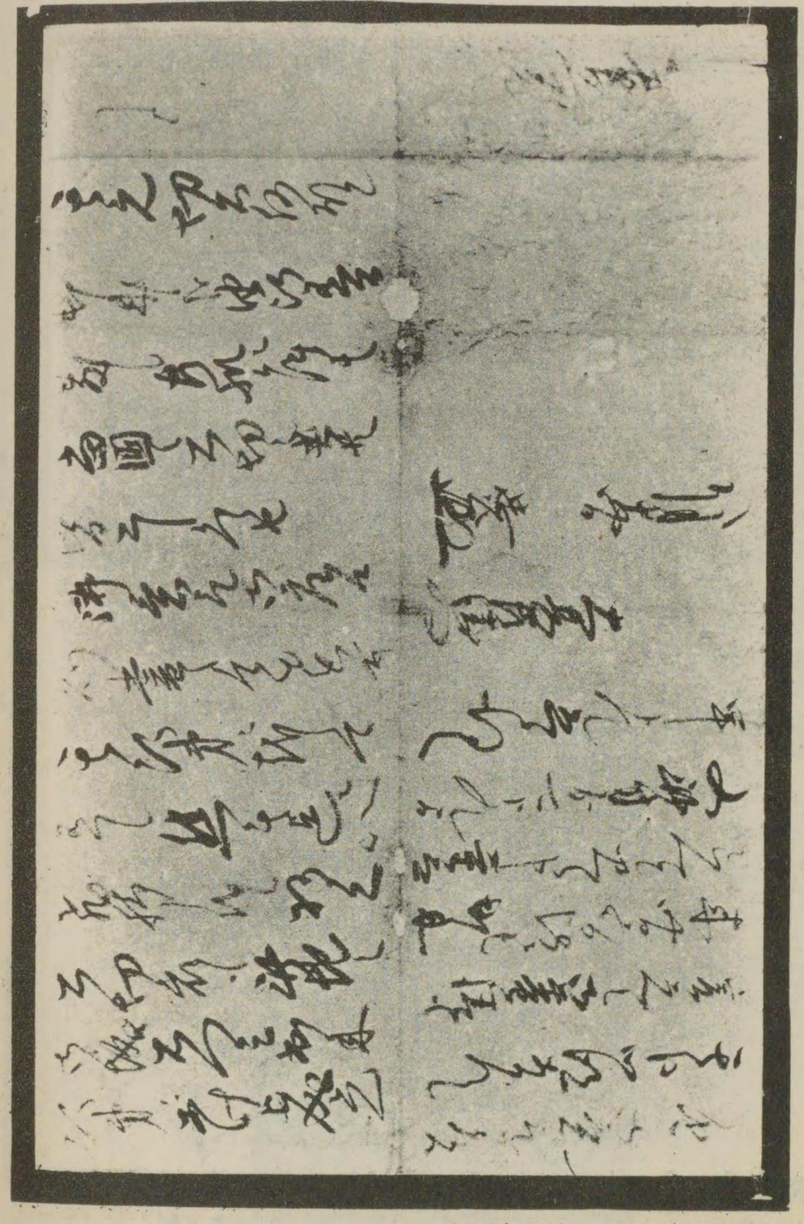


（縦九寸五分・横一尺三寸九分）

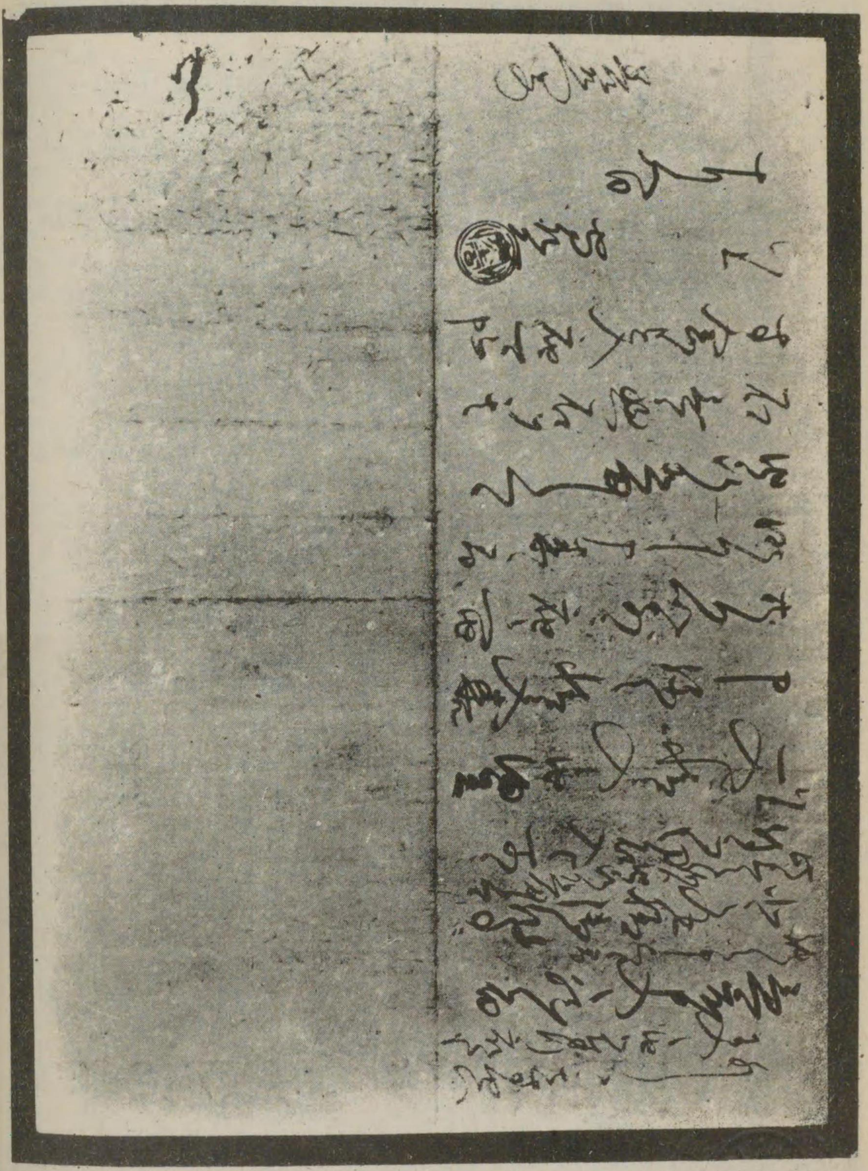
（八其）書文家木青



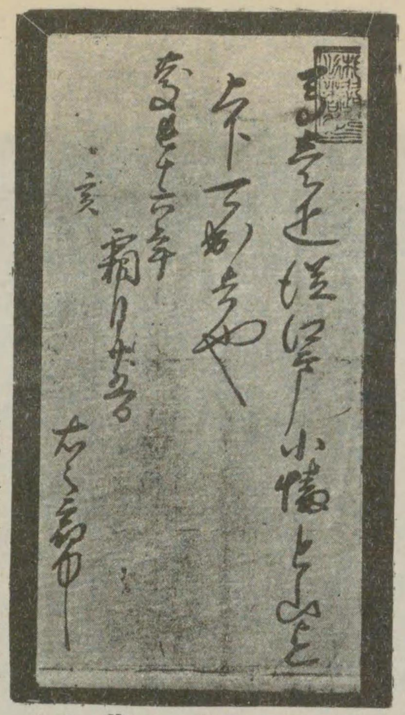
（縦一尺八分五厘・横一尺六寸五分）



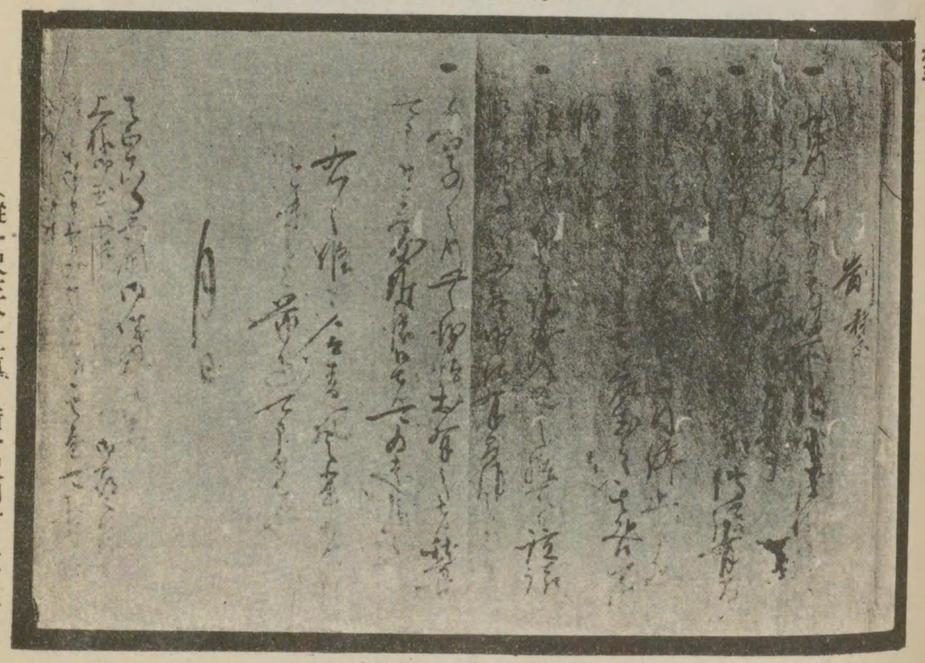
（縦九寸四分・横一尺五寸二分）



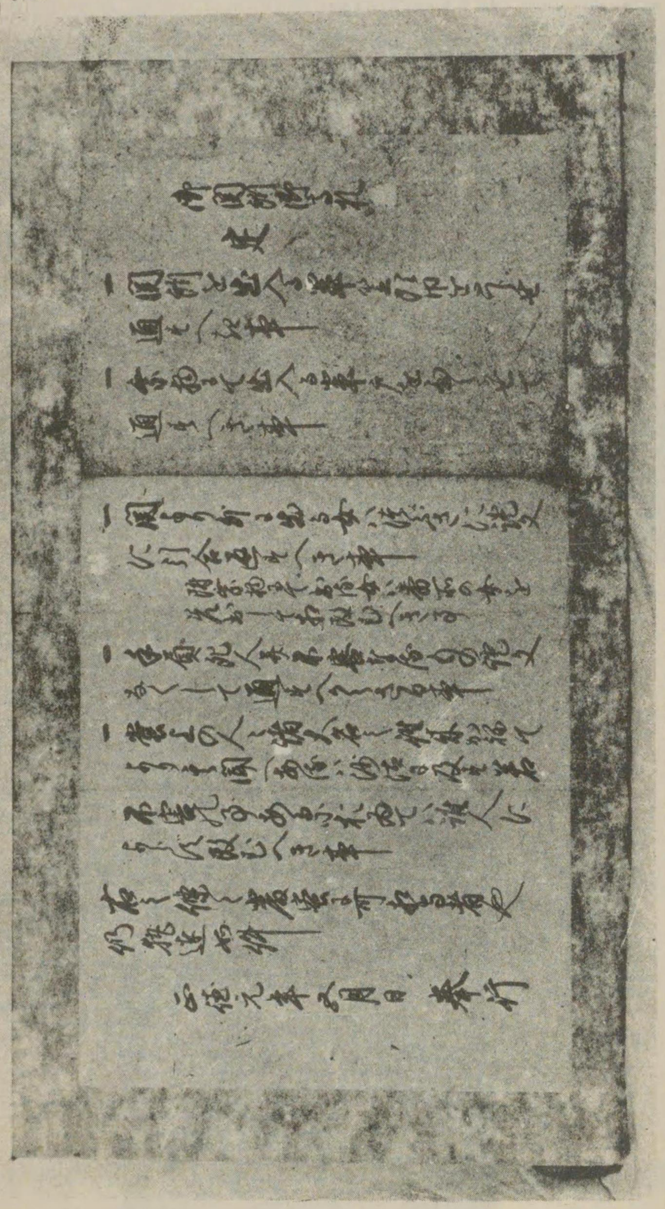
（縦一尺六分五厘・横一尺八寸四分）



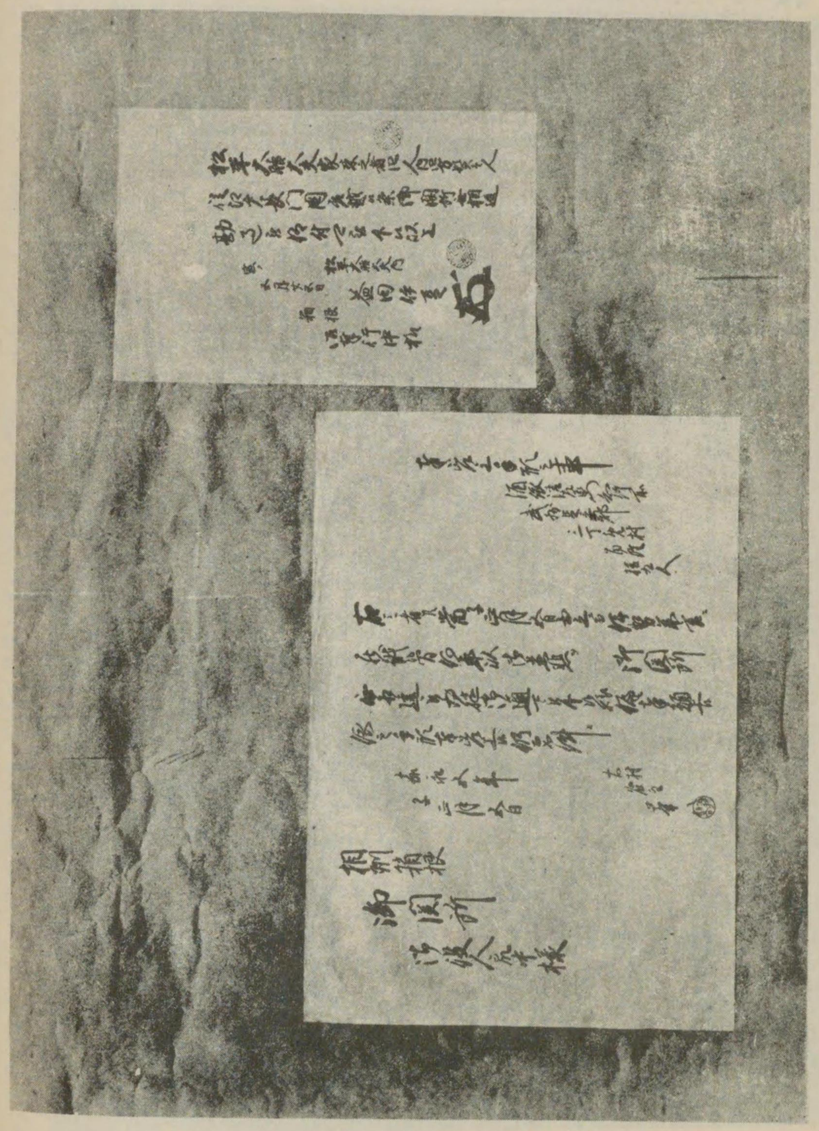
（縦一尺四分・横五寸一分）



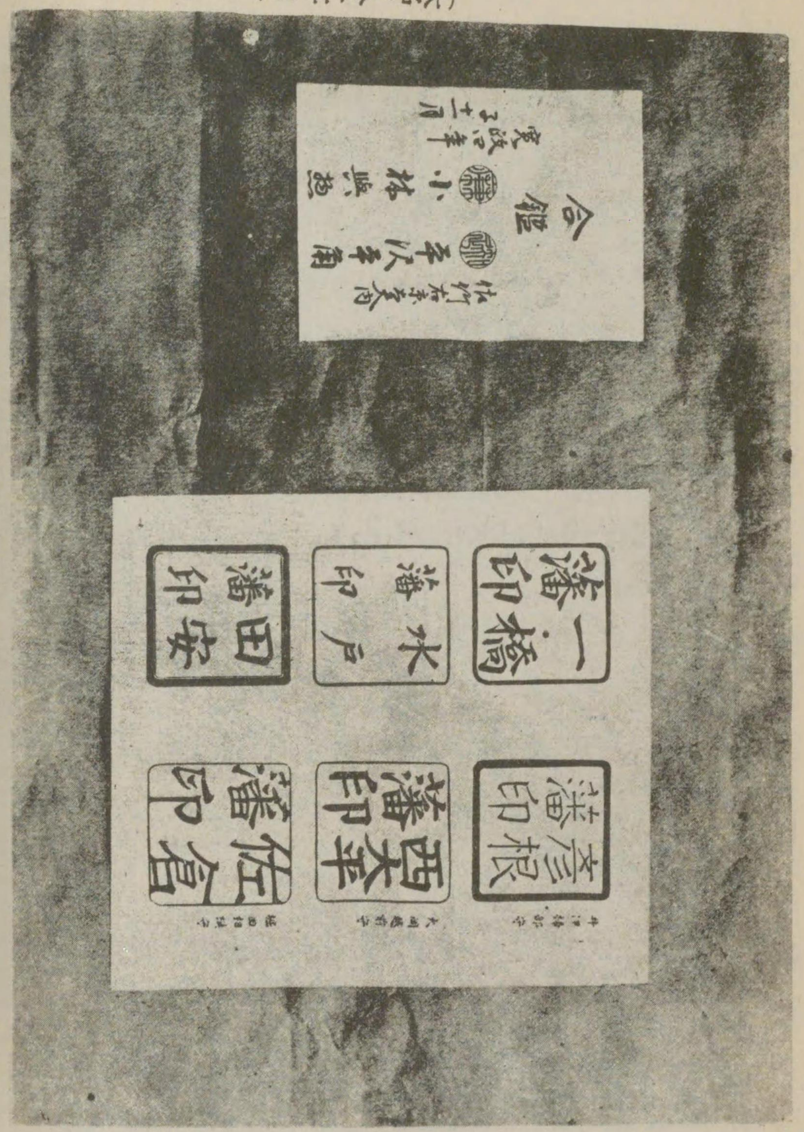
（縦一尺三分五厘・横一尺四寸八分五厘）



文札高所關根箱 年元德正・藏家内石

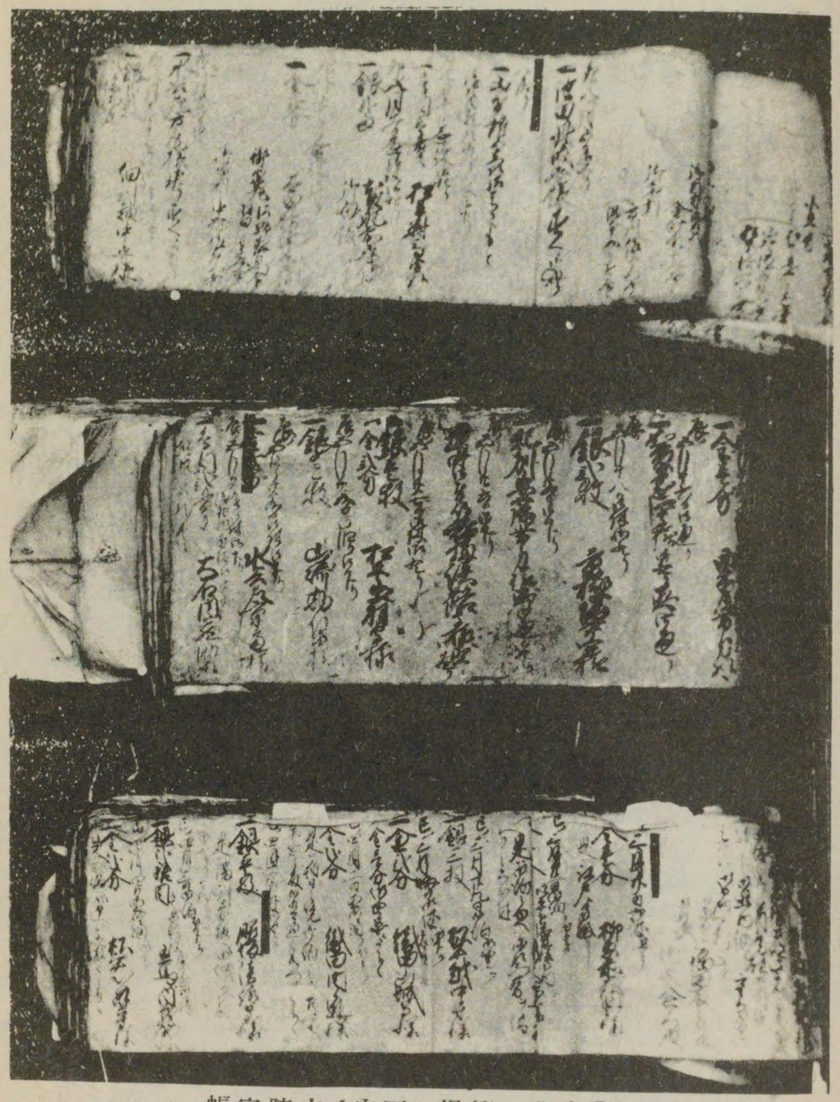


（分ノ姓百・家武）形手所關根箱・藏家内石



鑑合合見所關根箱・藏家内石

（大名ノ分二寸四分角・武士ノ分一寸角）



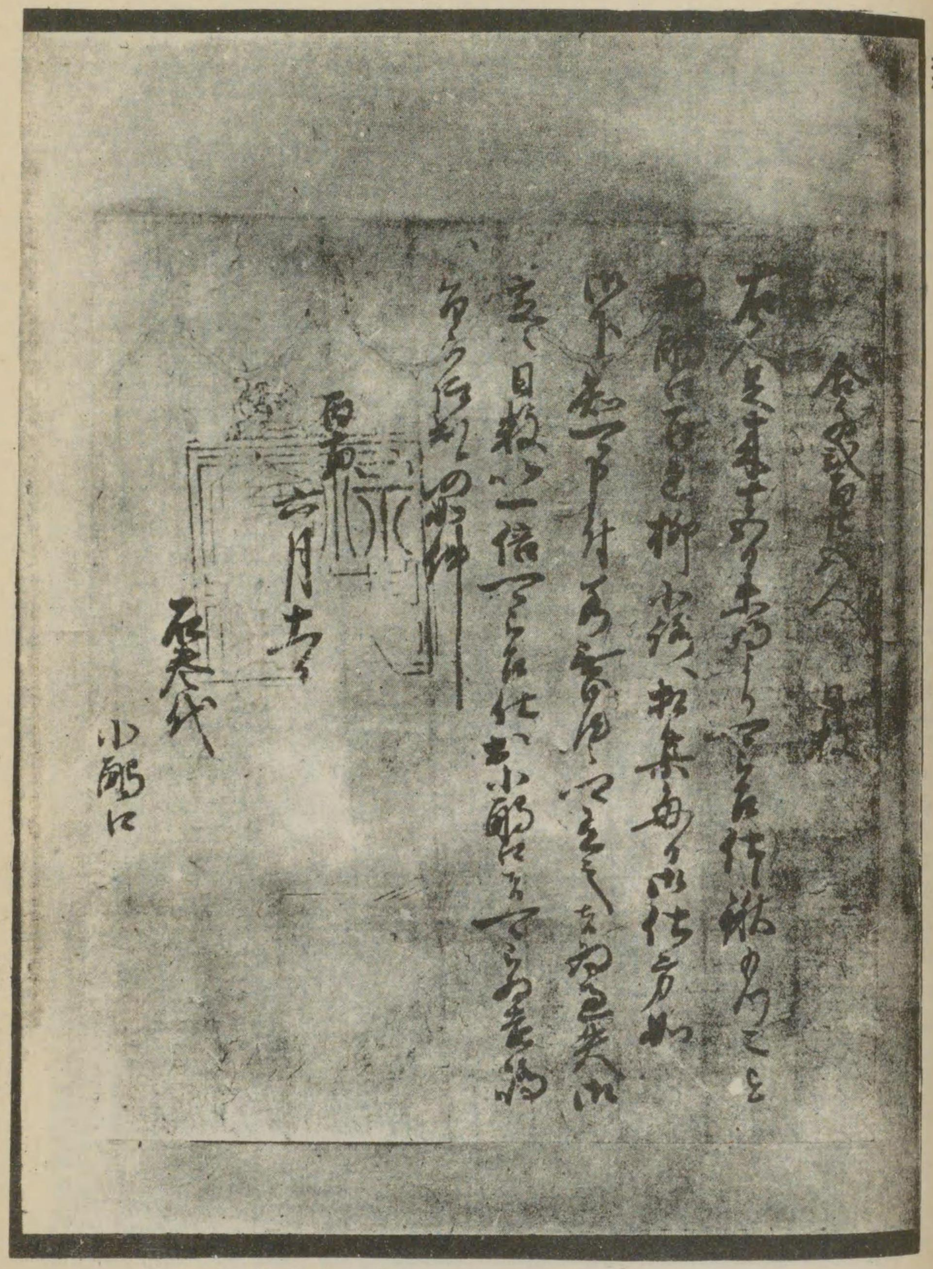
石内家藏・箱根（石内）本陣宿帳

（上）の黒線を附せる所は延寶年間、山鹿甚五左衛門が淺野内匠頭預けの際通行。

（中）の黒線を附せる所は元祿年間、大石内藏助が江戸表へ下向の際通行。

（下）の黒線を附せる右は元祿十四年、勅使柳原大納言が歸洛の際通行。

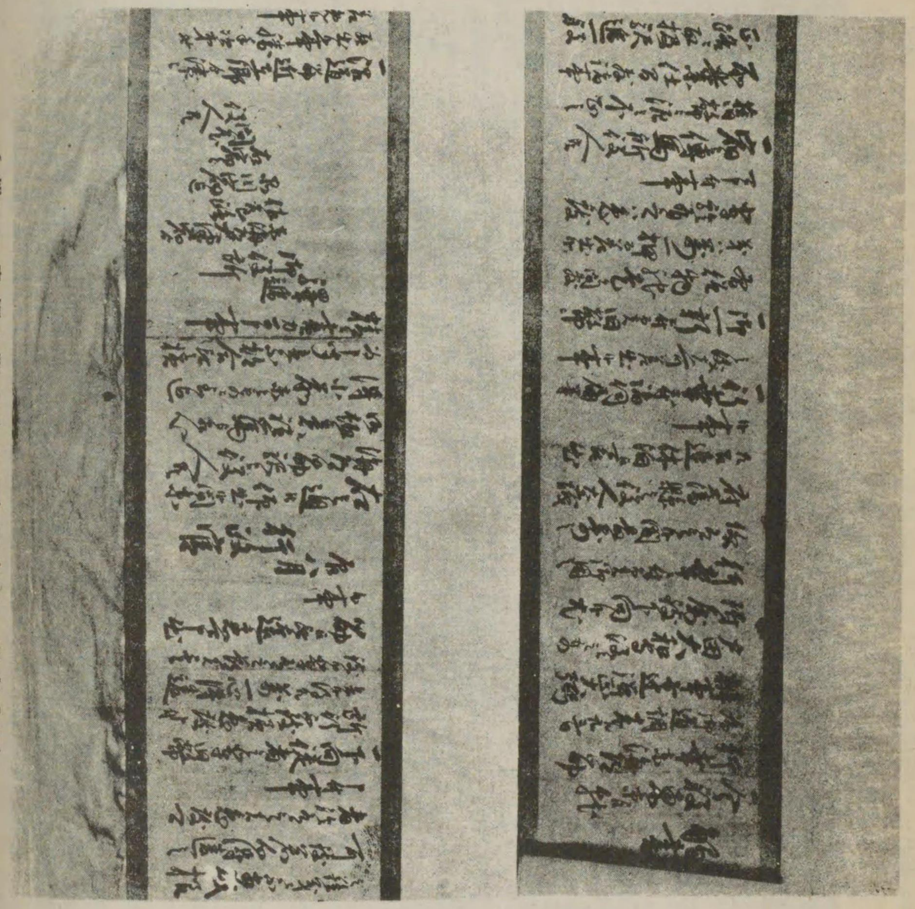
（下）の黒線を附せる左は元祿十四年、脇坂淡路守が赤穗城受取役として通行。



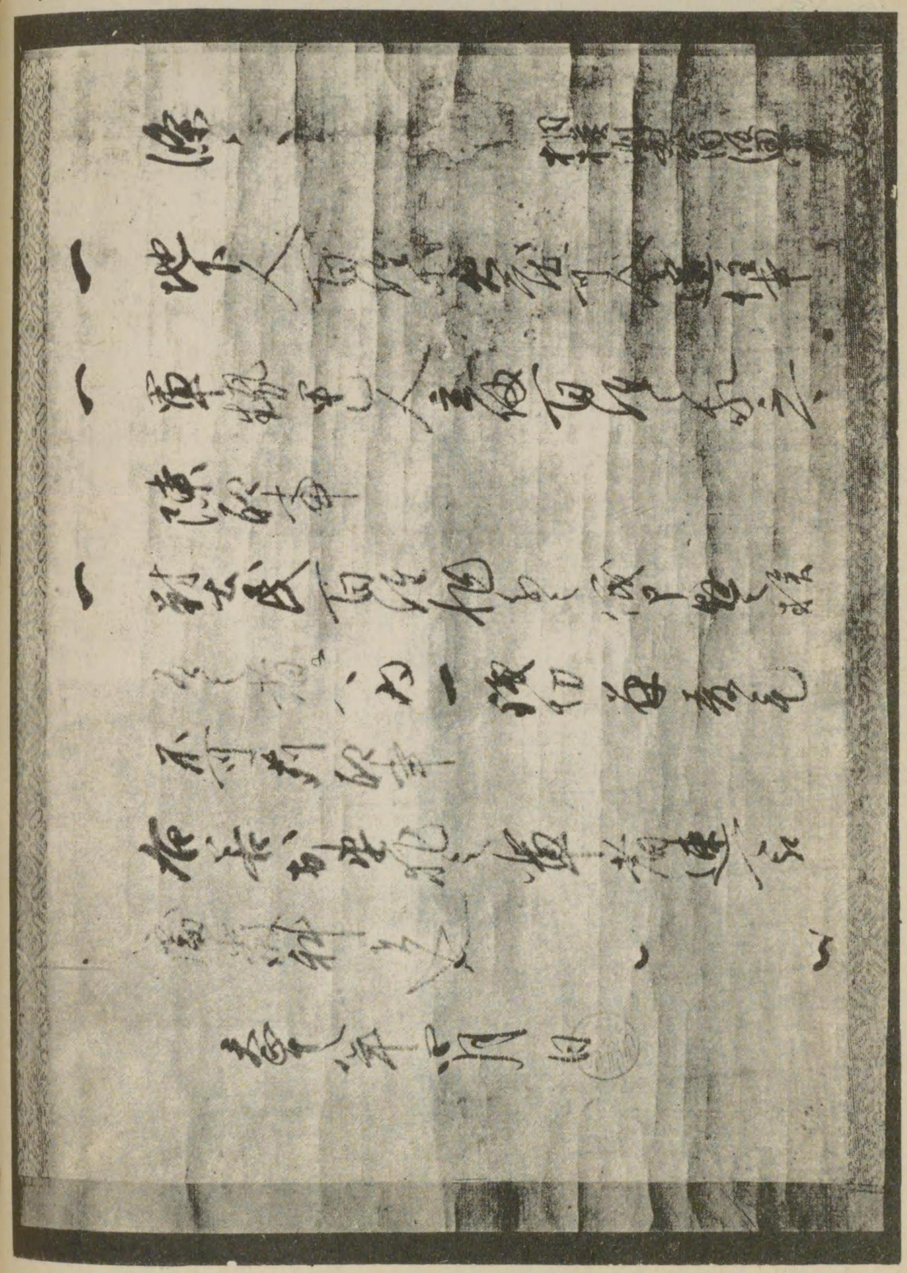
（縦九寸三分・横九寸六分）

福住家藏・北條氏（氏康）朱印状

（半紙を繼ぎ合せたる卷物）

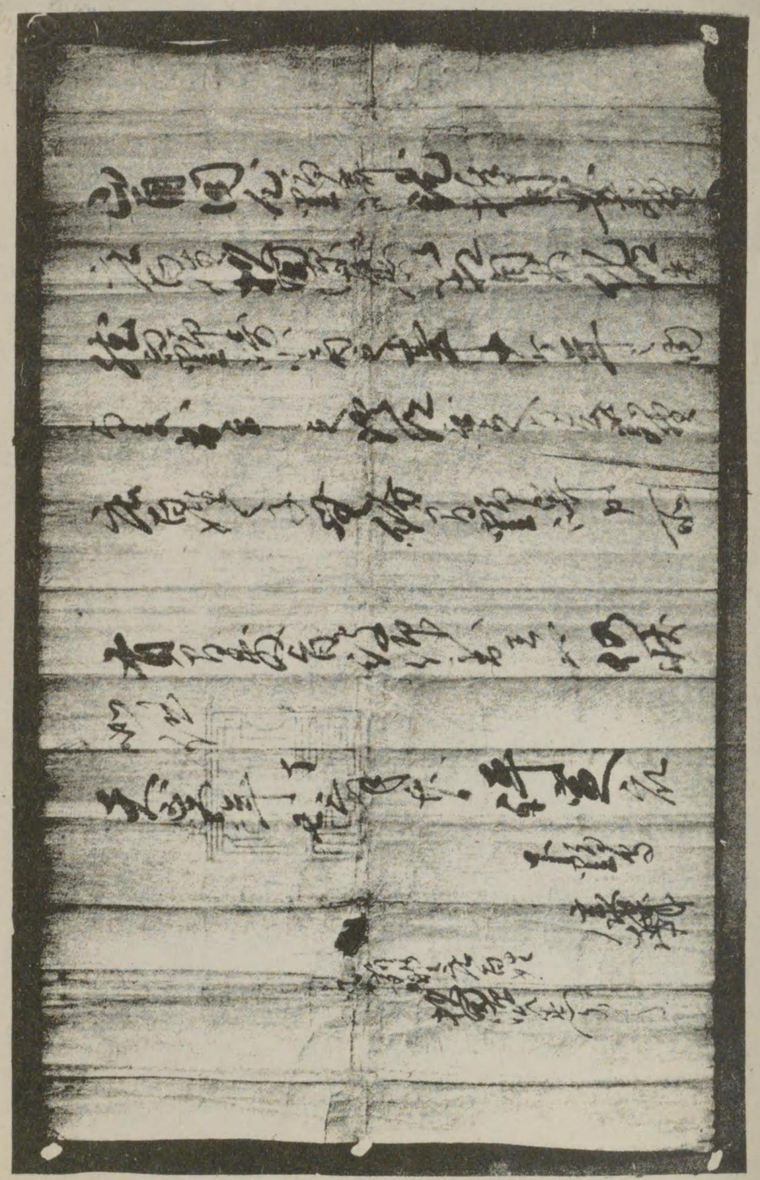


（部一）書觸の際の幸東御年四應慶・藏家内石



制禁吉秀臣豊・藏家備高

(縦一尺四寸五分・横二尺二寸)



狀印朱氏條北・藏家田杉

(縦一尺三分・横一尺六寸五分)

仙石原村文書・記錄

仙石原村文書・記錄

寛文拾貳年子年
相州西郡仙石原村諸事書付之覺

仙石原村

一御關所柵木數千百四本有間數九十九間有
一下木戸之柵木百三拾本上木戸之柵木貳拾四本有其ハ山田彌市左ヱ門様山中久内様御伐被遊御改ニ成候節改申候
元祿十六年未六月十一日御改ニ成候其節ハ田口與惣右ヱ門様御つめ被成候
小田原宮ノ前御札場迄五里半
宮城野添迄貳拾六町四拾間木賀迄壹里貳拾六丁四拾間
御廚たうげ迄貳拾七町貳拾間
御殿場迄三里
箱根堀貫迄壹里拾八町
駿加津迄壹里貳拾壹町
一當村ゟ道法

一仙石原村ノ内　　東西百貳拾間
　　南北百五拾間
一御番所ハ村ゟ東　　但さく百六拾五間
　　不殘ゆいさく
一御番所ゟ五間前ハ川　但長貳間半之橋
　此水口村氏神之森ゟ出村之者用水ニ取申候殘水又あきび澤と申澤ゟ出御番所前ニてをち合申候
一百性家數合貳拾軒　馬合九疋
　内
　　四軒　村足輕草切
　　拾壹軒　脇百性
　　三軒　かう在家
　　壹軒　寺門前之者
　　壹軒　名主家
一先田畑合貳町六反五畝拾五歩
一高九石三斗三升　先高
　先年ハ田方が御座候共不作仕候ニ付三拾貳年以前之年御訴訟申上ケ畑ニ仕田無御座候

一畑反別合五町四反九畝拾八歩
一高貳拾貳石九斗八升八合　今高
　外ニ
　四反壹畝拾三歩　御番所屋敷御定番屋敷
　　寺御免
一百性しよさニ足駄を打申候足駄之木先年石所之山又者御廚深澤山竹之下山ニて取其以後貳子山神山ふから山ニ而取申候へ共今程古木無御座候ニ付七年以前午之年ゟ富士山御伐木之こつは御訴訟申上ケ足駄打小田原へ出賣過合ニ仕候最江戸へ賣申義も御座候當村ゟ富士山迄道五里御座候
一薪取山村ゟ北いのはながたけふもとすきのほら道法拾五町山東西貳拾丁南北四五丁此山にて薪其外箱根兩町へ賣レ薪そう丸太木取かつて賣申義も御座候
一薪取山ゟ西道法拾八丁しやくしご屋山東西八町南北拾貳三丁此山にて薪其外箱根兩町へ賣申薪切箱根海尻たうごぶち迄出し申道法壹里九町御座候
一馬草並かや薪かり申候場村ゟ西道法三四町裡西之平東西拾四五丁南北拾八丁程御座候最冬草茂此内ニか里置し此外箱根海尻迄壹里九丁之間不殘かや原ニて御座候
一御番所さく破損又ハそうじ人足御用次第節々人足出し申候
一山ぬけ御座候時村中壹人も不殘罷出尋申候

一正月御禮錢毎年御割付次第出し申候
一御廚ゟ殿様被爲成御座候へバ御辨當賄薪人足持送道者御廚境ゟ宮城野境迄つくり申義も御座候
一箱根御番所ゟ御廚御代官様へ御用状通し申候節村次人足出し申候最夜ニ入候へバ貳人つゝ指越申候
一東之澤宮城野兩村之橋かけ人足毎年出し申候
一御番替駄賃傳馬下リニ壹疋增馬共貳疋宛毎月相勤申候
一御上洛御座候得バ村足輕御使目小田原酒川ゟ箱根之間橋之奉行道奉行最辻御番仕之者茂御座候
一ちやうせん人りうきう人御道御座候へバ村足輕御役目ニ小田原辻御番其外諸役仕申義も御座候
一殿様御鹿狩御手うい被遊候節奉公申上候
一石かけ山ゟ御材木出申候時ハ村足輕御役目ニ被仰付候得出おし仕罷出之義も御座候
一箱根堀貫江御用状道候へバ村次人足出し申義も御座候最夜ニ入候へバ貳人づゝ指越申候
一當村御番所四拾七年以前とらノ年御上洛御座候ニ付甲州駿州兩國に之ぬけ道御座候　八木次郎右エ門様ゟ其仰上ケ　御公儀御目付黒川八左エ門様大河忠右エ門様御兩人御越被遊御忍ふニ而御立被成候
一臺岳大たけ御兩山村ゟ南道法拾八町東西貳拾四五丁南北拾六七町不殘ぞう木貳拾貳年以前卯年御關所御かこいに御留置被成候
一御番所ゟ臺岳たけ山之内うは子佛迄道法三拾壹町うは子佛御たけ壹尺貳寸よこ壹尺貳寸座藏石佛かうぼう御作坐像と申傳候

石堂貳尺四方拾壹年以前とうの年仙石原村ゟ取立申候・
一うは佛ゟ拾五間前ぜん之湯と申先年八本箱根ゟ小屋かけ御廚邊之者入候得共臺岳山御被成候節一道ニ御留被成候
一うは佛ゟ拾間程前六地藏三体石佛同所藥師壹体石佛右之六地藏藥師江戸柴之大佛作候木明山作と申御座候
一うは佛ゟ道法三拾間程北方ゑんま佛石佛
但みうら之（カ）佛師作と申候此所ニ硯水と申大石ににこり水何程之日てりにも御座候も同所少脇大石ニかうぼう御手と申ぼんじ御座候何之ぼんじに御座候も存不申候
一うは佛ゟ道法七町東之方さい川原拾間程前日たき地藏石佛三体かうぼう作と申傳御座候同所ニ大日如來石佛同所ニ地藏壹体石佛何れ茂弘法作と申傳御座候
一さいの川原ゟ貳拾間程北之方ち乃いけ地ごくと申ひろさ拾間五間程御座候只今程ハうまり水少御座候
一さい川原ゟ貳町程東之方むけんちごくと申東西四五町南北拾町程之深き谷御座候其澤そこにゑ申所數多御座候
一さい川原ゟ東南之間しやらだうちごくと申東西壹町程南北貳町程之川原御座候其内にゑ申所貳三ヶ所ゆわうのにをひつよく御座候
一さいの川原ゟ四町程南之方かんむりかたけふもとに古ちごくと申東西三町程南北壹町半程之川原御座候其内ニかまの段と申高さ七八尺直　貳間四方程之石つか御座候
一うは佛ゟ箱根水海新宮舟付迄道法拾貳町貳拾間此所箱根兩町之者薪取舟付取御座候是ゟ箱根と仙石原境ならが

岳迄三町程御座候

一禪宗安叟派龍虎山長安寺本尊者聖觀音本佛誰之作茂存不申候本寺板橋村香林寺ニ而御座候
此寺拾五年以前戊年當村ニ寺無御座候ニ付御訴訟申上ケ取立し

一諏訪大明神森　東西三拾間六尺廻かし木壹本　外ハぞう木にて南北貳拾間御座候
　宮立　長貳尺九寸五分
　　貳尺三寸五分　但大板ふき

右之宮仙石原村始之氏神ニ而御座候最ゑんき之たちも無御座候

一森之内ニ拾貳間七間程之いけ御座候此水村之者本なかや共用水ニ遣申候殘水御番所前へなが連申候

一山神森東西拾七間南北拾壹間不殘ぞう木に御座候
　宮立　長貳尺七寸五分但大板ふきニ御座候
　　貳尺五寸五分

一御番所ゟ箱根水海たうごふち舟付迄道法壹里九丁堀貫迄壹里八町拾此たうごふち之南に指渡し壹丈程之をけ成
の杉之手御座候然夫たらふちと申傳候此所箱根兩町之者ミくりや諸事買出や申荷物置申候所ニ而御座候

（勝俣門三氏藏）

請取申御米之事

米拾五俵也

右ハ　御公儀様江御湯上り候內木賀私家御湯所に罷成候ニ付爲御褒美右之御米被爲下置難有奉存請取申所實正ニ
御座候爲後日仍而如件

寶永貳年
酉ノ十一月

木野村外太夫様
小出仁右衛門様

木賀湯宿
太郎兵衛

（勝俣門三氏藏）

證文之事

一姥子湯江元箱根ゟ通路之儀神宮山古通瀨以御停山被　仰付廻り道仕罷候様ニと於御評定所被仰付候ニ付元箱根
ゟ湖水船ニ而姥子湯江通路堅仕間敷候向山江山稼並漁船之儀者只今迄之通相心得他所者ハ不及申女一切船ニ乘
申間敷事

一姥子湯ハ箱根仙石原兩御關所御要害之場所御座候間小屋懸を取繕候程之儀者各別惣而唯今迄之通ニ可相心得事

一　惣而御關所御要害ニ付而者小田原ゟ之御下知違背仕間敷事

右之通被仰渡奉畏候急度相守可申候仍而證文如件

享保十六年辛亥十一月晦日

相州箱根權現社人

名主　和田大炊印

年寄　川井兵右衛門印

飯田賴母印

寺社御役所様

（勝俣門三氏藏）

差上申證文之事

一當村地獄山之内湯涌出候場所ゟ此度右之湯當村南小屋と申所へ樋ニ而引取小屋掛仕當村之者洗足湯ニ仕度旨奉願候處願之通被　仰付小屋掛之儀ハ雨ニ濡不申迄ニ隨分麁相ニ仕外之湯場之通ニ取繕候儀無之様可仕旨被　仰渡奉畏難有奉存候爲後日證文仍而如件

元文元丙辰年十二月

仙石原村

名主　太郎兵衛

組頭　勘右衛門

同　庄右衛門

地方御役所様

天明七年

猪圍御拜借割渡帳

未ノ三月

仙石原村

組頭　三右ヱ門

仝　才兵ヱ

仝　藤右ヱ門

仝　門右ヱ門

百性代　嘉兵ヱ

同　三右衛門

惣百姓代　嘉兵衛

（勝俣門三氏藏）

奉請取御米之事

一米貳拾俵也

此譯未年ゟ亥年迄五ヶ年御用捨

子年ゟ未年迄貳拾年賦年々壹俵ツヽ御上納仕筈
右者當村猪圍御普請御入用御願申上候處以御慈悲ヲ御拜借米被仰付御米奉受取候處實正ニ御座候御返上之儀者當未年ゟ來る亥年迄五ヶ年御用捨來ル子年ゟ未年迄元濟貳拾年賦被仰付難有奉畏候右御年割之通急度御上納可仕候爲後日依而如件

天明七丁未年三月

奉差上證文之事

一當村猪圍御普請ニ付以御慈悲御拜借米被仰付難有仕合ニ奉存候御返上納之儀者當未年ゟ來る亥年迄五ヶ年御用捨來る子年ゟ未年迄元濟貳拾年賦ニ被仰付難有奉畏候此上如何樣之異變御座候共御願ヶ間敷儀不申上御年割之通急度御上納可仕候爲後日依而如件

天明丁未三月　仙石村（原）

富竹五右ヱ門樣
增田吉八樣

組頭　三右ヱ門印
仝　才兵衛印
藤右ヱ門印
門右ヱ門印
百性代　嘉兵衛印

佐藤久右ヱ門樣
森田　佐兵衛樣
松本　文兵衛樣
佐藤　和三郎樣
坪田仁左ヱ門樣
鈴木郡八樣
右發開御役人

願書扣

乍恐以書付奉願上候御事

一當村之儀者山中之村方ニ而猪鹿帳敷田畑作毛荒し難義至極仕前々ゟ種々圍等仕相防申得共去ル卯年已來潰家並後家暮多御座候ニ付耕作手入等も相屆き兼申候然處去ル午年大不作仕當年之儀ニハ一統及飢ニ罷有申候得者前々通猪圍之義者相屆き不申當年之上者別而猪鹿多難義致候依之奉願上候者大數五千五百八拾間程之內四千八百間ノ場所猪圍被仰付被下置候ハヽ春作ゟ秋作迄無難ニ取入可申上候乍恐奉存候何卒御慈悲御普請被仰付人足御扶持米被下置候樣ニ奉願上候右奉願上候通被仰付被置候ハヾ大小之御百姓共相續可仕と難有仕合ニ奉存候已上

天明七丁未年三月

小前證文一札

一去秋作田畑共皆無ニ而村方大困窮仕候ニ付各々樣思召寄ニ而隣愍ヲ以種々與御願被下此度猪鹿圍之御申立ニ而御願被下候處御上樣ニも以御慈悲ヲ御米貳拾俵御拜借被仰付被下置候處銘々に御割渡し被下慥に請取申候然上ハ猪圍之義者何時成共御差圖次第ニ罷出御願書之通四千八百間之場丈夫々々可仕候御返上納之義も被申付次第少も無間違御返上納可仕併長年來之儀ハ御座候ニ付万一損失等も有之候ハヾ五人組内ニ而辨上納仕御役方江少も御苦勞掛申間敷爲其五人組頭之者共代判仕候爲後日依而如件

天明七丁未年三月

御役人中樣

一金壹歩七匁八分八厘七毛　長左ヱ門　嘉兵衛㊞
一同　德左ヱ門　德左ヱ門㊞
卯左ヱ門㊞
長兵衛㊞
（不明）爲右ヱ門㊞
惣右ヱ門㊞

一金壹歩ト八朱八分七厘　富右ヱ門
一同　甚右ヱ門

一同　林右ヱ門　清内
一同　平兵衛　門右ヱ門
一金貳朱ト三匁九分四厘四毛　おます　文右ヱ門
一金壹歩ト七匁八分八厘七毛　松右ヱ門　權左ヱ門
一同　文左ヱ門　八郎左ヱ門
一同　半右ヱ門　庄右ヱ門
一金壹歩七匁八分八厘七毛　三右ヱ門　重右ヱ門
一同　惣右ヱ門　石右ヱ門
一同　吉兵衛　加和右ヱ門
一同　元左ヱ門　長兵衛
一同　助左ヱ門　才兵衛
一同　勘兵衛　久左ヱ門
一同　甚左ヱ門　佐兵衛
一金貳朱ト三匁九分四厘四毛　惣八　三郎右ヱ門
一金壹歩七匁八分八厘七毛　孫左ヱ門　文右ヱ門
一金壹歩七匁八分八厘七毛　おくま　幸左ヱ門
一金貳朱三匁九分四厘四毛

一同　半左ヱ門
一金壹歩七匁八分八厘七毛　作兵衛
一同　安左ヱ門
一金貳朱ト三匁九分四厘四毛　おたね
一同　要左ヱ門
一同　伊左ヱ門
一金貳朱三匁九分四厘四毛　おやう
一金貳朱ト三匁九分四厘四毛　おしけ
一金壹歩ト七匁八分八厘七毛　清助
〆金拾八兩貳分ト　錢壹貫八拾八匁　此米貳拾俵也　相場拾俵七分替　錢五貫七百匁替
以下省略
一米貳拾俵御濟入扣
寛政四十一月二十五日納　十一月十六日新御藏江
一米壹俵　子ノ暮上納　一米壹俵　丑ノ暮上納
代金壹分貳朱ト四百拾文　代金貳分ト四百貳文十一月廿七日納

一金壹歩七匁八分八厘七毛　源左ヱ門
一同　幸右ヱ門
一同　藤右ヱ門
一同　市右ヱ門
一同　吉右ヱ門
一同　淺右ヱ門
一金壹歩七匁八分八厘七毛　惣左ヱ門
一同　利右ヱ門

（勝俣門三氏藏）

乍恐以書付御屆奉申上候御事
一御鷹餌指之儀ニ付申達御用有之間明二十八日朝五つ時村役人印形不殘持參小田原我等旅宿江無間違可被罷出候
此狀刻付ヲ以相廻し留村ゟ可被相返候以上
卯五月二十七日
江川太郎左ヱ門手代
飯田晋助
村々役人㊞

右之通御廻狀相廻リ申候ニ付乍恐寫書仕奉指上候以上
寛政七乙卯年五月二十八日
渡里作左ヱ門様
小川　甚五郎様

御鷹餌鳥請負人手先殺生人共江燒印札相渡置候處是迄請負人相止此度水鳥問屋六人之者共江請負申付燒印札茂相改候ニ付當卯六月迄之内新燒印札ニ引替殺生可致旨當卯六月過候而古燒印ヲ持殺生致候者有之候ハヽ其所江留置早速可訴出候最前々燒印札請取置候得共當時殺生相止罷出候者共茂此度改候新燒印引替候筈ニ候間是又可得其意

候

一此度燒札之判鑑相渡候間在々ニ而茂殺生人共江宿貸候ハヽ、殺生人共所持之燒印札ニ右判鑑引合相違無之候ハヽ、先達而相觸候通木錢請取間屋名主共ゟ申付宿貸可申候最人足等申付候節ハ是又御定之賃錢請取人足可指出候

一見屆さる餌さし共罷越候ハヽ、猶又燒印札判鑑引合相改可申候判鑑引合不申候ハヽ、無用捨其所留置早々可申出候

一前々相觸候通餌指共脇指帶候儀彌以不相成候事ニ候燒印致所持候共脇指帶歟又ハねたりが間敷儀申者有之候ハヽ、是又其所ニ留置早々可申出候

燒印札村方ニ拾ひ候者有之候ハヽ、早々可訴出候

一盜鳥致候者有之候ハヽ、急度相改召捕早速可申出候若隱置外ゟ於あらわるゝにハ其所者共迄急度可命付候

右之通リ相心得名主宅掛札ニ認め置可申候若違背之者有之候得ハ可爲禁事者也

卯四月

鈴　新　吉㊞

御用ニ付無印形

肥　重郎兵衛

無出座

大　内　膳

佐甚八㊞

間　筑前守㊞

公事方無印形

曲　甲斐守

公事方無印形

根　肥前守

久　丹後守㊞

柳　主膳正㊞

右之通御書付出候間得其意急度可相守候御書付之通新燒印札判鑑ハ村々江我等手代指出シ相渡シ候間最寄村方ゟ呼出シ候ハヽ、手代旅宿江村役人印形持參罷出請取可申候此廻狀披見之上別紙請印帖江領主地領名前肩書ニ認メ村々令請印刻付ヲ以相廻し留村ゟ我等役所江可相返者也

卯五月二十三日

江川太郎左エ門㊞

相模國足柄下郡

御料

私料

寺社領

一御鷹餌鳥請負人手先殺生人共焼印札相渡有之候處是迄之請負人相止此度水鳥問屋六人江請負被仰付焼御印形茂相改當卯六月迄之内新焼御印札引替殺生い多し候間右ニ付宿其外人足指出し方等此度御書付出候間右書付之趣ハ江川太郎左ヱ門様御書付之寫村々江御廻し被成候ニ付拝見仕候右御觸之趣違失無之急度相守可申旨右新焼御印札御判鑑壹村江壹枚ツヽ御渡被成奉請取被　仰聞候趣難有奉畏候依而請取印形指上申候以上

卯五月二十八日

江川太郎左ヱ門様御手代
飯田晋助様

村々役人㊞

右御呼出し當村方ハ六月朔日ニ小田原高梨町御旅宿江被出御判鑑壹枚受取申候

寛政七乙卯年六月九日寫申候

覺

當村小濱大膳と名乗
元名前　彦五郎

人相書

名主組頭

一年頃三十五六歳位
一せい高キ方
一青ひげ有之
一髯厚キ方
一顔細面
右者劍術指南いたし由ニ申有
鐵砲杯打候由風聞有之由

人相書

一年頃二十四五歳位
一顔細面色白
一目かたくひきつり候様ニ相見格別目立程ニハ無之
一鼻すじ通り
右者武州八王子ニ而飯盛奉公いたし候者之由
右之通り女房召連村々致徘徊候ハヽ早速召捕置様ニ江川太郎左ヱ門様ゟ御頼ニ付右体之者見當り候ハヽ、召捕置早速可被申出候湯場筋之義ハ別而心ヲ附心得違無之様小前末々迄可被申付置候此配符村分致印形早々以達留村ゟ可被相返候以上

一色白キ方
一手足爪にぢ虫にてちゝれ黒く相成居候
一月代厚キ方
一人柄至而宜（敷カ）（缺）由
一鼻すじ通り

同人女房

一せいひくき方
一見けん髪之内ニ懸ケ切痕薄く有之由
一髪厚キ方

卯六月十八日

清水中納言様去る八月八日御逝去ニ付普請者今日迄鳴物ハ來る十四日迄御停止ニ候

右之通リ従　公義被　仰出候間其旨可相心得候最寺社江も可申返候以上

卯七月十日

小川甚五郎

地（蟲喰）御役所

（勝俣門三氏藏）

二〇

覺

箱根御關所

一御要害山々江者旅人等揚り候儀無之若揚り候者有之節は早速前々より箱根兩町元箱根之者共注進仕候ニ付御關所ニ而吟味仕候儀ニ御座候惣而御關所近方之儀往還道之外は何レ之地所茂同前之儀ニ御座候

一箱根境木ゟ大平迄之内往還道筋ニ而手負亂心者其外紛敷者有之節は前々ゟ申付置候趣を以右三ヶ所ゟ御關所江注進仕來候

一湖水船通路之儀は箱根兩町元箱根之者共向山江薪取又は漁船等ハ御關所ニ而前々より相改不申候様又箱根兩町之者駿州御廚筋ニ而米薪木等相調候節は船積仕往來仕候御廚より柵木差出候茂箱根兩町之船迎ニ罷越船積仕御關所裏江着ヶ船揚仕候此外疑敷儀有之候得者早速遠見番所ゟ申聞候ニ付吟味仕候且又元箱根之船箱根兩町裏江懸り候節並ニ箱根兩町之船元箱根之方江罷越候節は毎度相改申候

一元箱根船通路之儀は享保十六亥年前々之格を以申付候趣は先達而右書面を以申上候通ニ御座候

一毎月御關所番人共之内湖水船ニ而相廻リ惣而御要害心を付神宮山古道並向山之儀あやしき儀茂有之候哉ニ見分仕候

一柵廻リ之儀月ニ三度宛番人之内相廻り申候

一御要害山々

榎澤林　屏風山

久庫山　神宮山林

右四ヶ所竹木一切伐取不申候様ニ前々より申付候

鞍掛山　孫助山

駒ヶ嶽　二子山

堂ヶ嶋　湖水向山々

右之分御關所御要害ニ而御座候

仙石原御關所

一御要害柵廻リ山廻リ之儀壹ヶ月ニ兩度宛番人共之内臺ヶ嶽地獄山筋姥子神宮山札場海尻とうこ淵邊迄相廻リ心付申候

右之内權現領茂御座候へ共山廻リ之節は姥子江懸リ候而前々ゟ見分道筋有之候ニ付今以其通ニ見分仕候尤御要

害山には旅人等揚リ候儀無御座候若揚者有之村方之者見出候得は早速前々ゟ御關所江注進仕候ニ付御關所ゟ吟味仕候右之外御要害之内ニ手負亂心者又ハ紛敷者有之節は村方より御關所江注進仕來候

一御要害山々

臺ヶ嶽林　　冠ヶ嶽　但シ山裾通ニ而は前々ゟ薪木取來申候
地獄山　　劔ヶ峰
紋右衛門平

右五ヶ所御要害ニ付前々ゟ竹木一切伐取不申候樣ニと申付置候

右之通御座候　以上

大久保出羽守内

未
八月

小倉　七右衛門印
小野木角右衛門印
大林　佐左衛門印
河村　甚左衛門印

齋藤　喜六郎殿
永打　孫治郎殿

（勝俣門三氏藏）

長安寺由緒書之支

一曹洞宗大樹派本寺香林寺龍虎山長安寺昔シ者姥子山後ニ者龍虎山與申候開山者機山逸和尚ニ而御座候從開山拙僧迄五代ニ而御座候　是普等門和尚迄

一先規長安寺之者同所大地獄湯前藥師禪定之下姥子之寺ニ而御座候此姥子石佛者弘法大師之自作與申傳候其外石佛數多有之候其後寺大破中絕仕年代久鋪廢リ罷在候所を稻葉美濃守樣御代ニ申上候而只今之寺地江引申候

一先姥子之寺開闢者延文元丙申年ニ而當元祿三年迄者三百三拾四年ニ而御座候

一其已後仙石原江引申候而之寺地者明曆元乙未年ニ而御座候其年ゟ當元祿三年迄三拾六年ニ御座候

相州西郡足柄上郡
仙石原
曹洞宗　長安寺

當寺三代天山呑盛（花押）

元祿十丁丑年九月吉山改之者也

大久保加賀樣
寺社御奉行所樣

○大地シン未年　當天明二寅年迄姥子から當寺始より
○スナフリ亥年　年來四百七拾三年　萬旭代迄

（長安寺藏）

往來手形

一此者三人　心願ニ付伊勢金毘羅善行寺其外所々佛神參詣仕候間所々　御關所無相違海道共ニ勘家たまハるべく候
萬一病死等御座候節は其所之御沙法を以御取成し被下候仍而往來手形如件

大久保加賀守領分
相模國足柄上郡
仙石原村
禪宗　長安寺印

丑正月

國々所々
御關所
役人衆中
村々　役人中

（長安寺藏）

文政元寅年
殿樣思召御趣意御箇條之寫

十一月

第一御箇條之御趣意わ風俗ハあしき方へわ流れ易くよき方へわ趣難きものにて今ハ世上何事も昔と違ひ人情輕薄ニ移り行候間隨分と古風に立戻り實意律義をとかく本とし御上を大切ニ奉存御役人並村役人之申付を守り父母を敬ひ兄弟睦敷諸親類一和いたし我身の上計りの勝手つくの事堅くすへから須惣而よからぬ事ハ皆一時身勝手の了簡より起類事ニて津まり身の爲にも不成と心得べし殊ニ御領分ハ江戸近くニ候まゝ國々のもの立入利欲を以欺き候事共多く遂ニ夫に乘じ種々の願事など企其末身上を果し候類のものも是迄少からずとかく正しからぬ新規の事を好へからず在來を守り古來の風儀取失不申所專要ニ候年よりたるもの共わ年若きものへ常々異見を加へ可申事

第二の御箇條之趣意わ村々近年困窮つのり其中ニ者別而凌急（兼）の者も不少夫も多くわ身分の奢より出し事ニ候天災病難等無據難澁に至候者無是非事ニ候得共夫ハたまさかの事ニて其餘わ世上の風儀に移り昔に田畑等わまさり不申多くわ劣り候中ニ却て衣食住諸道具迄も昔とわはるかに替り遂に自然と困窮いやましたる事にて習ハしの移わ日にも立す我も人もしらずしらずに月日を經る内に不立行樣ニ或るものニ候何事も他領の事を引くらへす御領

分限りに古來質朴の風を篤く守り奢りかましき事わかりそめの眞似にもいたすべからず

御治世安樂にくらすへきを己と奢り長し困窮いたし候わ御ケ條の通實ニ勿躰なき御事と可奉存候今の世上下共困窮乃根本ハ奢るにありと心得べし

第三御箇條の御趣意ハ農業を怠り朝寐晝寐し前後の勤辨もなく借錢にて日を送る時わ次第ニ貧困におよび家株をも失ひ果ニ至るものニ候常ニ農業精出し朝より田畑に出日をくらし夜わ仕事不怠かく無油斷かせぐものと身上をおこし後安樂に至るハ定りたる事に候己の不情より御年貢も滯り上納もの差支などするは勿躰なき事の第一ニ而世の中の人わ重きも輕きも家業のなきといふ事はなく恐多も

御上わ　公義に御役の御勤御家中わ御上へ夫々の御奉公是等貴賤の違は有之候得共皆をのをの其家業ニ候然るを百姓共我本業をおろそかに心得類わ不埒の至ニ候其上水旱大風蟲付等之天災わ

御上より次第ニより御救御用捨等も可有之事ニ候得共五穀不熟ハ百姓一統難儀たる事相分り候得共　御上ニても御收納定り通無之時わ御公務を初御入用之出道無之矢張御難澁わ同じ事ニ候其中ニ而御救御用捨被下候者いか計り難有事申迄も有之間敷候元より何も難有とわ可奉存候得共其內ニ者夫にあまへ左迄もなき年柄も難澁を申立御用捨を願へバ骨折須ニすむ事のよふニ心得違候而者返々も勿躰なき所存ニ候間朝夕能々此等の所を深く考へ本業の勤いさゝか怠りあるまじく尤土地相應の餘業村爲にも相成害之無之儀ハ捨置可申候諸事ニ眼出者百姓共爲ヲ思召而之御事ニ付彌重んじ奉り堅く相守勵可申事

第四御箇條之御趣意わ物而大小貧富わをのをのの受得たる所なれば能其分限を存し小わ大をうらやみ貧富を眞似すべから須人情わ我分に越たる事を好ものニも種々の惡事はみな此所より出來るものなれば我分限の守わ大切の事と心得べし偖面々の家株皆父祖とり受傳ふるものなれば我が物と存ずべからず族大く富たるものは先祖の骨折丹精したる本を考へ何とかして其株を持崩ましくと朝夕心掛少しく貧しきとても父祖より　譲り渡せしものなれば自からいやしみあなどり捨すいつこ迄も骨折丹精して作り出し先祖ニ報ひ子孫に傳んと志すべし貧富ハ皆己か骨折次第にて候得者かせぐ事わ人におとらしと眞先に骨折べし是わ分限を守ると違ひかせぎて身を越須わ人々の心掛次第の事と可存其中にも不運にして色々の災難に逢願通り屆かぬもあるべし是とても前書之通實意ニ志須上わ又時節を得相應に其分限わ立行事と可心得事

第五箇條之御趣意わ都て頭立たる者のよしあしハ其下ニ移入るもの故名主村役人等わ我が一分の心掛大切ニて何事によらず正直ニ取計ふ時ハ風儀の助ニも成り一村之盛衰ニも移り不輕役前ニ候との事ニて役筋之者

御上之被　仰出御定筋を人先ニ守りて下へ示し候が專一之勤と可存難有御趣意之筋不屆わ心掛と取斗ニ可依候

御年貢の事わかりそめにも不正之取計無之小前のもの共も行立樣此處も厚く心を用正路ニはからふべし　惣而拜借上納等右に准じ候事ニ候手前勝手の事あるか　又依怙贔負の事有之候而者小前之者心服不致儀ニ候條割合等殊ニ入念勘定帳面等折々小前へも爲見置可申村々の困窮多くわ名主村役人の私曲より出來るものニ候今般御轉役御往來等ニ付夫役金可被仰付處さへ此御時節　御上ニ而御用捨被下候程之難有御趣意を能々相考へ銘々役前之入用等正路にいたし成丈相減小前の者爲ニ成り候樣取計可遣候とかく諸事定式を守り一己の存寄一分一時の手柄立致し末々一統之難澁ニ及び村爲ニ不相成事共堅くいたすましくとかく深切ニ心を用ゆべき事

第六御箇條之御趣意わ別而難有事ニてかく迄も下々の事を思召被下候事ニ候志かりとて御役人中ニても輕蔑いたすべからず御役人の義は

御上之御名代と心得大切ニ可存候其中御威光をかり我非分之事有之候ハヽ

御上にて御捨置あるましきとの御事ニ候得共御ケ條之通右様之事も候ハヽ有躰に可申出候惰村方勝手つくの事を謀り非法にも無之事を僞り巧みて御役人之越度に申出候もの有之候ハヽ是者御吟味之上曲事可被仰付候吳々何事も僞り不飭有躰ニ可申出候ケ樣ニ厚く被　仰出候事を等閑ニ心得可申出筈之儀も不申出もし外より顯れ候ハヾ其所之役人不念たるべき事

右者今度被　仰出候御箇條之御趣意篤呑込候樣可申諭旨御沙汰ニ付書面之通申渡し御領内之事共かく迄被思召候儀難有事ニ候條朝暮不相忘一統相勵可申もの也

寅十一月

（仙石原村役場藏）

村送り一札

矢倉澤村

一札之事

一當村百姓權七弟富藏與申者今般其御村百姓石右衞門聟養子ニ差遣申候右ニ付而者田畑山林敷金等一切附遣不申候並此方少茂構候義無御座候以上

文政六未年二月

名主
英治郎㊞

村巷一札之事

一當村百姓松五良姉ゆく當丑貳拾貳歳ニ罷成申同人女子とく五才ニ罷成申候處右兩人共ニ其御村方百姓平四郎女房ニ緣付參り申候尤田畑山林敷金等付添遣シ不申候勿論御法度之宗門ニ而は無御座候爲後日村替一札仍而如件

文政十二己丑年
二月

宮城野村
組頭
平五郎㊞

仙石原村
御役人中

一札

一當村百姓所左衞門娘ふじ儀三十才罷成申候代々禪宗ニ而拙院旦那ニ紛無御座候然處今般代々禪宗ニ而仙石原村百姓孫左衞門女房ニ緣付ニ參り申候依之右ふじ儀茂寺替仕孫左衞門と同寺檀那罷成度由相願申候尤拙院方少茂構無御座候願之通り被　仰付可被下候爲後日一札依而如件

天保十己亥年二月

寺社御奉行所

人別送之事

一當村百姓增五郎とし者當卯四十三歳ニ罷成申候此度其御村方庄兵衛殿遺跡ニ緣附參申候尤田畑山林數金等一切附遣不申候依之當村人別相除其御村内人別江御差加江可被成候此段申送候以上

安政二乙卯年三月

川村岸
名主　成　藏㊞

仙石原村
御名主中

一　札

一駿州御厨大堰村百姓惣助娘さだ儀代々法花宗ニ而拙寺ニ於て紛無御座候然處此度相州足柄上郡仙石原村百姓清内倅萬次郎女房ニ緣付參り申候ニ付宗旨寺替仕右萬次郎と同宗同寺貴寺旦那ニ被成度由相願申候拙寺少茂構無御座候間自今以後貴寺旦那ニ御加判可被成爲後日如件

安政三丙辰年　三月

仙石原村
長安寺

駿東郡御厨中丸村
法花院　蓬靜寺㊞

（仙石原村役場藏）

往來手形一札之事

一此忠右衞門と申者代々禪宗ニ而拙寺擅那之者紛相違無御座候

此度心願ニ付諸國神社佛閣順拜仕度罷出候間所々海陸御關所無留滯御透可被下候若途中行暮之砌ハ止宿願入候萬一病死仕候ハヽ其所之御作法次第ニ取計可仕候爲後日往來一札仍而如件

安政六未正月

京妙心寺末
江戸深川　宣雲寺㊞

所々海陸
御關所
御役人衆中
諸國村々役人中

天保十一年
仙石原御關所山越一件
庚子五月

天保十一庚子年五月十五日
御關所御要害山越仕候者人別扣
御吟味ニ付申候
生國上野之國勢多郡前橋村寶印但シさいもん讀

生國奥州會津米汲村寶印

江戸神田作間町出生寶印

出生房州所不知と申

同國同郡同所　年三十四才　活　柳
　　年二十七才　女房ミつの

活柳弟子
年廿三才　岩　元
但シ參現之下乘讀
年廿六才　善　教
年廿三才女房はる

初少之節品川江參居申候三ヶ年修行
生國江戸麹町壹町目

〆囚人六人　內女貳人

右六人之者共五月十五日御要害山越候ニ付同日御關所樣ゟ早速取方ニ御出被成候由ヲ早々村役人江御沙汰御座候而御取方御役人中樣方定御番人石村五郎左衞門御先手原澤金治郎樣富永治次郎樣外ニ當村ゟ村筒壹人御召徒〆四人御出被成其跡御關所樣江追々村筒相勤申候處同月十八日沼津宿川くるわ松原ニ而被召捕其夜沼津泊リ十九日御厨佐野村江泊リニ而夫ゟ廿日神山村繼ニ而御殿場村書認メニ而御先觸參リ候得共小田原ゟ御先手組御聞ニ合兼候故當村江被　仰付村筒不殘罷出御殿場村江參リ御取方御役人與同道爲堅メ仕參リ候囚人山籠ニ而六挺此人足拾八人外ニ雜物持人足共御厨人足ニ而當村江持越此日七ツ時頃當村ニ而請取囚人宿長安寺に御座候同日於御關所囚人壹人宛御呼出シ御吟味御座候同日小田原ゟ手がね御持參ニ而御同身方御三人御出被成並右之御取方衆御貳人外ニ村筒九人其外當村中不殘參リ兩村役人立合晝夜番仕居候處同廿一日小田原ゟ御物頭篠窪虎之丞樣御馬ニ御召御出被遊候御先手組小頭樣共拾人御召徒御仲間拾壹人〆廿貳人暮六ツ時頃
御關所江御入御關所江御泊リ御馬共翌廿二日四ツ時右囚人御請取被遊御引拂ニ相成申候
一湯本村番人貳人廿一日參リそと見廻リ爲致申候

善教弟子
年四十才　龍　山

一御關所御番士御當番川添福之助樣定御番人石村五郎左衞門樣同杉田佐右衞門樣御番士村山清助樣小田原ゟ御登
り同月廿日惣立合ニ而御吟味被爲在候
一同日五ツ時頃御ゟ法山口榮三郎樣小田原ゟ御出被成當村宮城野村兩村江手退無之樣夫々江御世話被遊被成下候
御註進次第
一仙石原御關所御要害山越御座候と五月十五日御掛樣江口上ニ而御屆ケ奉申上候
一右之山越六人十八日沼津宿手前ニ而被召捕候次第ヲ御掛リ樣江口上ニ而御屆ケ奉申上候十九日に
屆書之扣
乍恐以書付御屆ケ奉申上候御事
仙石原　御關所御要害山越仕候囚人六人內男四人女貳人今日晝七ツ時頃仙石原村江御差置被遊私共兩村江晝夜
共番被　仰付候ニ付奉畏役人共附添小前之者共代々仕候此段乍恐以書付御屆奉申上候以上
天保十一庚子年五月廿日

小川　共藏樣
男澤茂太夫樣
小立　順助樣

仙石原村　役人連印
宮城野村　同　斷

御引拂之御注進書之扣
乍恐以書付御屆ケ奉申上候御事
去ル廿日ゟ當村江御差置被遊候囚人六人今廿一日四ツ時御召下リ候ニ付村方引拂ニ相成申候此段乍恐以書付御
屆ケ奉申上候以上
天保十一庚子年五月廿二日

小川　共藏樣
男澤茂太夫樣
小立　順助樣

仙石原村役人連印
宮城野村　同　斷

同月廿八日當村宮城野村兩村惣役人御目付所江御呼出シ有之候而山越之樣子御尋被遊候處御尋之儀者當村ニ而山
越之者共を見附候者無有之御尋ニ而役人壹人吟味ニ御尋御座候處役人共申上候者於當村者見附候者壹人茂無御座
旨申上候然ル處御關所ゟ山越之者有之候與御沙汰ニおよび相驚早速小前之者相集メあやしき儀見出ニおよび候者
無有之哉ニ與申候得共壹人茂御座候と申上候右之通り申上候而兩村廿九日罷歸り申候
其後六月十四日惣役人當村宮城野村兩村御呼出シ有之候處此日口書與相成申候口書左ニ附置申候

御吟味ニ付乍恐以書付奉申上候御事

當村御關所ヲ除キ山越仕候無宿活柳外三人並女共兩人被爲召捕御吟味被爲在候處溫泉筋徘徊仕去月十五日御關所七八町手前ゟ左之方江這入山越仕候段奉申上候ニ付其節私共一同怪敷儀見聞および候儀無之哉第一私共守方之儀ハ兼々嚴重被仰付置候儀も御座候處右樣之儀出來仕候段平日等閑ニ相心得居候儀と御察向之上有體奉申上候樣被爲仰聞候

此儀去月十五六日頃　當村稻作仕附最中ニ付私共始一同田場江日々罷出居夫々世話仕御要害之內見渡り候處も御座候得共怪敷儀見受候者猶更一同何之心附候儀も無御座候處御關所樣ゟ山越之者御座候ニ付罷出候樣御沙汰ニ付私共一同相驚キ早速小前共相集メ追々相詰御番士樣江相伺夫々御差圖ヲ受姥子邊ヲ始メ其外御要害之山々無殘所相尋候得共一向相知レ不申彼是心配仕候內同月十八日沼津宿手前ニ而修驗之者四人女兩人被爲召捕候趣ニ而彼等申口ニ者御關所七八町手前ニ而澤水ニ添參り候由右ニ付同所見分仕候得者往還道字大窪與申澤有之右ゟ少々左ニ入木の葉ヲ相敷相休候樣子も相見江金澤水通り大ケ嶽ニ相懸り姥子に罷出候儀ニも可有御座候哉ニ付尚御沙汰ニ寄夫々御〆り薄キ場所等御〆り筋被仰付尚小前一同十五日之儀篤と相尋候之處何も怪敷儀見聞及候者も無御座乍去外守村と違私共村方ハ別而嚴敷被仰付置候儀も御座候處右樣不容易儀出來候上者全ク平日申談薄ク守方不行屆候段御祭向之上者不調法至極奉恐入候

右御吟味ニ付少茂相違不申上候以上

天保十一庚子年六月十四日

仙石原村

役人

御目付所樣

右之通之口書御掛り樣江茂奉差上候

天保十一庚子年六月

仙石原村
與頭　嘉兵衞

同　田左衞門

同　丈右衞門

同　次郎左衞門

百姓代　清八

小川　共藏樣

男澤茂太夫樣

小立　順助樣

明治二年

（仙石原村役場藏）

沼津滯留之脫走人五月十九日同所香貫村出立追々致東下候ニ付小田原御軍監江爲御伺罷越候趣松下嘉兵衞樣御家來御關所通行ニ付直樣當所役人呼出し右樣子柄承り次第早々註進致候趣申付置候處今晩山中村止宿昨廿日早朝當所江罷越候趣申出候間御關所書類並御道具等取片付申候翌廿日朝五ツ半時頃脫走人爲宿割兩人罷越追々操詰候趣申出候右脫走宿陣ゟ宿役人ヲ以御關所詰之內壹人罷越吳候樣申越候ニ付定御番人召連宿陣江罷越候處御關所何歟不穩樣子御尋候間可然及挨拶引取候樣無間も戰爭ニ可相成趣ニ付在番之者如何可致哉之段御關所に被相越候早川矢柄殿江相伺候處直樣畑宿江下リ同所江假役所取建候樣御沙汰ニ付一同罷越勤番仕候其後廿五日伺之儀御座候ニ付近藤左郭之候者又々御關所江罷越相勤候樣被申付候ニ付一同御關所江罷越勤番仕候其後廿五日伺之儀御座候ニ付近藤左郭小田原へ罷下リ候處途中不穩樣子ニ付御足輕使差立候處夜ニ入引取申聞候者關西ゟ引取ニ相成候御人數里見德次郎殿初臺ノ茶屋ニ而被差留候趣申出候翌廿六日四ツ時頃定御番人召連林昌之助殿宿陣被罷越主意柄及欠合候處委細之儀者惣方申談事之上可及挨拶趣其節宿陣殊之外動搖致居候間立歸リ詰合酒井伴六江種々談決之上私儀者參謀方御印紙並諸印鑑帳等持參致シ字吉原窪ゟ乘船姥子ニ立寄仙石原村通リ四ツ尾越へ久野村通リ　御城江罷出列座へ委細之儀申達御印紙並印鑑等相納申候廿七日夜五ツ時頃御呼出ニ付罷在候處又々御關所へ罷登リ相勤候樣被仰付候ニ付參謀方御印紙持參致シ直樣勤番仕候處同所へ殘置候荷物等江何れも因州預りと申附札有之候ニ付當所詰因州宿陣江罷越隊長に面會之上段々及欠合候處御關所之儀者相渡候譯ニ者一切不相成直樣小田原表江引取候樣申聞候ニ付委細致承知候且參謀方御印紙等取斗方伺候處小田原參謀方江相納候樣是又申聞候ニ付則致持參引取申候右御印紙列座江相納申候此段御達申上候以上

（塚本時保氏藏）

驛鈴餘音

片岡永左衛門著

驛鈴餘音の刊行に就いて

遠方の親類より近くの他人と云ふことがある。郷土史の研究なども之かと思ふ。如何なる歴史の大家でも、各地の歴史地理等を隅から隅まで知悉するは不可能である。それは其の地方の人士が、氣長に研究して史料を提供するより外に良策は無からう。しかし之が又容易でない。立派な史料と心附かず、只昔の儘に玉石混交に所藏し、こんな物が何になりますか位に考ふるもあれば、又探し出すのを億劫に思ふもある。無駄足も度々し丹精して取出すので自然に年月も要る。

そこで長年に蒐集したるを郷土史の參考にもと、先年「足柄史料」を出版し、尚爾來見聞に隨ひて探索に努めたるに、或る日友人加藤君が來られ、大分に又集りましたねと机上の原稿を見、「足柄史料」の姉妹編となすことを慫慂せられ、僅諺の寸善尺魔の言葉の如く、足柄下郡史も何の彼のと運延し、彌々出版の間際に震災で燒亡した例に鑑み、また折角の苦心も水泡に歸し、文書、記錄の散逸する處もある。完成しての出版は兎も角、假に謄寫版刷にしてはとのこと、其の厚意も玩味すれば深長の意味もある。殊に古稀を過ぐる自分としては、これを痛感して其の意に從ひたるに、頃年史料の研究保存に力められるゝ石野瑛君が、之を其の武相叢書に收載せんと勸められたので、原稿を差し上げた次第である。

本書の目的は民政史料の滅失を憂慮したるものにて、娯樂的の讀物にあらざれば乾燥無味なるは已むを得ぬ。自分は因より歴史家でも何でも無く、唯々歴史家の幾分の參考にもなれば滿足の至りである。

驛鈴餘音の原稿を終りて

かきつゝる世々の姿をいついかに誰かたとるらん古き栞と

昭和七年四月

著者　片岡永左衛門

驛鈴餘音

足柄郡の東海道

片岡永左衛門

相模國の足柄下郡は、南北に狹く東西に長く、其の間に德川時代の宿驛は、二ヶ宿有る。宿驛は里程の關係より、目から泊宿と晝休の宿に別れ、普通旅行の大名旅人等は、江戸を出立した日は川崎か神奈川泊り。翌日が戸塚か程ヶ谷中食の藤澤泊り。三日目が大磯又は平塚中食の小田原泊り。其の翌日は箱根中食の三島泊の順序で、宿と宿の中間には、小休所がある。平塚、大磯で中食するとせば、梅澤で小休となる。梅澤は山西村の內にて、門を構へ上段の間も有り、大名等の小休もある。松屋と云ふが有る。其の外には鷹屋、釜成屋など、數軒の茶屋もあり、鮫鰊汁が名物であつた。小田原藩にては、藩士の市中に出て、飲食するを禁止したるに、此處は幕府の旗本、神谷氏の知行所なれば、遠乘に託して乘馬し來ては遠慮もなく飲食もした。其の相手には、小奇麗なる女をも置き、他所の休茶屋とは、少し行き方が違つて居た。此處には以前から、張子の達磨を製造したが、今もまだ壹軒ある。

車坂を西に下ると、七間の土橋を架した押切橋があつた。此邊が足柄下郡の東端でもあり、小田原藩主大久保氏領地境の羽根尾村となる。新編相模風土記稿には

羽根尾村

人家三拾四軒

元治の宿村繪圖には

羽根尾村

山西村迄九町五十八間　海岸迄壹町拾間

家數三拾三軒

細き塔臺川を渡り、少しの人家と並木を過ぐれば前川村の字町屋、また貳町斗りの並木を出離るゝと、前川の本村となり、北手には大山道がある。今は並木の內側も人家となる。新編相模風土記稿には

前川村

江戸より十八里半　東西拾四町南北四町

人家百六拾三軒

長樂寺　常念寺

村の人家が盡きると、國府津との村境にて、松並木の兩側なる道路を、唐澤迄下り、橋を渡りて少し登ると、國府津の人家となる。唐澤は道路の險しかりし爲に徒歩を以てした。古戰場でもある。新編相模風土記稿には

國府津村

江戸より拾八里貳拾六町　東西拾二町貳拾間南北拾三町四拾間

家數貳百五軒

眞樂寺　寶金剛院　安樂寺　蓮臺寺　光明寺　法秀寺

元治の宿村繪圖には

國府津村

前川村迄拾參町拾七間　海岸迄壹町四拾間

人家貳百拾四軒

眞樂寺　蓮臺寺　寶金剛院

垂らたら道の兩側にある人家を過ぎ、富士見川に架したる親木橋を渡れば、松並木となり、其の中程が小八幡との境となり、今は人家となりし家の前にも、幾本か殘りたる老松も、昔の儘なる並木なり。

一里塚は、小八幡の貳百五拾七番地なる本多誠一郎と、其の北向ひ百六十一番地平野音次郎の宅地が遺蹟にて、明治十八年の八月に、神奈川縣の編纂したる村誌には、「一里塚東部東海道ノ左右ニ相對セリ、高二間、敷六間、塚上ニ松樹アリ。西ハ小田原驛東ノ入口、東ハ淘綾郡山西村。小名梅澤ノ一里塚に續ク」とある。新編相模風土記稿には

小八幡村

江戸より十九里　東西拾町十六間南北六町五十間
家數九拾六軒
三寶寺
元治の宿村繪圖には
小八幡村
國府津村迄拾壹町十八間　海岸迄壹町八間
人家百貳軒
三寶寺
人家を離るれば兩側は松の並木となる。並木そとの田畑は殆ど家續きとなり、所々にある六尺以上の老松に、其の俤を殘すのみ、酒匂村に入りて、また並木續きなるも、並木の海寄は國府津まで鐵道の開通と共に、別莊地となり年と共に家屋も增加したるに、熱海線の開通の爲に、電車は小田原以東を廢線したれば、俄かに交通不便となり、隨つて衰退の色を現せり。村の人家を西に出離るゝ處の法船寺に接したる道路には、藩政時代に高札場を置かれ、左の川越の高札を掛けられた。

御條目

一川越之者入時者　問屋ゟ番之ものを　川端に付置改むべき事
一洪水の節　水のふかさにしたがひ　其時々問屋方ゟ川越錢を定むべし　猥りにいひかけ多く取べからざる事

一當町之外　他所ゟ出る川越之もの　問屋定ゟ外　多く取べからざる事
右之條々可相守　若於相背者　可被罪科者也
正德元年五月五日

奉行

川役所は高札場の海側に置き、川役人の詰合つた川越賃並に川越人足等の事務を取扱ひたり。川越の人足は東岸は酒匂村より、西岸は山王原網一色の兩村より出し、此の三ケ村は助鄕を免せられた。貞享三年に國替となり前領主稻葉家より大久保家の引渡記錄に

酒匂川原幅之事

一酒匂川幅五町貳拾間余　川幅水之淺深時々寄　廣深有り同所仮土橋之事

同所仮土橋之事

一酒匂川仮橋　毎年十月初より掛渡　翌年頃差置候人足之義ハ　西郡村々ゟ出させ　扶持方遣召仕候　奉行廻り之もの申付候　橋之間數年々增減有之候

同所川越之事

一酒匂川川越賃之事

乳通水川越錢一人四十八文河はら下横帶迄川越一人錢三十五文
股切地水川越一人錢十文

一上使衆公衆　御門跡方　所々御番衆　その外御朱印ニ而御通衆者　川越賃取らせ不申候

一川越役仕候　山王原網一色酒匂村　右三ケ村川越相勤候ニ付　馬役引遣候

明治十八年八月に調査したる網一色の村鑑には

酒匂川仮橋　丗十一度字川尻、字堤ノ内ノ間ニアリ。酒匂川ニ架シテ、東海道ニ屬ス。在昔ハ渡船場ナリシガ、寛永四年十一月廿三日、富士山燒砕シテ砂礫水路ヲ障塞スルニ因リ、渡船ヲ止メテ歩行渉リトセシニ、漸次川瀬定リシ際、維新ニ會シ始メテ仮梁ヲ渡ス。舊來ノ渡船場ハ、西ノ方本村字埋橋ヨリ、東ハ酒匂川、連歌橋マデ、五町貳拾間ト定メ、本村及ビ山王原酒匂三村ノ進退タリ。後川敷地ヲ兩側ヨリ漸々田畑ニ開キシヲモテ、方今ハ西本村ノ堤ヨリ、東酒匂村堤マデ、三町十六間トナレリ、此間ニ參瀬アリ、三仮橋ヲ設ク。東端ノ川幅十五間余。橋長十七間、水深一尺、中ノ水路七間、橋長九間半、水深八寸、西端ノ水路七十間。水深一尺ヨリ六寸、橋長七十三間、幅各貳間半。板橋ニテ營繕ハ三ケ村ノ民費ナリ。故ニ行客ヨリ一名金五厘ノ、橋料ヲ收ムル。明治十五年二月、更ニ一橋長百九拾八間、幅三間ノ木製ヲ架シ酒匂橋ト稱ス。故ニ行客一名ヨリ橋料八厘ヲ收ム

新編相模風土記稿には

酒匂村

江戸より拾九里拾町　東西拾町南北拾町

人家百十八軒

南藏院　大見寺　大經寺　長樂寺　上輩寺　中輩寺　妙善寺　本典寺　法善寺　法船寺　法久寺　妙蓮寺

元治の宿村繪圖には

酒匂村

小八幡迄拾壹町四拾一間　海岸迄三町

家數百拾壹軒

長樂寺　上輩寺　大見寺　中輩寺　法善寺　法船寺以上山側

南藏院　妙蓮寺　本典寺以上海側

酒匂村に於ては、他村に比して寺院多く、民家の殆ど一割にも及びしは、他村の最も困難したる助郷を免せられ、却つて川越人足の稼ぎありしも、原因の一つなりしならん。連歌橋を過ぎ、酒匂川を西に渡れば、網一色村にて、松並木は川土手に接し、御靈八幡社前より海手に向つて曲れるが、此の松原は民政上には最も由緒深い。即ち文政年中に京都所司代より、幕府の老中となり、濟世安民の志厚く、報德の道を尊信し二宮金次郎尊德先生を、民間に拔擢せし等、其の他治績少なからざるを以て、大正天皇より從三位の御贈位在せられたる小田原の城主大久保加賀守忠眞が文政元年十一月十五日小田原城より江戸に參府するの發駕に際し、領分宿郷の奇特人、耕作出精人、孝人を呼出し、目見へのありし處なり。當時に在りては領主に御目見へは無上の光榮であつた。これ尊德先生を拔擢せられしより三年以前なり。左に掲げたる文書は、忠眞の自詠と、目見へに呼出したる人名書にて、懷中物に入れ置かれ、常に所持せられたるも、其の如何なるものなるかは、近習の士も嘗て知らざりしが、逝去後に初めて見出したるものにて、志を民政に用ひられしことの尋常に非ざりしを知らる。

懐中物入品々（袋の上書）

壬申のとし五月二十四日よめる

位山のぼりて見ればいや高し　たゞわすれめやもとの麓を　忠眞

文政元年戊寅十一月十五日

町郷奇特人、孝人、小田原發駕之節、先々へ出し御詞遣ものの名前

町　方

御目通り江罷出候　町々役人共

町年寄　清　助　新宿町名主　佐五兵衛　青物町名主　太　七　万　町組頭　藤兵衛

大工町組頭　勘右衛門　宮前町組頭　市兵衛

右之通御座候以上

十一月

町奉行

御目通リエ罷出候　孝人共

エ　山角町　源左衛門　筋違橋町　小兵衛　山角町　久左衛門　欄干橋町　忠七

古新宿町　藤兵衛　古新宿町　徳兵衛　中宿町　忠兵衛　萬町　善助

本町　民藏　古新宿町徳兵衛弟龜次郎　山角町久右衛門女房ぬい　代官町　藤八　女房まつ

代官町　庄助　女房いと　茶畑町　治郎兵衛母よし

右之通御座候以上

十一月

町奉行

先年御賞美御座候　奇特人共

耕作出精奇特人

栢山村地方名主　藤藏　下和田村百姓　清右衛門　米左エ門　袋怖村百姓　清右衛門

羽根澤村百姓　太七　川西村地方名主　善藏　伊兵衛　堀之内村百姓　善藏

下堀村百姓　市郎兵衛　湯本茶屋百姓　儀兵衛　八十吉　湯本村百姓　儀兵衛

田嶋村百姓　市右エ門　増田村百姓　新五郎　治右衛門　中里村百姓　新五郎

鴨宮村百姓　八右衛門　矢作村百姓　宇兵衛　佐吉　田嶋村百姓　宇兵衛

羽根澤村百姓　平兵衛　田嶋村百姓　與五衛門　庄右衛門　下新田村百姓　與五衛門

曾我別所百姓　彌左衛門　栢山村百姓　辨左エ門　金次郎　栢山村百姓　辨左エ門

塚原村百姓　繁藏　上久野村百姓　忠左エ門　川匂村百姓　門右エ門

板橋村百姓　伊右エ門　平松新田百姓　清左エ門　下和田村百姓　七郎左エ門

二子村百姓　治郎左エ門　山王原村百姓　郡兵衛　酒匂村百姓　万四郎

小八幡村百姓　太兵衛　芝怒田村百姓要右衛門　普代庄七

右之通り御座候以上

寅十一月

郷方村役人調書

相州中筋松田惣領　名主　三郎左衛門　相州東筋上大井村　名主　太郎兵衛
相州土肥筋吉濱村　名主　五右衛門　相州御厨くみ澤村　名主　孫右衛門
駿州富士郡松岡村　百姓　太郎兵衛　相州中筋松田惣領　名主　平治左衛門
駿州御厨二子村　名主　五兵衛　豆州君澤郡長伏村　名主　猪左ェ門
相州中筋川村岸　名主　惣七　駿州富士郡松岡村　百姓　惣左ェ門
相州東筋永塚村　名主　仙次郎　相州中筋□山村　名主　七左衛門
相州中筋松田庶子　名主　彌平次　相州中筋怒田村　名主　才治
相州登筋板橋村　名主　嘉七　相州土肥筋宮上村　又左ェ門
駿州御厨平松新田　百姓　幸藏

右名前之者共御目通江差出申候以上

寅十一月　　郡奉行

町方並關内村々　小前之内心かけ宜處者　左之通　　萬町　善助
兩親共盲目　取扱方宜　　栢山村　金次郎
耕作出精　外見も可相成儀之者

孝人先年村方より申出よし
親を大切にいたし候もの　奇特人とも申
母を大切にいたす　母家出後行方相尋しより　爲に感じ村内にても尋て遣よし
耕作出精先度賞美有し者　酒匂鍛治村　庄兵衛
耕作勝て出精心掛も宜し　栢山村　藤藏
同斷至て出精　川村岸　忠左ェ門
同斷年來至て出精功者之由　年貢懐拵も宜よし　外見競にも相成由　金井嶋村　清吉
同斷至て出精　同村　水右ェ門
同伴も隨分宜よし　鴨宮村　與五右ェ門
母並妹なぞ至て宜敷取扱心を盡すよし　與五右ェ門伴　茂兵衛
出精よし　赤田村　伴藏
郷方孝人共　成田村　六郎右ェ門
先年賞美御座候　孝人共
池上村百姓　藤助　上曾我村百姓　根府川村　彌左ェ門　酒匂鍛治村　平兵衛

和左ェ門　畑宿百姓　兵藏

根府川村百姓　彌右ェ門　加田村名主　村山勘交　箱根宿年寄　仁左ェ門
川村岸百姓久次郎娘はる
　此度取調候孝人共
德倉村百姓德左ェ門倅龍藏　田原村百姓　吉兵衛　佐野村半七後家娘弐人
湯觸村百姓　皆藏　酒匂村百姓清左ェ門倅清藏　酒匂村百姓　佐五左ェ門
國府津村百姓　半三郎　國府津村百姓　五兵衛
右之通り御座候以上
　寅十一月
　　郡奉行
兼而被仰出マシタ村役人共出マシテ居リマス　並土手内中筋兩山東筋御傳馬替地村々役人共
兼而被仰出マシタ村々孝人　奇特人之者共　出マシテ居リマス
書中の柏山村金次郎とあるは、二宮尊德先生なり。此の次に添へ在りし見取圖は略したるが、圖に因ると、孝人、奇特人が前列にて、中筋、土手内、兩山家、東筋、山附、府中通、御傳馬替地と村々が組合別となり、其の村役人が後列となれり。さて此の松並木を過ぐると石造の千貫橋、工費に千貫を要したるより命名したとの傳說がある。並木の突當りに酒匂と同樣に川役所が在り、其の西の筋向に在るは、新田社にて祭神義貞の首塚は、別に人家の海手にある。東海道は川役所前を、西に曲りて網一色の人家となる。酒匂橋は大正の震災以前に、コンクリートにて新橋を架したるが、其の橋場は、木造なりし古橋より、三拾間程も下流となりし爲に、八幡社と千貫橋間の松並木を筋違ひに突切り、網一色の殆ど人家の東端に、一直線に國道を改築したり。新編相模風土記稿には

　網一色村
江戸より十九里貳拾九町　東西八町南北六町
家數五拾三軒
呑海寺　常鉦寺

元治の宿村繪圖には

　網一色村
酒匂村迄九町五拾五間半
人家五拾五軒
呑海寺　常鉦寺

網一色村と山王原村は、人家續きにて、新編相模風土記稿には

　山王原村
江戸より十九里三拾貳町　東西六町拾九間南北七町
家數百壹戸
宗福寺　心光寺　道場院　弘經寺　光明寺　昌福院　定光寺

元治の宿村繪圖には

山王原村

網一色村迄六町三拾貳間　海岸迄壹町五拾五軒

人家九拾四軒

弘經寺　心光寺　昌福院　道場院　宗福寺

此の山王原の中程の海側に、圖場が在りしが、圖場とは農家を借り受けて控所とし、小田原の旅籠屋は、斯の處迄客引に出で、定宿のなき旅人は、圖引にして當った者が旅籠料なども相對に相談して、宿泊をなさしめたが、堀秀成著の、いそ山千鳥に、よく其の樣が書き載せてある。

案内しらぬ旅人は、思の外よからぬ宿に引るゝもあり、また道のほとにて、其の宿には某屋が、よきなどきゝてこしまゝに、そを定宿也などいへば、かの宿引の、しかのたまふ茶屋は、あやにくにこよひ、さし合はへる。あるは御用宿にてはへる、などいひあさむき、かれらつねにたび行く人を、よく見馴れて、旅馴れたるも、馴れざるもすべてよく見知りて、ものする事なり。

人家を西に離れて長さ九間の芦子川に架したる山王橋を渡ると、山手は山王社宗福寺に續き一里塚あり。一里塚は總て、道の左右側に在る例なるに、此處は早くより海側は廢絶したり。新編相模風土記稿には

一里塚

江戸口ノ外側ニアリ。高六尺五寸幅五尺許、塚上榎木アリシガ、中古枯レ今ハ松ノ小樹ヲ植ユ。古ハ雙塚ナリシニ、今隻塚トナレリ。蓋海道ノ革マリシ頃、一塚ハ海中ニ入シナラン。此ヨリ東ハ小八幡村、西ハ風祭村ノ里ニ續ケリ。

一里塚に續きて溜池ありて、前は松の並木なり。海手は山王橋より、直きに並木續きとなり、並木の裏方なる海手は、山手と同じく溜池なり。兩方の溜池の西の方に、道路を狹んで裾に石垣を廻らし、築出したる高土手在り。是れは小田原の江戸口見付にて、山手の土手を後にして、藏番所を置き、海手の土手前は關札の建場所にて、小田原宿に宿泊する大名は、其の止宿を標示する爲に、此處に何の何守泊と書したる木札を宿泊中建置し處にて、此の高土手にも樹木の蒼々として、自から威嚴を旅人に感ぜしめたり。

山王原よりの街道は兩側より築き出したる土手を入ると、突當りも同じく、裾に石を廻らしたる高土手にて、道路は山手に曲り、正面は見付番所にて、常に小田原藩より番士が詰合ひ、城主の定紋を、黑く染抜たる麻幕を張り、捕道具鑓など幾本も立並べ、積手桶を飾り、如何にも嚴重に構へたり。番所の前を過ぐれば小田原の新宿町にて、兩側なる足輕長屋の數棟を過ぎ、棒はな茶屋が幾軒もある。是れより町家は軒を列ねたるが、道路の突當りにも、裾に石垣を廻らしたる喰違の土手がある。是れを入れば小田原城の大手門口に直通なるも、東海道は土手を入らず。海に向つて左に曲り突當つて又西にと曲れば、數町にして人馬の繼立を取扱ふ問屋場在り。小田原宿は宿内に、問屋場を貳ヶ所となし、毎月十五日つゝ、替り番に事務を取扱ひたるは、問屋場は人の出入り最も多く其の附近は常に繁昌もしたればかくなせしなり。磯山千鳥には、問屋場の記事も有る。其一節に

その構の庭は道幅よりひろく、馬のはこわらくつなど、いとむつかしく見ゆ。さてこゝに、問屋年奇などいふ

驛吏、さては帳附。馬差などいふ男子とも集へり。常は帳付といふものに、ゆたねおくめるも、勢ひある吏などの、通るときはかの驛吏とも、皆いでゝとかく、ものすることなり。驛吏はその驛の、由緒ある家など、いふめるが、つかさどることなり。帳付といふは、さるわざにかなへるものゝ、書なといささかはしりがきし、かの算道のうへなども、おぼつかなかぬが、給金といふものとりてものすることなり。この帳付は、小宿となふる、家の主など、なるがおほしとぞ、さがなごとといはゞ、馬をも人をも、筆の頭もて呑とかいふらむ。わさなどはいみしう、さかしきかたなれども、おほくの人にものし馴れて、いはゆるすれからしたりとかいふたぐひなるがおほかりとぞ。雲助といふものをば、さらにもいはず。郷ともよりいづる助郷の、丁ともをも、おのが召仕ふ下部を、ものするにひとしく、國々の諸侯の家人、またおほかたの吏ともの、馬人繼ぐとてこゝに來るを、なめしげにまたせおきて、ものとは思はぬおももちなる。すべていとけにくき、かたなり。さはいふものゝ、さばかりならでは、いともそこばくなる、馬人のとりまかなひは、えしもなしあへぬわざなめり。宿内も此の邊より、旅籠屋の多くなり其の間には、種々の商家または、數軒の娼家もある。旅籠屋の構造は、何れも大同少異にして、表間口の眞中に、壹間の出入口を取り、其の右か左に、駕籠、駄荷物、長持、兩掛、合羽籠等を置く大板の間と、家族の居所を取り、平常には大板の間の、街道に向ひたる、表方には丈三尺に巾六尺の障子に、其の家の屋號を筆太に書きたるを横に嵌め、大黒柱にも何屋某と書したる看板を書く。二階の有る家は、左右の雨戸の戸裏に、屋號の看板を掛くるも、三和土にて塗り出したるもある。小田原は藩中は勿論なるも、場末の町家にも草葺の家は無きにはあらざるも、多くは小田原葺と稱し、割竹をとつるにて編付け、其の上に杉の尺貳寸

に、巾は三四寸斗りの薄き折き板を並べ、其の上に又割竹の、押縁を横に押當て、銅の針金にて締め附け、棟は杉皮にて葺ひたれば、出火には殊に飛火を恐れ、酒の四斗樽に、日よけの爲に藁筵を巻き附け、水を常に滿して、家棟に載せ置き、出火の際は逸早く走り登りて、火の粉を消し止むるを、專一となしたり。此の如き構造の家根なれば、暴風雨には被害を受くる事の多かりし、瓦葺に至つては附近に良土の乏しく、良品を製造せざる爲に、土藏の外は殆と無かりしが、又地震にはよろしからざりる故との傳説もありたり。

本陣の家屋も時により多少の廣狭もあり、旅籠屋の軒數も、幾分の相違あり、必ずしも一定ならず。去れども享和三年、道中筋分間改御役人中へ、當宿を差出した明細帳抜書には

一宿内惣家千五百六拾九軒

一本陣　九建坪貳百九拾五坪半余　玄關門構に御座候　宮前町　金左ェ門
一本陣　九建坪貳百八拾九坪　玄關門構ニ御座候　本町　才助
一本陣　九建坪貳百九拾七坪　玄關門構ニ御座候　欄干橋町　彦十郎
一本陣　九建坪貳百貳拾九坪　玄關門構ニ御座候　本町　永左ェ門
一脇本陣　九建坪百六拾五坪　玄關門構ニ御座候　本町　太郎左ェ門
一同斷　九建坪百拾貳坪半　宮前町　喜兵衛
一同斷　九建坪百貳拾坪　玄關門構ニ御座候　中宿町　三四郎
一同斷　九建坪七拾八坪　内玄關ニ御座候　本町　兵助

一旅籠屋七拾三軒　内　大貳拾壹軒　中貳拾軒　小三拾貳軒

とある。宮前町の御濱御門の前には、高札場を置かれて高札を掛けられた。これも道中筋分間改御役人中へ當宿より差出した明細帳抜書には

一宿御高札場　長貳丈五寸　高壹丈三尺三寸三分　横七尺三寸八分　宮前町　地　内

但御普請之儀　前々ゟ城主ニ而被致候

正徳元年御高札

親子御高札　壹　枚

定

一親子兄弟夫婦を始め　親類にしたしく　下人等に至迄　これをあわれむべし　主人ある輩　各其奉公に精を出すべき事

一家業を專にし怠る事なく　万事其分限に　過べからざる事

一いつわりをなし　又は無理をいひ　惣して人の害になるべき事を、すべからざる事

一博奕の類　一切に禁制乃事

一喧嘩口論を津々しみ、若其事ある時は　みだりに出合べからず　手負たる者　かくし置べからざる事

一鐵砲猥に打べからず　若違犯の者あらば申出べし　隠置他所ゟあらゝにおいてはハ其罪重かるべき事

一盗賊悪黨の類あらば申出べし　急度御褒美下さるべき事

一死罪に行るゝ者ある時　馳集るべからざる事

一人賣買堅停止す　但男女の下人　或は永年季は譜代に召置事は召相對に任ずべき事

附譜代の家人又は其所に住來る輩他所へ罷越妻子をも持有付候者呼返すべからず　但罪科ある者は制外の事

右之條々可相守之若於相背者可被行罪科者也

正徳元辛卯年

奉行

毒藥御高札

壹　枚

一毒藥並似せ藥種　賣買の事禁制す　若違犯の者あらハ其罪重かるべし　縱同類といふとも　申出るおいては、其罪をゆるされ　急度御褒美可被下事

一似せ金銀一切停止す　若似せ金銀あらば　金座銀座へつかはし相改べし　も刋しの金銀も　是又金座銀座へ遣し相改べき事

附惣して似せ物すべからざる事

一寛永之新錢　金子壹兩に四〆文　壹歩ニハ壹〆文たるべし　御料私領共ニ手賃收納等にも　御定乃ことくたるべき事

一新錢之事　錢座之外一切　鑄出すべからざる事

一新作の慥ならざる出物　商賣すべからざる事

一諸職人いひ合せ　作料手間賃等　高直ニすべからず　諸商賣物或は一所ニ買置しめうり　或はいひ合せて高直にすべからざる事

一何事によらず誓約をなし　徒黨を結ふべからざる事

右之條々可相守之　若於相背者可被行罪科者也

正徳元年五月

切支丹御高札　壹　枚

定

一切したん宗門者　累年御制禁たり　自然不審成者有らバ　申出べし爲御褒美

はてれんの訴人　銀五百枚　奉　行

いるまんの訴人　銀貳百枚

立かへり者の訴人　銀同斷

同宿並宗門の訴人　銀百枚

右之通下さるべし　縱同宿宗門の内たりといふとも申出る品により、銀五百枚下さるべし隱し置他所よりあらわるゝにおいては其所之名主組頭五人組迄一類ともに可被行罪科者也

正徳元年五月

火付御高札　壹　枚　奉　行

定

一火を付る者をしらハ　早々申出し若隱置においては　其罪重かるべし　縱ひ同類たりといふ共　申出るにおゐては　其罪をゆるされ急度御褒美可被下事

一火を付る者を見付ハ　これを捕へ早々申出べし　見のがしにすべからざる事

一あやしき者あらば　穿鑿をとけて早々御代官地頭へ召連來るべき事

一火事之節　鑓長刀脇差等　拔身にすべからざる事

一火事場其外いづれ乃所に而も　金銀諸色ひろひとらば　御代官地頭へ持參すべし　若隱置他所よりあらはるゝにおいては　其罪重かるべし　仮ひ同類たりといふとも　申出る輩は其罪をゆるされ　御褒美可被下事

右條々可相守之　若於相背ハ　可行罪科者也

正徳元年五月　奉　行

同　御高札　壹　枚

同年御傳馬　御高札　壹　枚

同年人馬賃　御高札　壹　枚

享保六年二月　在々ニ而鐵砲打候者　御留場ニ而鳥を取候者　御制禁之　御高札　壹　枚

明和七年四月　百姓徒黨　御法度之　御高札　壹　枚

寛政十三年十一月人馬賃　貳割增　御高札　壹　枚

とある。前揭の毒藥高札文中の、てんしの金銀は、天和年中の高札文と對照すれば、つぶしの金銀にて、拔書に

際して誤りしものかと思はるゝ。

中宿町の上の問屋場を過ぎ、宿の西端にも足輕長屋が、兩側に多くある。小田原の東西南北なる四方の入口には、多少の相違は有りしと雖も、足輕長屋、又は侍屋敷を置きたるは、何れも同じ形式なり。上方口は長屋を過ぐれば、山手は居神神社に續き、光圓寺前の海手には、上方見附の番所あり、總ての設備等は江戸口見附と大差なし。維新前後の宿の形狀は、明治小田原町誌に（小文字は著者の補訂、句讀點は原稿のまゝ）

今ノ十字町三丁目、昔の山角町光圓寺前ノ海側ニ、瓦葺ノ見附番所ガ在リ、是ヲ上方口御番所ト稱シ、麻幕ヲ張リ渡シ、突棒指又袖搦棒ノ捕道具や、鑓ナドモ建並べ、積手桶ヲ飾リ置キ、小田原藩ノ輕輩二人宛常番ヲナシ、勅使院使宮門跡御三家、或ハ幕府ノ老中ナド、重キ役々ノ通行ニハ、加番ヲ出シ下座ヲナシタリ。光圓寺ノ西隣ニ、板橋ニ向ツテ藏番所モ置キケリ。光圓寺前ノ西側ニハ、高サ凡四五尺ノ切石垣ヲ廻ラシ、其上ハ土ヲ盛リ揚ゲ、芝ニテ覆ヒタル土堤ヲ、道路ノ左右ニ築キ、城下町ト村落ノ境トシ、山側ハ居神社ノ入口ヨリ、玉傳寺ノ入口ヲ左右ニ、四百七拾番地邊迄、海側ハ御番所ノ隣ヨリ、大久寺ノ入口ヲ左右ニ、四百六拾番地邊迄ノ兩側ニ、貳拾貳戸ノ足輕ガ居住シタ。是ハ小田原藩ノ先手ノ銃砲組、是ヨリ引續キ兩側共ニ、町家ノ建テ連リ、此山側ノ組長屋ノ北裏ニ、先手組ノ弓組足輕ガ、貳拾壹戸居住シ、傳肇寺以西ハ住家ナシ。十字町ノ安齋町トノ向合ハ、城内ニ通ズル今ヨリ廣キ道路ニテ、其西側ニ御使者屋ヲ置レタリ。是ハ通行ノ諸大名等ヨリノ使者受モナシ、又ハ領主ヨリ當地ニ休泊ノ、大名等ノ旅宿ニ差遣ス、使者ノ控所ニモ充タル建物ナリ。御使者屋ニ接シタル、東隣ノ極メテ簡素ナリシ。箱根口外之門ヲ入レバ、突當リハ城ノ外濠トナリ、現今ノ道路ハ其ノ濠跡

ニテ、舊道ハ四五間程モ西方ニ寄レリ。城ノ外郭ニ添ヒタル外濠ハ、舊道ノ東方、今ノ道路邊ヨリ起リ、幸町百六拾貳番地ノ邊ニテ北方ニ曲リ、又同町ノ三十七番地邊ニ及ビタリ。十字町ノ欄干橋ヨリ、幸町ノ宮ノ前百七拾番地邊迄ノ、町家ノ地尻ハ直ニ城濠ニ接シタルニ、弘化年度ノ大火ニ逃路ニ窮シ、燒死者ヲ生ジタルヨリ、濠ニ添ヒ新道ヲ開通シ、通行ニ便セシニ、維新後ハ濠ヲ水田トシ、再轉シ埋立テ家屋ヲ建築セリ。宮ノ前百七拾番地ノ地先ノ道路ニハ、石垣ヲ廻ラシ、四坪程ノ高札場ヲ設ケ、高札ヲ掲ゲシヨヽ、維新ノ後ハ掲示場トナシタルガ、明治拾壹年ニ取拂ヒテ道路トナセリ。

高札場ヨリ、濠端ノ新道ノ入口迄ハ、濱手口御門ニ通ズル道路ニテ、濱手口御門ハ、冠木造ノ大門ヲ南向ニ構ヘ、東ハ松原社前ヨリ、青物町ニ通ズル宮小路ニテ、道路ノ南ハ宮ノ前ヨリ高梨町ノ家裏ニ接シ、北側ハ西光院玉瀧坊林泉院林光院ナド四五ノ寺坊在リ。西ハ濠端ノ新道ノ盡ル所、幸町百七拾貳番地ニ鐘堂アリ、晝夜共ニ時ヲ撞キタルモ、後ニハ幸町百貳拾五番地先ノ、大手門多聞櫓臺ノ、現在ノ所ニ移轉シタリ。濱手口御門ヲ北ニ向テ入レバ、右ハ勢溜リノ芝生ニ續キ、松原神社。左ノ方モ濠際迄、芝生ノ勢溜リニテ、此芝生ニ壹本ノ大銀杏アリシガ、現存スル松原社内ノ、大銀杏ト壹對ニテ、北條時代ハ、松原神社ノ境内モ廣ク、本社モ西寄ニ在リ。銀杏ハ華表ノ左右ナリシトノ傳說ナリシニ、明治十年頃、道路ノ改築ニ伐採シタルモ、巨大ナル切口ハ、數年後迄路面ニ顯レタリ。濠ニ添テ北ニ向ヘバ、幸町貳拾六番地ノ南方ナル、御橋臺ヲ渡レバ北向ニ、大手冠木門在リ。門ヲ入レバ桝形ニテ、北向ノ門番所ヲ過グレバ、東向ニ多聞櫓ノ、構造嚴敷キハ、當城ノ大手御門ナリ。藩主ノ在外ニハ門扉ヲ鎖シ、門脇ノ潛リ戸ヨリ士民共ニ出入セリ。橋臺ヲ戻リ、猶濠ニ添テ北ニ進メバ、道路

ハ綠町三拾七番地邊ヨリ、西ニ曲レバ幸田御門ニ到達ス。門前ナル橋臺ノ東側、幸町四拾壹番地迄ハ、箱根口外郭下ノ、城濠續ニテ常ニ滿々ト水ヲ湛ヘ、郭上ニハ老松枝ヲ交ヘテ蔭ヲ落シ、時ニ來リテ水禽ハ人ヲ恐レズ浮遊シタリ。橋臺ノ西側ハ空濠トナリ、辨財天ノ高臺ノ、北脚ヲ迂廻シ、谷津口ノ木戸際ヲ經テ、御用米曲輪ヲ廻リ來リシ空濠ニ合シタリ。

箱根口外之門ヲ入リ、突當リノ城濠ニ添ヒ、西ニ曲リ北ニ橋臺ヲ渡リ東ニ向ヘバ、西向ニ箱根口冠木門在リ。門ヲ入バ桝形ニテ、南面ニ構ヘタル多聞櫓ハ、犇々ト鐵金物ニテ打固メタル箱根口御門。今ノ山縣有朋ノ篆額、日部鳴鶴撰文ノ戰勝紀念碑ノ在ル處ナリ。門ヲ出レバ西向ニ、門番所在リ。番所ノ西向ヒハ廣キ勢溜リニテ、少數ノ練兵モナシ。明治トナリテ後ニハ、小學校ノ敷地トナセリ。夫ヨリ以西ハ、小峯ノ武家屋敷ナリ。東ハ文武ヲ教授シタル、藩學ノ集成館ニテ、後ニハ小田原ノミナラズ近傍最初ノ小學校トナリ、燒失シテ廢校ナセシモ、今又小學校ヲ再築ス。是ヨリ北ニ折曲レバ、廣小路ニテ、道路ノ西側ハ城ノ二ノ丸、東側ハ總テ侍屋敷ナリ。箱根口御門ノ、北ノ正面ハ、城ノ二ノ丸ヲ廻レル城濠ニテ、濠ニ架シタル小峯橋ヲ渡レバ、二ノ丸ノ南御門。門ノ東、即チ右方モ、切石垣ナリシガ、維新後ニ曲角マデ、三拾間程モ取崩シ、其石材ハ陸軍省ニテ、東京ニ海送シ、跡地ハ芝土手トシ、松樹ヲモ植附ケ、是ニ續キシ石垣ノ東端ナル處、幸町百參拾八番地ノ、小出原第二小學校ノ北西ニ當ル角ニハ、二層ノ隅櫓アリ。此石垣ノ北端ハ、御馬出御門ニテ、後ニ御用邸ノ正門ヲ置レシ處ナリ。御馬出御門ニ入ル、御橋臺ヲ堺トシテ北側ハ、城濠ノ西ニ折レ曲リ、其石垣ガ屈曲シテ、北ニ曲リ、又東ニ曲出テ、再度北ニ曲ル。其ノ曲リ角ノ城壁ノ上ニ在ルハ、現在唯一ノ平櫓ナリ。猶北ニ進ミ堀

ニ添テ左ニ曲レバ、御裏御門ニテ、堀ノ盡ル處ハ、幸町五拾八番地ナリ。南曲輪ノ二層櫓ヨリ、御裏御門迄ノ城壁ニハ、白堊ノ土塀ヲ廻ラシ、甚ダ優美ナリシ。

御裏御門前ノ、綠町七百參拾五拾地ヨリ、七百貳拾五番地邊迄ハ蓮池ニテ、七百三十七番地ノ邊ハ中島トナリ辨財天ノ小社ヲ安置ス。是ヲ蓮池辨財天ト稱シ、北條氏ノ江ノ嶋辨財天ヲ勸請セシヨリ、代々ノ領主ノ尊崇セシガ、維新ニ廢社シ、附近ノ池ハ埋立シモ、社殿ハ其儘腐朽ニ任セ、大正ノ今日モ、大破ナガラニ現存ス。道ヲ隔テ北方一帶ハ侍屋敷ニシテ、北條時代ニハ北條氏忠ノ邸宅ナリント傳說ス。此邊ノ地字ハ、辨財天ニテ、其先ハ八幡山ナリ。八幡社ハ今ノ中學校ノ東方ノ、山中ニ在リシニ、是モ維新ノ際ニ廢社シタリ。池畔ノ道路（其向側ニ在リテ岡崎三郎信康ヲ祀リタル彩宮社モ亦同時ニ廢止シ）ヲ西ニ突當リタル八幡山ノ東麓ハ、藩主ノ家老吉野邸ニテ、有名ナル櫻ノ巨木アリシガ、惜クモ貳拾年モ前ニ枯死シタリ。此里道モ鐵道布設ニ、今ハ壹町程東方ニ迂廻シ、陸橋ヲ架シタルガ、其工事ニ際シ、舊路ノ少シ南方ヨリ、建武年間ノ親ノ一周忌ニ供養ノ石碑ヲ發掘セシモ、此邊ニ寺院ノアリシハ傳說ナシ。或ハ路傍又ハ路添ノ、宅地內等ニ建立セシモノカ。吉野邸ヨリ揚土ニ出ル間ハ小坂ニテ、綠町七百十四番邊ハ、谷津口ト稱シ、木戸口ニ接シテ番所在リシモ、常ニハ藩士モ在番セザリシ。此所ハ北條時代ノ、谷津口門ニハ非ズ。天正時代ノ谷津口門ハ、余程ノ北方ニテ、谷津村ト狹窪村ノ境界ナリ。城ノ外部ハ概述シタルモ內部ハ南御門ヲ入レバ桝形トナリ、桝形ノ左　即チ東方ノ、中仕切門ヲ入レバ、御茶壺曲輪ニテ茶壺ノ宿泊スル小屋ヲ置レタルヨリ、名稱ト成リシナルベク、元祿圖ニハ御馬出曲輪トアル。此曲輪ノ東ノ出口ニ在ハ住吉門、門ヲ出レバ道ハ兩分シ、北ハ住吉橋、東ハ御馬出曲輪ナルガ、此曲輪モ元祿圖ニハ、御馬出曲輪トアル。北方ノ御馬出御

門内冠木御門ト稱スル名稱長キ門ヲ出レバ桝形トナリ、桝形ノ東ハ透シ造リノ御馬出御門ニテ、門ヲ出テ御橋臺ヲ渡レバ廣小路ナリ。

岐路ヲ北ニ住吉橋ヲ渡レバ、銅冠木御門、門ノ東ハ二ノ丸濠ニ添タル高キ切石垣ナリ。西方モ同ジキ石垣ニテ、門ヲ入レバ桝形ヲナシ、突當リノ常番所ヲ右手ニ取リ、銅金物ノ嚴重ナル、銅御門在リ。門ヲ入リ即チ北方ハ、御屋形ト尊稱セシ領主ノ居館ニテ、左方ノ石垣ニ添テ、西ニ進メバ南曲輪ナルガ、元祿圖ニハ鷹部屋曲輪トアルハ、昔時鷹部屋ニテモ置キシナルベシ。此曲輪ノ南方ノ城濠ニ面シテ、二層櫓ヲ東西ノ兩端ニ設ケ、白堊ノ土塀ニテ、其間ハ連絡シタリ。此曲輪ヲ西ニ過ギ、本丸ノ南方ノ直下ハ、雷曲輪又ハ小峯曲輪ト稱シ、今ハ報德二宮神社ノ所在地ナリ。同社ハ最初、二ノ丸ノ南曲輪ニ創建セシニ、御用邸ノ御建築ノ爲ニ、此處ニ移シ境內ヨリ里道迄ハ、城濠ヲ埋立テ社道トナセシナリ。大久保神社モ天守跡ニ建設セシガ、小峯續キノ御料地ヲ下ゲ渡サレ、報德二宮神社ト同時ニ移轉シタリ。小峯ハ名稱ノ如ク、丘陵ナリシヲ、小田原城ノ修築ニ、土石ヲ掘取リ、其跡ハ畑地トナセシガ、西洋流ノ練兵ニ必用ヨリ、民地ヲ引揚テ練兵場トナシタルニ依リ、維新後ハ陸軍省ノ所轄トナリシヲ、次デ大久保家ニ拂下シヲ、小田原町ニ讓リ受ケ、遂ニ公園トナセリ。中學校ハ、舊藩ノ米倉跡ニ創設ナセシニ、鐵道布設ノ爲メ、停車場ノ敷地トナリ、御料地ノ一部ヲ拂下テ、今ノ地ニ移シタルガ、昔時ハ此邊ハ廣クノ地字ヲ小峯ト稱シタルハ、古圖ニ因リ明カナリ。

銅御門ノ西ノ突當リハ、本丸ノ城濠ニテ、濠端ノ巨槇老杉等ノ覆ヒ重ナリシ、木ノ下道ヲ登レバ、本丸濠ニ架シタル、欄干ニ擬寶珠ヲ飾リタル朱塗ノ常盤木橋ノ際ニハ、千古ノ翠色漂ヘル、當地第一ノ老松アリ。橋ヲ渡リ

常盤木坂ヲ登リ、坂ノ御門ヲ入リ、桝形ノ北方ニ在ルハ、最後ノ城門、常盤木御門ナリ。門ヲ入レバ本丸ニテ、二重ノ石垣臺ニハ、白堊ニ眩ユキ三層樓ノ天守閣ハ、蒼空ニ聳ヘタリ。東西七十二間南北六十六間ノ周圍ニハ切石垣ヲ高ク廻ラシテ、古松點綴シ、北ニハ鐵金物ヲ、直タト繁打シタル、鐵御門在リ。門ヲ出レバ兩側ハ高ク石垣ヲ積ミ重ネ、殊更ニ屈曲セシメタル坂路トナリ、數棟ノ米倉在リシ。御用米曲輪ヲ左手ニナシ、本丸堀ニ架シタル、相生橋又ノ名羊橋ヲ過ギ、二ノ丸ニ入リ、北ニ裏御門ヲ出レバ、裏御門橋。此橋ノ東ハ二ノ丸ノ濠續キニテ、橋ノ西ハ巾數間ノ隍トナリ、御用米曲輪ト其北方ニ在ル、辨財天曲輪トノ中間ヲ廻リ、谷津口際ヲ迂廻シ來ル隍ニ合シテ、本丸ト雷曲輪ノ間ヲ經テ、南曲輪下ノ南方ナル二ノ丸濠ニ達シタリ。是ニテ水濠ト隍ニテ、本丸ト二ノ丸ヲ周廻シ、雷曲輪ノ南ニハ、又連絡ノ隍ヲ鑿掘シタリ。橋ヲ渡レバ西ハ、御用米曲輪ノ空濠ト、蓮池ノ中間ナル、辨財天曲輪ナリ。此曲輪ヨリ西ニ、蓮池尻ノ續キ、綠町七百貳拾壹番地附近ハ、煙消曲輪ニテ、北條時代ニモ、火藥庫在リシ所ナリ。

當城ハ幕府ノ重要トナセシ城郭ニテ、大破ノ修繕ハ幕府ノ直營トナセシガ、大手門ヲ入リ、廣小路ヨリ二ノ丸ヲ望ミ視レバ、自カラ江戶城ノ二重橋ヲ彷彿セシムルモ、現存ノ老樹地勢等ヨリ推考スレバ、大差ナカルベシ。本丸等ノ位置ニ就テハ、北條時代ト其儘ナルヤ否ヤノ說有新玉町壹町目、舊新宿町ノ宿ノ入口ニハ、國道ヲ狹ミ左右ニ土手ヲ築キ、土手外ハ松並木トナリ、其ノ後方ハ兩側共ニ溜池トナリ、山側ノ池ノ東ハ宗福寺、西ハ此處ヲ起點トシテ今ハ小田原町ト、村落トノ多クハ境界ヲナセル、北條時代ノ外郭ノ遺蹟ナリ。其ノ時代ニハ此邊ヨリ、海岸ニ沿ヒ板橋附近ニ出タル道路ノ有リシガ如シ。

溜池ヨリ北ハ澁取ニテ、大新馬場ト澁取ノ境ニハ、澁取ノ門跡アリ。元祿ノ頃迄ハ礎石モ存シタリト。北條時代ノ外郭趾ハ、今モ斷續シテ寺町境ヨリ、谷津荻窪ノ境ヲ經テ、水尾ヨリ板橋ヲ過ギ、大久寺裏ニ出テ、新久海岸ニ至リ、今ノ海岸防波堤ト絡ミ合ヒ、正恩寺下ノ老松蒼々タル土手ト連絡シ、代官町下ニテ堤外トナリ、萬年町ヨリハ堤防ヲ出入シ、古新宿ノ北側ノ家裏ヨリ、新宿ノ町境ニ在ル、海側ノ土手ニヨリ、江戸口見附ニ連續セリ。見附ハ東向ナルモ、南向ニ番所ヲ置キ、新宿ヨリ唐人町ノ曲角、百七十六番邊ノ、南手ノ道路ヲ狹ミ、左右ニ土手ヲ築キ、土手内ノ唐人町ヲ過ギ、青物町ト壹町田大手小路ヲ境スル處ニ、東ニ面シテ大手先黑門ヲ構ヘ是ヨリ内ハ大手小路ナリ。

海岸ハ黑船渡來ニ覺醒シ、十字町ノ新久七百七拾二番地、幸町ノ代官町四百十八番地、萬年町ノ萬町三百九十番地等ノ、參ケ所ニ砲臺ヲ築造シ、數門ノ大砲臼砲ヲ常置セシガ、維新後ニ徹（撤）去シ、大砲ハ東京ニ輸送シ、土地ハ後ニ拂下ゲ民有トナレリ。

北口ハ綠町三百十六番地、三百貳拾三番地ヨリ、樋詰橋ヲ架シタル澁取川迄ハ、兩側共ニ土手トナリ、松杉ノ大木ハ鬱蒼トシテ東向ニ大木戸ヲ設ケタリ。是ハ北條時代ノ井細田口ノ、跡ナルヤ否（ヤ）ハ判然セザルモ、一名ヲくづれ門ト土稱セシハ、天正ノ役ニ北條氏直ノ、此門ヨリ退城シタリトノ、傳說ニ因リシナリ。西方ノ久野村道ニモ、小木戸ヲ構ヘタリ。番所ハ左方ノ法授寺ニ接シテ置キ、土手ヨリ竹ノ花町ノ境迄ハ、先町ト唱ヘシ足輕長屋トナリ、木戸ト長屋ノ中間ハ、道幅モ廣キヨリ廣小路ト稱シ、木戸ヲ土俗ニハ、穀留ト呼ビ習（ハ）シタルハ、大久保家ニテハ、貢米ノ上納以前ニハ、農家ノ賣米ヲ許サヾレバ、此木戸ヲ越ヘテ、市中ニ持出スヲ禁ジタンバナリ。

早川口モ小坂ノ在リタル八百七十二番地先ノ邊ニ木戸ヲ構ヘ、其以内ノ東側ハ、大久保家ノ濱御殿ニテ、西側ニハ感應寺在リ、他ノ兩側ハ共ニ總テ侍屋敷ナリシ。

昔ノ小田原宿ハ、山角町ノ足輕長屋ノ尻ヨリ、萬町ヲ經テ、新宿ノ足輕長屋ノ尻迄ト、青物町ヨリ大工町、須藤町ヲ經テ、竹ノ花足輕長屋迄ト、茶畑町ヨリ、代官町千度小路ヲ經テ、高梨町ノ裏通リヨリ、鍋町古新宿、此他ニ安齊町誓願町ノ以上ハ町家ナリシモ、其以外ハ總テ藩士ノ屋敷地ナリ。

新編相模風土記稿ニハ

小田原

江戸より貳拾里拾町三拾八間　東西貳拾町五拾六間

普光院	稱往院	敎德寺	西光院	大蓮寺	玉傳寺
三光院	大久寺	妙光院	感應寺	傳肇寺	報身寺
潮音寺	光圓寺	圓福寺	正恩寺	無量寺	德常院
妙泉寺	妙經寺	福田寺	蓮昌寺	寶安寺	安國寺
誓願寺	蓮上院	善照寺	三乘寺	本源寺	大乘院
法授寺	庭松寺				

元治の宿村繪圖には

小田原

板橋村迄拾六町三拾壹間

三乘寺　善照寺　蓮上院　教德寺　稱往院　誓願寺　安國寺　本源寺　寶安寺
法授寺　西光院　德常院　無量寺　妙泉寺　妙經寺　福田寺　圓福寺　正恩寺
蓮昌寺　大蓮寺　潮音寺　報身寺　感應寺　妙光寺　大久寺　光圓寺　傳肇寺
玉傳寺　庭松寺　三光寺

小田原宿の上方見附を西に出れば、板橋村にて、新編相模風土記稿には

板橋村
江戸より貳拾里貳拾貳町貳拾六間　東西拾三町南北六町
家數百參拾六軒
香林寺　宗福院　宗久寺　靈壽院　興德寺　妙福院　妙安寺　本應寺　蓮船寺
蓮生寺　常光寺　善榮寺
元治の宿村繪圖には
板橋村
小田原迄十六町三間
人家百參拾五軒
蓮船寺　妙安寺　本應寺　宗久寺　蓮生寺
常光寺　玉寶院　宗福院　量覺院　妙福寺　靈壽院　貞德寺　善榮寺　香林寺

地藏堂を過ぐれば路は小登りの松並木となり、妙福寺の祖師堂の御塔下より少し下れば、風祭の村境となる。

新編相模風土記稿には
風祭村
江戸より貳拾壹里　東西六町南北七町
家數八拾五軒
妙覺寺　萬松院　寶泉寺
元治の宿村繪圖には
風祭村
板橋村迄拾六町貳間
石垣山麓迄九拾五町程
人家七拾五軒
妙覺寺　萬松院　鳳泉寺

現今は人家建ち續きたるも、村内萬五郎橋の東際なる、南は貳百貳拾番地、北側は貳百八拾六番地は、一里塚の在りし地にて、新編相模風土記稿には
風祭一里塚、東海道側ニ雙墳アリ。高各一丈塚上ニ榎樹アリ、圍各八九尺。東方小田原宿、西方ハ湯本茶屋ノ里墳ニ續ケリ。

とある。是を西に過ぎ、人家を離るれば、又松並木の路となり、其の中程は、入生田との境をなす。新編相模風土記稿には

入生田村

江戸より貳拾壹里六町　東西六町八間南北貳町五拾間

家數三拾軒

紹太寺

元治の宿村繪圖には

入生田村

風祭村迄六町五間

人家三拾四軒

紹太寺

紹太寺は稻葉丹後守の建立にて、山門に隱元禪師の、長興山の大なる横額を掲げ、門前の蓮葉形の大水盤は、河村瑞軒の寄進なり。門前を過ぎ人家を離れ、並木道を少し登り、駒留の石橋は湯本との村境にて、人家の山手に三軒並びたる　字三ツ屋より、だらだら登りを向ふに下れば、人家數軒ある山崎にて、兩側に松並木ある坂路は戊辰の古戰場なり。街道の海手に在りし早川の流れは、三枚橋にて街道を横斷して山手となる。直行すれば、湯本溫泉及び七湯の湯場道なるも、西に長さ貳拾貳間の三枚橋を渡れば、人家貳拾四戸　軒を前ぶる湯本の下の

宿にて、山手にある山門に、朝鮮人雪峯の書せる、金湯山の額を掲げしは、北條五代の墳墓ある早雲寺なり。其の昔は眞覺寺と號せしと、或る書にはあるも、寺傳には春閣寺なりと聞けり。されど今は正否何れなるかを證する文書も早雲寺には傳來せずと。字中宿は人家も拾余軒あり、休み茶屋の傍ら細工の挽物、箱類を商ふ店舖もありて、湯本湯場への近道あり。新編相模風土記稿には

湯本村

江戸より貳拾壹里三拾四町　東西貳拾六町南北五町

家數七拾六軒

早雲寺　正眼寺

元治の宿村繪圖には

湯本村

入生田村迄拾七町三間

早雲寺　正眼寺

地藏堂を右に、曾我兄弟の木像を安置する曾我堂の、境内にある正眼寺を左にして、小坂を登れば、地方の人は臺の茶屋と呼ぶ湯本茶屋村にて、戊辰の箱根戰爭に、遊擊隊の本陣を構へし爲に、一村兵火に燒亡せられたり。此の村の北側百拾八番地、南側の貳拾七番地は一里塚の跡なるも、今は人家となれり。

明治天皇の御東幸には、御小休所を此の地に新設したるも鳳輦の大なりし爲に、奉安なし能ず其の儘に御通過

在せられしとの傳説あるも、如何のものなりしか。此の地も手廣なる休茶屋數軒あり大名なども休息し、傍ら細工物を商ひゐたり。新編相模風土記稿には

湯本茶屋村

江戸より貳拾貳里　東西拾町南北貳拾町

家數貳拾七軒

元治の宿村繪圖には

湯本茶屋村

湯本村迄貳拾貳町壹間

人家三拾三軒

兩側に松杉の並木ある石數道を登り下りして、猿澤橋、二の塔橋を渡れば、程なく須雲川村なり。戊辰の戰役には、五月廿六日の午後八時頃に、湯本茶屋に放火し、隊長の伊庭八郎は片腕を切られて戸板に乘り、八十人計りの人數にて此の村に退却し來り、武器彈藥負傷者の運搬、道案内の人足を命ぜられ、違背すれば放火もせむ樣子なれば、恐はごはながら、命ぜらるゝまゝになせしに、道案内の貳人は翌日に至るも歸り來らず、村の人々は寄りより、心配なしたるに、兩人は中途より、山林に逃入り、早川山に潜伏し、夜に入り漸々歸村せしと。古今共に戰時人情さも有るべし。

鎖雲寺には覺勝五郎の墓といへる在り。當寺は文明年間の建立にて、道の右方にありしを、元祿年間に左の山

際、今の地に移したりとの説なれば其の時代より在りし部落なるべきか。忍の瀧は右の岩壁より落下す。須雲橋は長さ六間程にて、須雲川は左の山間より流れ來り、橋下にて道路を右に横斷し、湯本の三枚橋を經て、末は早川となり海に入る。橋を渡れば瘤取に奇切有りと、人々の汲み取り行く、弘法大師の瘤水石を右にし、女轉し坂を登れば、割石にて畑宿との境界なり。此の割石は巨大なりし爲に、和宮殿下の御下向に、參拾六人持の大長持の通行に差支へて、割取られ終に一角を殘されしも、宮は中仙道を通過となり、荷物のみは東海道を下りたり。新編相模風土記稿には

須雲川村

江戸より貳拾貳里貳拾四丁　東西十四町南北一里

家數三拾軒

元治の宿村繪圖には

須雲川

湯本茶屋村迄十七町拾七間半

人家三拾三軒

また並木ある石數坂を登れば、右方の山際は施行場なり。新編相模風土記稿には

施行所。石割坂ニ在リ、文政七年江戸人加瀬屋友七毎年五拾兩ヲ出シ、人馬ノ險路ヲ、跋涉ノ勞苦ヲ憩シメンガ爲ニ、施行所ヲ建タリ。

坂を向ふに少し下れば、寛政十年に石造となせし千鳥橋にて此の邊の河原には黒燿石もあり。また貝の化石をも、稀には發見すれば、太古には此の高地も海中より噴出せしなるべし。芦の湯の捷路なる瀧坂は、街道の右方にあり。新編相模風土記稿には

畑宿

江戸より貳拾三里　東西貳拾三町南北十八町

家數四十三軒

元治の宿村繪圖には

畑宿

須雲川村迄貳拾六町貳拾間

人家四拾五軒

人家を少し出離るゝと、道の南は四百七番地、北は三十八番地に一里塚あり。是より皂莢坂樫木坂となる。樫木坂以西は權現坂迄は、地質や野火の關係なりしか、並木は在らざりしも、湯本中宿より、樫木坂迄の松杉の並木は、惜くも明治四十三年の頃、縣會の議を經て金貳萬餘圓にて賣却したり。

二子山を前に望み見て登れば、山の左麓は笈平にて、名物の甘酒を賣る茶屋あれば、只甘酒ともいへり。茶屋は以前は、道の左手に三軒ありて、多くの旅人は殆ど休息なしたれば、相應の繁昌もなしたるに、維新の後は蒸氣船に乘る者次第に多く、人の通行も荒びれて、壹軒となりしに、汽車の東海道に開通してよりは、甘酒茶屋も

行き立たず中絶したれば、雨雪の時期には、旅人の殊に困難なすを見るに忍びず、畑の部落にて打寄り協議なしたるも、引受くる者もなかりしに、俠氣ある石川忠次郎が　責任を負ひ、或る者に後援して道の右側に家を移し、再度甘酒茶屋を始め、副業として炭燒をなさしめたるに、通行人は旅費窮乏の爲、止不得して徒歩する極めて少數の人々にて、收益の有らざれば辛抱して居住する者なく、然れども今更ら手も引兼ねて、遂に畑の自宅を引拂ひ移住し、他の勞働の利益を以て、日々を暮したるに數年以前に死亡した。寡婦となりしお俊さんは、亡夫の遺志を繼ぎ、親類の不利なりと、返對するに不拘、子供の他に勞働するの補給に依り、人里離れし山中に開店し、通行人に便益を與へ居るは、何れの時にか、其の隱德も顯はるゝ期もあるべし。

箱根山中の、道路の大部分は、中央の幅貳間程は、丸石割石を敷詰め、雨水に破壞するを防ぎたるも、石滑かにして、馬は足を辷らすの恐れあり、左右の石なき處を選みて、多く通行したるも、道路の修繕は容易に非ず。其の費用も多額にして、助鄕の村々は一ケ年に拾軒に付、人足壹人を出したるが此の割合は一軒の間口の標準は、六間と定め、三間の家は半人を負擔させたるが、是は金錢を課出するの割合にて、箱根山中の村方にて、村内の工事を引受け、領主役人が出張して、監督はなしたるなり。

於玉坂白水坂を登り、權現坂よりは、湖面の鏡の如くに現はる。坂を下れば杉の並木路となる。六地藏を經て字三つ屋には、一里塚あり。新編相模風土記稿には

箱根一里塚、小名吉原久保ノ路傍ニアリ、高五尺八寸幅二尺五寸上複樹生ズ。東ハ畑宿西ハ山中新田ノ一里塚ニ續ケリ

又並木道を過ぐれば、字新屋は數軒の休茶屋あり。旅人は關所通行の仕度などにて、休者も多かりしが、戊辰の戰爭に燒亡の後は、關所も廢止なりたれば、新築して居住する者なし。關所を過ぐれば箱根宿にて、新編相模風土記稿には

箱根宿

江戸より貳拾四里　東西四拾町南北四十町宿内八町貳拾四間

本還寺　念稱寺　萬福寺　本迹寺　與福寺　極樂寺

足柄郡の東海道は、箱根宿にて終りとなり、是より以西は伊豆の國なり。明治となり人力車の發明迄は、乘物として馬駕籠のみなりしが、人力車の增加するに隨ひ、道路も追々改鑿をなし、坂道も平坦となり、東京より小田原迄は、馬車人力車の往復をなしたるも其の以西は依然と馬駕籠なりしに、明治十年頃より湯本村の山崎迄車道を開き、其の後に同十二三年の頃には湯本の溫泉場迄車道を擴築して便利を得たるが、明治二十年の七月には、東海道鐵道の國府津に達したれば、同二十一年の十月より、國府津湯本間は鐵道馬車となり、後には動力を變更し電氣鐵道として、營業をなし來りしに、明治三拾七年に至り、一大椿事を起さむとしたるは、甚だ恐れ多き事なり。

大正天皇の未だ東宮にて、箱根宮下なる御用邸に御避暑著在せられ、國府津より電車に召させられ、何の御障りの事もなく御發車となり、小田原も過ぎ、湯本の前田橋に程近くなりたる頃、御乘車の俄に逆轉を始めたるが、車の齒止も何等の功をなさず。供奉の人々は手に汗を握るのみにて、驚きたるも何の手段をも施すを得ざりしに、御乘車の御發車後に、國府津を出發したる、普通の客車は後方より進行して板橋の御塔坂を降り來りたれば、皆々一層に恐懼し、聲を揚げ帽を振り、普通車を退走させむとなせしも、何等氣の付きたる樣子もなく、御乘車は少し線路の下りとなりたれば、逆行の勢ひを增したるが、普通客車は漸々氣の附きしか退却を始めたるも、折惡しく小登りの線路となり、意の如くにならずして兩車の間纔かに數尺までに接近したるも、夫より距離は追々に增し、供奉員も聊か心を安むじたり。斯の如き危急の接迫したる場合にも、何事もなく在せられしより恐察し奉れば、御代は彌榮へに榮へますらむと、畏こくも推知し奉る。當時小田原助役にして町長代理なりし、片岡永左衛門の日記、明治三十七年七月八日の條を左に揭ぐ

八日卯　夕刻ヨリ雨

午前八時出勤、十一時發電車ニテ國府津停車場ニ至リ、宮ノ下ニ御避暑ノ裕仁親王

雍仁親王兩殿下ヲ奉迎シ、第壹車ハ兩殿下供奉員、神奈川縣警部長、第二車ハ供奉員並ニ奉迎ノ郡長警部、仙石原宮城野溫泉ノ三村長、其他二三ノ奉迎人、小田原電氣鐵道株式會社長森田、同工務課長同社員ト共ニ乘車シ、殿下ノ御乘車ニ連結シ、普通旅人ハ他ノ車室トナシ、數分時ヲ後レテ發車トナシ、御料車ハ十二時ニ國府津ヲ出發シ、湯本前田橋ヨリ凡ソ一町半ノ距離迄ニ至リシニ、同鐵道線路ハ屈曲ノ箇所ニハ常ニ油ヲ塗抹シ、圓滑ナラシメシニ、其油ノ爲ニ纔カニ車輪ノ後方ニスベルヤ否ヤ、墮力ハ益々勢力ヲ增シ、非常ノ速力ヲ以テ背進ナシタレバ、或ハ脫線ヲセザルヤト氣遣ヒタルモ、如何トモナス不能、進退谷リシニ、小田原發ノ普通旅

客者ハ、後方ヨリ進行シ來リタレバ、是ト衝突ヲ來スハ必然ナレバ、帽ヲ振リ聲ヲ揚ゲ、狂氣ノ如ク種々ノ動作ヲ以テ、退却ヲナサシメントスルモ、距離ハ益々短縮シ、一同安キ心ハ無カリシニ、漸々後車モ退却ヲ始メ、大窪村御塔ヲ去ル二町斗リノ、鐵道線ノ複線ニ至リ、地勢ノ少シク高クナリタル爲メ、隋力ヲ減ジ停車シ、衝突ノ災厄ヲ免レタルモ、最モ短距離ハ兩車ノ間纔カニ貳尺斗リトナリシ時ニハ已ニ衝突セント思ハレタリ。拙者ハ衝突ナスノ覺悟ヲナシ、顚倒ヲセザル爲メ、足部ニ力ヲ込メ心ヲ安靜ニナシ得タルハ、多年煉磨ノ功カト、心竊ニ欣悦ニ禁ヘザリシ。午后一時四十分再度ノ進行ヲ始メ、二時湯本ニ御安着アラセラレ、宮ノ下ニ向ツテ御發車遊サレタリ　云云

箱根御關所日記抄

相模國足柄上下の兩郡は、甲斐駿河伊豆の三國に接し、德川時代には郡内の根府川、箱根、仙石原、矢倉澤、河村、谷ヶ村の六ヶ所に關所を構へたるが其の内にて箱根の關所は東海道の要衝なれば、通行する旅人は頻繁にして、他の關所の比に非ず隨つて事故も亦少なからず。其の現存する關所日記は日記とあるも日々の事を、只だ筆記せしにあらず、前例古格として事務の、參考となるべきもの及び質問應答の扣にして、元祿二巳二月十一日には、幕府より囚人として、松平越中守に預けられし、喜多見若狹守主從三人を、幽閉の爲に領地桑名に護送に際し、箱根關所を通過なせしが、松平家よりは鄭重の取扱をなし、貳百八拾壹人にて嚴重に道中を警衛なしたり。御關所日記に

一先年喜多見若狹守樣御事　松平越中守樣に御預ケ　若狹守樣桑名江御越候節　越中守樣之御直判御證文ニ而關所相通申候哉　其節之樣子委細遂吟味可申上之御旨

一若狹守樣御通之節之扣帳見申候處　元祿二巳二月十一日若狹守樣御關所御通　御家來今泉金大夫加崎與右衛門兩人乘物ニテ御供

一百四拾貳人家中上下　四拾人足輕　九拾九人中間　貳百八拾四人內頭取　富岡仁右衛門大黑彥兵衛大河內十兵衛　若狹守御供ニ而罷登申候由覺書有之候

喜多見若狹守に就きては、寛政重修譜には左の記載がある。

寛政重修譜卷五百四十

重勝　久大夫　喜多見若狹守勝忠が二男

重治　松之助　茂兵衛　實は喜多見若狹守勝忠が五男重勝が養子となる

延寶元年十二月二十六日、はじめて嚴有院殿に拜謁す。天和三年十二月廿一日家を繼。元祿二年閏正月三日、さきに朝岡縫殿頭直國重國、重治が許に來り、刄をあらはし鬪論し死に及ぶ。このとき重治其場を立退、剩事の始末を糺明せらるゝに至り、僞を構へ陳し申せし事士たるものゝ、所行にあらずとて斬罪せらる。

延寶八年には見せ物女の通行がある。詳細は判明せざるも、興行の女と思はる。

見せ物女貳人の內　小女壹人乘物壹挺　從江戶攝州大坂本町迄　箱根關所無相違可被通候　造月屋町家持左衛門女之由　其所之名主五人組之者共致請狀並喜多村彥右衛門　奈良屋市左ェ門樽屋藤左衛門加判、其上嶋田出雲守及甲斐庄喜右衛門　及斷付如此候以上

正寶八年十一月十一日

內藏　藤

山城

備後

右京

箱根

人改中

寶永二年に幕府より、出家、山伏其の他に就き改方之御尋ねが有り、其の答申の爲定番人より、關所御番人に覺書を差出したが、是は定番人は輕き身分ではあるが、代々の在番人であり、御番人は番頭始め、小田原より時々交代の番人故に、御尋ね等の場合には定番人の申立を徵したり。

覺

一箱根御關所國々ゟ　罷登候女並手負囚人　首死骸等相改候趣左之通

於箱根御關所登候通女之方　御定目之通御留守居樣方　御證文引合相改相通申候　御證文持參不仕候ヘバ一切通不申候　手負囚人首死骸是又　御定目之通御留守居樣方　御證文引合相通申候　御證文持參不仕候ヘバ　一切相通不申候

一亂心者罷登候節相改候趣左之通

登へ通候亂心者　御定目之通御留守居樣　御證文引合相改通申候　御留守居樣御證文無御座候ヘバ　一切相通不申候

一出家山伏　御師行人菰僧並前髮有之者ハ　罷登候者共相改候趣　左之通

出家山伏御師行人菰僧並前髮有之候者登ニ通候者　取祿之方ゟ之手形持參　仕候ヘバ相改通申候　又ハ手

形持參不仕候人共　遂吟味疑敷儀モ　無御座候得者　相通申候　右之内女ノ紛敷相見へ候者ハ　御番所ニ
呼寄入念改相通申候

一御直參之外　御三家樣始侍下々迄　人數多少ニ寄らず登ニ罷通候ニハ手形不及斷承屆相通申候　乍然前髮有
之者之内又ハ坊主之内女ニ紛敷相見江候者ハ御三家樣之御家來ニ而も御番所江呼寄入念改相通申候　其外
御大名樣方御旗本樣方之內御家來之判鑑箱根御關所江參居候分ハ持參之手形引合相通申候　判鑑不參候御
方樣ハ同家中之者ゟ之手形持參仕候へバ其手形之類相改相通申候　又ハ手形持參不仕候者ハ　遂吟味承屆
不審之體も無御座候へバ相通申候

右之通前々ゟ　相改相通申候

一町人百姓罷登候者共相改候趣　左之通

町人百姓登江罷通候ニハ其處之大屋名主又ハ所緣之者ゟ之手形　持參仕候付相改相通申候又手形持參不仕
候者ハ遂吟味不審之體無御座候ハ　相通申候

右之通相改來申候

一盲女並こせ座頭　罷登候者共ハ相改候趣　左之通

育女登江罷通候ニハ御留守居樣方女御證文ニテ相改申候こせ之儀ハ常體之女同前之儀ニ　相心得罷在御留守
居樣方御證文持參不仕候得ニ而罷在候併只今迄こせと有之候御證文ニテ罷通候義相見不

申候座頭之儀ハ所緣之者手形持參仕候へバ改相通申候又ハ手形持參不仕候者ハ　遂吟味不審之體も無御座
候へバ相通申候　支配檢校ゟ斷ニ而相通候例無御座候
右之通前々ゟ改來候

一猿樂並芝居傀儡師類罷通候者相改候趣左之通

猿樂並芝居傀儡師類登江通候ニハ所緣之者ゟ手形持參仕候へバ改通申候又ハ手形持參不仕候者ハ遂吟味不
審之體も無御座候へバ相通申候

右之通此度松平主計頭樣ゟ箱根御關所上下改之義　御尋被遊候就夫改次第　右書附之通稻葉古丹波守樣　御代
以來先定番人之者共　私共江申傳相改來候趣　相違無御座候以上

寶永二年六月

箱根御關所
定御番人

御番人宛

書中の稻葉古丹波守は、丹後守の誤り成る可く、古とは大久保家との國替は貞享三年なれば、其の以前の領主を指したる爲に、古字を加へしなる可し。

享保元年にも又幕府より、箱根御關所に於ての取扱方の御尋があり、定番人より御番人に例規を差出した。

一公儀宿次御狀箱往來共　左之通候事

享保元年子九月瀧川播磨守樣江差出候扣

此趣ハ　登江通候御狀箱小田原御繼役之者ゟ人足手形差出申候　下りへ御狀箱ハ箱根宿問屋共方ゟ注進書御番所江差出申候付　晝夜共先規ゟ改通申候

一公儀御用達町人通候節之事

此趣ハ　通手形持參仕候へバ改相通申候　又ハ手形持參不仕候而も斷承屆　先規ゟ相通申候

一箱根夜中歸馬通候　節之事

此趣ハ　右之馬翌朝ゟ御傳馬相勤候ニ付　夜中四つ時前後迄罷越候分　先規ゟ相改通申候

一疑敷手形持參致候者之事

此趣ハ　拵手形仕自分之致印形罷越候者ハ　改之上ニ而印形取上ケ　御大法之趣申聞セ候而　先規ゟ相通不申差戻申候

一無手形ニ而登江參候　者之事

此趣ハ　先方參候處相尋　又ハ只今迄罷在候處ヲ相尋　慥成る樣も相見江候得ハ　先規ゟ相通申候

一御留守居樣ゟ被差出候　御證文取扱候節之事

此趣ハ　御印形にしみ等有之歟　又ハ御證文ニ墨附よこれ等有之候節ハ　御證文持參致者江右之譯申聞候而其者方ゟ添證文取　相通申候

一御領分御厨百姓登江通候　節之事

此趣ハ　下リ之節小田原江罷越候由申置　歸之節其段相屆させ通申候

一權現領百姓登江通候　節之事

此趣ハ　權現別當分ゟ通候由申聞候へハ　相改先規ゟ無手形ニ而相通申候

一下江通候　女之事

此趣ハ　才領等も無之通掛候へハ　呼寄何方へ參候や相尋所緣之者方江罷趣候段相斷候へハ　登候節ハ御留守居樣方之御證文無之候へハ　通不申候由申聞而相通申候

一下リ江不審成男女通候節之事

此趣ハ　男女共ニ才領なしニて　罷越見分不束ニ相見へ候者ハ　御關所前ニ扣させ　箱根問屋方江見送人足申付　先規ゟ跡へ差戻申候

一箱根宿新谷町江　通路之事

此趣ハ　箱根宿ゟ新谷町江諸緣之者御座候而　通行致來申候

享保元子九月

箱根御關所定御番人

立木嘉大夫
井上傳兵衛
塚本　倉藏

御番人衆

享保四年には幕府より、御關所の修繕をせられた。御關所は領主の預りでは有りしも、修繕等は幕府が直轄せ

しなり。

享保四年十月十七日

一川田玄蕃樣箱根宿迄御越　今日御關所上ノ間江御上り御普請御見分被成候　尤御手代附添罷越候　小田原ゟ御目附青木武助御普請奉行小泉伴左ヱ門當宿迄罷越御通之節、江戸口御門外ニ罷出御時宜仕候御番人ハ不殘下座

享保十三年には、吉家將軍が日光に社參になり其の留守中江戸城の警戒として、箱根關所も領主小田原の城主大久保加賀守より、家老岩瀨賴母外拾人に、加番せしめられたり。

享保十三年四月十二日

一此度日光御社參ニ付　四月十二日岩瀨賴母御越御目附三浦彌五大夫被參並爲增御番松下段右ヱ門中垣鄕大夫兩人御足輕五人御中間壹人罷越四月廿一日晝八ツ時還御相濟候段廿二日晝八ツ時小田原ゟ申來相詰候面々不殘引取申候

箱根御關所附近の山々は、關所の要害山として、樹木の伐採は勿論、人々の出入も禁じ麓及び附近の各村は、時々關所番人の巡視警戒をなしたるが、享保十九年正月九日の條に其の區域の記載あり。

享保十九年正月九日御要害山之事

榎澤　屛風山　文庫山　神宮山

右四ヶ所竹木一切伐取不申候樣前々ゟ申附置候

鞍掛山　孫介山　駒ヶ嶽　二子山　堂ヶ嶋

駿河津ゟ往還境木迄湖北向山々

右之方御要害山々ニ御座候

元箱根　畑宿村　須雲川村　湯本村　塔之澤村　大平臺村　底倉村　宮城野村　芦湯村　芦川村

三嶋町　小田原町　新屋町　新町

右御關所見分掛り場所

幕府の御關所御條目に、乘物にて關所を通過する者は、乘物の戸をひらかず、關所を通過すれば番人は何處迄も其の駕籠に附行きて、戸を開かせたるが、寶曆二年尾張中納言の通行に、御三家の威勢を弄し乘駕の戸を開かず、關所を通過したるに番人の附行き、條目の大法を申立て、途中にて開かしめしが、古語に自ら侮る者は人に侮らると云ふ事が有るが、將軍の親藩が幕府の大法條目を、遵守せざりしは既に幕府の權威に痕の入りかけしを大ならしむるものにして無謀も甚しかりしが、自己の權弄の爲には何もかも、忘却したるなるべし。

寶曆二年三月十日

一尾張中納言樣御下り御通行之處　御駕籠之戸明キ不申候付御大法之趣御供中迄申上候内段々御乘物御通過キ被成候付大津傳左ヱ門御乘物ニ相續御大法之趣段々前格之通御供中迄申上候處御途中ニテ水岡丹左ヱ門與申仁御駕籠脇より罷下り　委細御大法之通申候處御聞屆被成御大法之通相濟申候右之段小田原ニ申下し候事

山中の事故に要害山にも、野火の起る事も有りしが、其時には消防の差圖に、關所より御番人が出張なしたり。

寶暦十年二月十一日

一夜六つ過駒ヶ嶽野火ニテ　權現森ニ火移可申樣子ニ付御宮爲固河合源四郎豐原文大夫定番人立木德右ェ門御足輕並町人召連罷越　四ツ時頃罷歸候

何の世にても困るは氣違なり。正氣の氣違も困るが眞正の氣違には如何に關所でも、持倦厭なり。

寶暦十二年八月八日

一今朝五ツ半頃九郎判官義經と申三十才計男烏目壹貫文計首ニ掛罷越候付定番人相尋候處申口モ不宜見送人足兩人申付御境目迄配府ヲ付送り申候尤足輕兩人畑迄爲見送申候

寶暦十四年には朝鮮國より、幕府に進獻の鷹が箱根關所を通過の爲に、加番人と馳走の送迎に、小田原より藩士も登山をなせり。

寶暦十四年正月四日

一進上御鷹爲御馳走堀江內藏介一紙手形ニテ左之通小田原ゟ來

一上下貳拾貳人　御鷹送り用　相馬七左ェ門

一上下五人　加納靱負

一上下貳人　豐原七兵衛

一上下貳人　酒井田覺助

一上下三人

正月四日

一上下拾七人

右鷹通行ニ付箱根來る

鷹の通行に就きては左の記載あり。

一進上御鷹拾七釣三拾居

宗對馬守樣御家來內野糺附添

右之通未ノ下刻頃御關所通行　跡乘相馬七左ェ門御關所御番人伴頭裏付上下着平御番羽織袴着小頭御借羽織自分袴着足輕對支度御關所飾物平常之通

同年の同月に進上の馬が通行になつたが、馬と鷹が別々に通行したのは此の一行の道中には多數の人馬を要し、傳馬人足の繼立の支障を、避けた事と思はれるが此の時にも馳走や關所の加番に小田原より、多數の藩士足輕中間が箱根に登りたり。

一從朝鮮國進上之御馬通行ニ付　箱根宿迄御馳走罷出候御中間共堀江內藏介一紙證文青木武左ェ門關所持參

阿辻　直兵衛

中村　嘉吉

御用人　牧野嘉右衛門

堀江內藏介一紙證文寫

青木武左ェ門

一上下貳拾三人
一上下貳人
一上下貳人
一上下四人
一上下貳人

篠崎次郎八　木曾說治　伊東榮助

一上下貳人
一目下參人

諸組之者小頭共五拾人　中間九十人

右者此度朝鮮人來朝ニ付進上之御馬箱根休爲御馳走罷越候付箱根宿並新屋兩所止宿致候間逗留中御關所往來無滯可被通候以上

寶曆十四年正月廿四日

堀江內藏介

箱根御關所

御番人中

加納　靱負
井澤門太夫
若林源太兵衛
富岡　八　郎
酒井田　覺馬
河合　與惣治
中山鄕右衛門
堀川太左ェ門

鷹之通行の節と同じく、左の記載あり。

正月廿九日

朝鮮國ゟ進上之御馬　今日正巳時頃無滯通行跡乘加納靱負馬醫堀川太左ェ門御馬引續キ罷通右御馳走ニ付箱根宿江罷越候面々通行相濟追々卽日罷歸申候

政費の節減は古今を通して、爲政者は考慮を煩したり。箱根關所の日記にも其の影響が見ゆ。

明和四年八月十四日

一只今迄御證文間違等有之候砌　添證文爲致候節者延紙ニ爲認候處　右之延紙御儉約ニ付當時者半紙ニ相成候

添證文之紙稀成事ニ付三十枚程有之候へハ二三ヶ月余も有之候事ニ御座候其旨御用人江相咄申候

箱根御關所の出來たる元和頃は人家も少なく不便の爲に、旅人の御關所定番人の家を頼み、休息等も爲したるに後々は、是が定番人の內職の如くなり、公然と飮食物も賣り休泊もなせしより、專業の旅籠屋より故障の申立も有り、其の筋より注意戒飾も有りしが、收入に影響の爲に其の度毎に等閑に終りしが、天明五年には嚴重に停止を小田原重役より御關所番頭に申達せられたり。

天明五年七月廿三日夜分到來

一以手紙申達候然者石井半左ェ門殿被申渡候者箱根定番人共兼々茶屋商賣泊り屋所致候處今度公義御役人中ニ對相障候筋有之候間以來右樣之儀急度相止メ候樣ニと之儀如是御座候以上

七月廿二日夕　　郡　勇　馬

片切藏人樣

以手紙得貴意候　彌御安泰被成御座珍重奉存候　然者箱根定番人共旅籠屋致候段　被仰聞候段委細役人共江申

聞候處　定番人共儀者所替之節　稻葉丹後守様ゟ引附之者共ニテ　譜代之者と者違候付前々ゟ　旅籠屋と申筋ニテハ無之候得共　此間申達候通旅人休所致儀者　前々ゟ仕遣ニ附其分ニ差置候へ共　此度宿方故障候趣被仰付候ニ付　以來右体之儀無之樣差留申候　右之趣申達度如斯御座候以上

七月廿三日

大西次郎左ェ門樣
神戸近藏樣

御剪紙致披見候　然者箱根定番人共儀御所替之節ゟ　引附之者共ニテ御譜代之者ト違候付旅籠屋ニ者無之候へ共　此間申聞候通旅人休泊致義者前々ゟ之仕遣ニ付其分ニ差置候へ共此度宿方故障候付以來右体之儀無之樣差留有之候段御紙面之趣致承知候右爲御報如斯ニ御座候以上

七月廿三日

岡四郎左ェ門樣

大西次郎左衛門
神戸近藏

天明六年には、家治將軍薨去の爲め、江戸城の警戒として、箱根御關所も番人を增加せられたり。

天明六年九月十日

一公方樣去ル八日巳之下刻　薨御之事

此節小田原ゟ御家老壹人　御目附壹人番士兩人爲增番相詰申候御足輕五人增番中間貳人增人

天明二年よりは、不作が打續き饑饉となり、人心が次第に動搖し七年には江戶に於ても細民の蜂起し、打毀を始め遂に小田原にも波及し、暴動を起したりしが、其の事が小田原大秘錄には

高梨町近江屋江、亂暴者押込ミ候と注進ありける。此節江戶へ御人數出せし故、無人なれば御作事方、大工棟梁などハ武術の心掛ある故、捕方同心助仰付られ、林嘉藏をはしめ本山新作平、岡權六、岡本勝右衛門、小形助三郎、川邊覺右衛門なと、罷向ひける。此時既ニ古新宿小澤屋半七方へ押込ミけると聞へけるが、何れも萬町ゟ古新宿江馳付ける。此時最早新宿町に出て、關村屋佐五兵衛方江押込けると、町役人申聞ければ直樣新宿に出て見れば、道中江俵を山の如く積上げ、五十人斗り何れも緋縮緬の褌一つにて、酒を呑ながらかけや大鳶にて、打こはし居たりけるが、其なりに捨置會所藏角に待合せて、青物町に出る處を御上意の聲諸とも捕手のもの、五拾余人手に手に得もの〳〵を引提げて、何の手もなく三十四人を召捕。其後又捕手の者共引具して、坂部紀池上の中戶屋江相詰、同心の者江若し手にあまる時ハ、我が下知と諸共に切て捨べしと申渡しける處、屈竟の者六人押來るやいなや、坂部の下知と諸共何の手もなく、六人を召捕珠數つなきにして引取、其後板橋に於て五人召捕ける故、騷動忽ち靜りける云云

と有るが、小田原の御厨領にも、一揆が蜂起し小田原に訴願せむと、箱根御關所に迫らむとせり。

天明七年十一月十七日

一以手紙申達候然者　當所小田原町名主佐五右衛門內分にて申出候ハ先刻三島宿平野屋庄左衛門與申者佐五右ェ門方江罷越內分ニ而申聞候ハ御領分駿州御厨村百姓共小田原表江相願候筋有之候と　人數千人程も罷越候由風聞承候付方一罷越候ハヽ役人共申合以ヶ樣にも致なため差戻申候樣ニ取扱可申旨內分申聞候付其通ニ申

附候勿論御關所迄罷越候ハヽ、是又取なため候樣ニ可致候へ共人數多之事候へハ百姓共取々之了簡ヲ以理不盡ニ罷通候節ハ人數多之事ニ候へハ中々制詞相屆申間敷と被存候此段早々申達度如斯御座候以上

十一月十七日

廣中　太次馬
近藤　三郎兵衛
金澤六郎左衛門
永原　新左衛門
梅原　清左ェ門

長野彌十郎殿

一以手紙申達候然者　昨夜申達候御領分御厨村百姓共彌致得心　今朝引拂候段郡組之者共　當町役人共申出候ニ付　猶又御關所ゟ下目附之者　定番人御足輕爲見廻御境目迄差遣候處右三人之者罷歸彌引拂候段申聞候付此段申達候以上

十一月十八日

廣中　太次馬
近藤　三郎兵衛
金澤六郎左ェ門
永原　新左ェ門
岡田　作大夫

長野彌十郎殿

此事件は小田原大秘錄には、左の通りに詳細に記載しあり。

然るに天明の末つかた、駿州御厨領不作の上、懸り御代官森田才右衛門、萬事非道の取り斗らひあり。おのづから怒之匂りて終には、森田才右衛門の髭首を貰はんと、十八ヶ村一同して何もみの笠鍬鎌引かつきて、五百余人眞黑く押出しける。此時箱根御關所爲加勢と角田數馬江、被仰付之所折節病後の事故御斷、依之片切藏人江被仰付らる。續て梅原九郎左ェ門賴頭、相馬小十郎組下を引卒して相詰ける。（虫食）世話役山縣茂次右衛門同役天野嘉一右衛門、山縣十治、杉田和藏、森田万藏、川窪吉五郎、山縣大助、山口宅兵衛、山崎弘藏、居山辰藏、杉田富八、川添三治、川添形助、犬芝直藏、小頭小森佐野右衛門二番ハ坂部糺なり。此時大久保又左ェ門が第一の門人廣中太次馬正映ハ箱根御關所にあつて大きに悅。鍵引提ていも差になさんと、手くすね引いて待居たり。既に百姓共ハ、箱根山中迄押來りけるに、小田原より名々甲冑をかつがせ、御關所江登相詰ける。畑宿の畑右衛門といふ者、才氣の者にて山中に走り付て、小田原の御家中八百餘人、弓鐵砲鎧兜にて畑宿迄御出被成候中々小田原迄ハ參り難し。早々引返し然るべしと申ければ、何もふるへおのゝきて終に止らんと致しける。

鐵砲の御關所を通過するに附きては最も嚴重に取扱ひ幕府老中の御證文則ち手形ならざれば、通行を許可されざりしなり。